

339

279

5 6 7 8 9 10⁰m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



359
279

339-279

井原儀著

新田德川諸
族發祥地

新田名勝舊蹟誌

東京山陽堂發兌

大正
2. 9. 18
内交

新田徳川諸族の發祥地 新田名勝舊蹟誌

例言

一、本書は、古き新田と新しき新田とを世に紹介し、併せて新田郡に於ける郷土誌となさんが爲めに、編纂したるものなり。

新田郡は、群馬縣の東南部に位する蕞爾たる小郡にして、その面積僅に東京の約二倍に過ぎざれども、古來英傑哲士の輩出せし所なるを以て、夙にその名を知らる。初め源義家の子義國こゝに移住するに及び、子孫分れて、新田・足利・徳川・脇屋・大館・岩松・由良・堀口の諸豪族となり、また新井・細谷・大島・島山・村田・一井・長岡・蔵・綿打・金井・田中・江田・今井・田島の諸氏をも分つに至りぬ。これ等の諸族は、率れみな忠君愛國の精神を發揮して、我が國體に精華を添へたることは、國史の證明する所なり。これ等尊王家の精神は、後世再び顯はれて高山彦九郎等となる。本郡は、かく名士を輩出せし所なれば、從ひて史蹟に富めることは、論を俟たずといへども、予はかゝる名士を生みたる土地の山水が自ら他郷のそれよりも、特異の性質を有せざるべからずと信ず。世の行客が山水明媚なる樂園、奇岩削るが如き勝境に臨み、或は宿痾を醫すべし靈泉に遊び、或は丹碧の麗

を盡したる社寺に詣で、或は黒痕淋漓たる書畫乃至古雅掬すべき什寶に接し、或は天地を震動したる英雄の遺跡を訪ひ、或は懐古の情趣を深からしむべき殘礎頽壁の間を徜徉し、或は豐饒なる農田・繁茂せる美林に至り、或は鑛山・水産業地・工場を訪れて、忽ち感想を惹起し、これ等目撃物の由來及び現狀等を知らんとすることは、人情の常なり。こゝに於てか、これ等の説明を記述せる書冊の必要を感ずべし。

然るに予は、歴史的或は地理的に特殊の色彩を放てる新田郡に遊びて、未だこれ等を通俗的に或は研究的に記載せる書のあることを聞かず。これ行客の甚だ遺憾とする所なり、こゝに於て予は、今新田郡の歴史及び地理を簡説して、この小冊子となし、同感の士に頒たんとす。本書説く所、甚だ簡にして粗、加ふるに行文最も拙にして、意を盡さざる所多けれども、聊か往査行樂の業ともなり、或は郷土誌の助ともならば、予の幸これに過ぐるものなし。

一、予は、本書を新田名勝舊蹟誌と名づけしも、實は新田・徳川(世良田)及びその諸族の興亡史に外ならず。されば本書は、新田氏時代の國史を研究するものにも、またその資料となる所少からざるべし。

一、地理は、歴史と密接の關係を有するものなるが故に、互に相聯絡せしめて、これを研究する時は、その興味津津として湧出するのみならず、一念起れば他念もまた從ひて生じ、念々相續して零碎することなし。これ予は地理に歴史を交へて記述せし所以なり。

一、系譜は、歴史を研究するもの、必ず有せざるべからざるものなれば、本書には、出來得る限りこれを掲載せり。されども諸家記する所、同じからざるが故に、予はその稍、信に近しと認めたるものを選びたり。

一、本書中、年代の下に括弧を用ひて、數字を記せるものあるは、則ち西洋紀元なり。こゝは日本紀元を記するよりも便利多きが故に、記せしものにして、他意あらざるなり。日本紀元の元年は、西洋紀元の紀元前六六〇年に當たるを以て、西洋紀元に六六〇年を加ふる時は、日本紀元を知ることを得べし。

一、社寺の緣記等には、事實上疑問の存すべきものあれど、學術の進歩、世の風潮に伴ひて、漸次に滅却するに至るべし。本書には、種々の事情の爲めに、往々舊慣に従ひて、これを記載せし所あり。讀者幸に心して讀まれよ。

一、本書中、字句の左側に圈點を附せるものあるは、讀者をして一目その要領を知らしめんが爲めなり。

一、本書に記載せる統計上の數字は、官廳・會社等の最近統計報告書に據れり。

一、距離の遠近、高度等を示すに用ひらるる哩は、我が十四町四十五間餘(約一七六〇碼)に當れり。また米は我が三尺三寸なりと知るべし。

一、空氣及び泉水等の溫度は、計算上便なるの故を以て、現今普く學界に用ひらるる攝氏の寒暖計を以てこれを示せり。讀者若しこれを華氏の寒暖計の溫度に改めんと欲すれば、則ち(華氏の溫度) = (攝氏の溫度) × $\frac{9}{5} + 32$ の公式によりて計算すべし。

また降水量を示せる 耗^{ミリメートル}は我が三厘三毛に當たる。これを楮目に改算する時は、降水量の一耗は、一坪の面積につきて、約一升八合の割合となる。

一、本書は公務の餘暇、忽卒の裡になりたれば、意に満たざる所多く、誤謬の點もまたあるべし。總べて案内記の類は、屢々補正を要すべきものなれば、讀者の示教を俟ちて、漸次その誤謬脱漏を訂正増補し、以て本書をして、益々完全ならしめんことを期す。

一、終りに臨みて、予は從來著述若しくは校閲したる書名を次に記し置きたるを以て、讀者は必要に應じて、參考せらるべし。

- 歴史書類には、^{英蘭南} 世界近世史 ^{英蘭南} 世界中世史 ^{英蘭南} 西洋歴史綱要(三冊) 日本歴史摘要(六冊)
- 防長十二史傳 世界歴史年表 徳川時代通史等あり。
- 地理書類には、帝國物産地誌 帝國地誌摘要^{訂正} 帝國地誌摘要(二冊) 外國地誌摘要(二冊) 韓國誌
- 帝國地理教科書 外國地理教科書 帝國新地理 外國新地理 ^{中等} 日本地理教科書 ^{中等} 外國地理教科書
- ^中 日本新地理 ^中 外國新地理 ^{新著} 日本地理 萬國地理 日本百科大辭典(地理)^{の部} ^{初等} 尋常小學地理 山口
- 縣中地理 山口縣小地理 ^{新編} 日本地理資料 ^{新編} 世界地理資料(二冊) ^{實業} 日本地理 ^{實業} 世界地理等あり。

- 地圖類には、帝國地理教科書附圖 外國地理教科書附圖 帝國新地理附圖 外國新地理附圖 最新世界地圖(英文) 最新日本地圖 最新外國地圖 ^{暗射} 大日本帝國大地圖 ^{暗射} 修訂大日本帝國大地圖 ^{暗射} 世界大地圖 ^{暗射} 修訂世界大地圖 世界大地圖 日本大地圖 ^{中等} 日本地理教科書附圖 ^{中等} 外國地理教科書附圖 ^中 日本新地理附圖 ^中 外國新地理附圖 最新日本地圖 最新外國地圖 ^用 世界地圖 韓國地圖 ^最 山口縣地圖 山口縣小地圖 山口縣大地圖 ^小 帝國暗射地圖 帝國暗射地圖 外國暗射地圖等あり。
- 修學旅行用案内記類には、足利案内 館林案内 太田案内 太田世良田案内 東武鐵道沿線案内 川俣
- 館林地方案内 日光地方案内 鹽原地方案内 水戸地方案内 銚子地方案内 房州一宮地方案内 中山市川
- 地方案内 鋸山地方案内 百草地方案内 府中百草地方案内 八王子御嶽地方案内 猿橋地方案内 越中大
- 岩地方案内 鎌倉江ノ島地方案内 小田原箱根地方案内 熱海伊豆山地方案内 静岡興津地方案内 防府地
- 方案内 廣島嚴島地方案内 津和野萩地方案内 馬關地方案内等あり。

大正二年九月

著者識

新田徳川諸族の發祥地 新田名勝舊蹟誌

目次

第一編 總説

第一章 地文

位置及び廣袤……地勢……氣候。

第二章 人文

沿革……政治……住民……教育……社寺……産業……産業機關……交通。

第二編 各説

第一章 太田町地方

(1)

總説……縣社高山神社と高山彦九郎……天神山と村社春日神社……八幡山の勝……郷社八幡神社と彦狹島王……郷社八幡神社と新井白石の祖先……浄土宗大光院と新田義重及び香龍上人……曹洞宗金龍寺と新田義貞の墓……新田氏の略系……里見氏と新田氏との關係……金山の絶勝……金山の松茸と法度……金山城址と満月半月の池……縣社新田神社と大中黒の軍旗。

第二章 大間々街道地方

四六

眞言宗西慶寺と義貞自贊の畫像……大島と鳥山……眞言宗聖應寺と舊大光院址……寺尾城址と新田氏……西長岡鑛泉と附近の名勝……蔵塚湯の入及び瀧の入の鑛泉……蔵塚石の採掘場……岡上神社と岡上次郎兵衛……國定忠次の墓……笠懸野と新田義貞の擧兵……石灰製造所……阿左美沼と蓴菜。

第三章 伊勢崎街道地方

五六

眞言宗圓福寺と新田氏の墳塋……由良城址と岩松寶泉閑居の址……横瀬由良氏の略系……眞言宗正法寺と東宮殿下……脇屋氏の故地……脇屋氏の略系……脇屋義助の墓……脇屋義

治の墓……村田氏の故地……反町城址と北條氏邦との古戰場……反町薬師と鳴かすが池……郷社生品神社と義貞の旗擧……市野井と一井氏……一井氏の略系……金井と金井氏……大根と綿打氏……田中と田中氏……皇太子殿下行啓記念碑……村社雷電神社……延喜式内の郷社大國神社。

第四章 例幣使街道地方

七一

高山彦九郎の墓碑……細谷と細谷氏……日本七稻荷の一なる冠稻荷神社……牛澤と孝子……木崎町の今昔……日蓮宗妙高寺と鬼子母神……江田と江田氏……江田行義の城址と江田の池……義貞の冠著松……尾島町と名勝史蹟……岩松館址と岩松氏……岩松氏の沿革及び略系……新田の總鎮守岩松八幡宮……青蓮寺と義重の邸址……金剛寺と板碑……田島と田島氏……堀口館址と堀口氏……堀口氏の略系……二ツ小屋の舟橋と船繫松……安養寺と新田氏……天台宗安養寺と義重の肖像……大館と大館氏……大館氏の略系……世良田村と舊新田莊……徳川氏の發祥地徳川郷……徳川氏の歸依せし天台宗永徳寺……時宗滿徳寺と天樹院尼……村社東照宮と徳川氏累代の墳墓……徳川氏の略系……新田義重夫妻の墓塔……

天台宗長樂寺と徳川岩松兩氏の墳塋……郷社東照宮と三十六歌仙の額……郷社八阪神社と
天王祭……新田館址と總持寺……惡源太義平の墓と清泉寺……北條高時の課税と二體地藏
尊……平塚の毘沙門天……米岡村の古墳……今井と今井氏。

徳川新田諸族の發祥地 新田名勝舊蹟誌 目次終

新田徳川諸族の發祥地 新田名勝舊蹟誌

井原儀著

第一編 總說

第一章 地文

位置及び廣袤 新田郡は、群馬縣上野國の東南部に位し、東は邑樂^{オウラ}山田の兩郡に、西は佐波郡に接し、北は勢多山田の兩郡に、南は埼玉縣武藏國大里郡^{オホサト}に堺す。その東極を九合村大字内島村、西極を世良田村大字上矢島村とし、相距ること三里十町餘。南極は尾島町大字前小屋村、北極は笠懸村大字鹿村にして、五里五町餘を隔つ。面積は十

方里餘、即ち群馬縣の約五十二分の一に當たりて、佐波郡と共に本縣中の小郡に屬す。
地勢 新田郡は、阪東太郎の稱ある關東の巨流利根川(延長八十二里、流域約千方里、灌漑區域約十二萬町歩、航路延長三百餘里)とその支流渡良瀬川との間に介在せる地域なるを以て、土地率ね低平なり。されども東北部には、丘陵性の金山連崗連互せるが故に、稍、高地をなす。

金山連崗は、關東屈指の名峯にして、古生層に屬する火成岩の迸發より成り、茶白山(約九六〇尺)・實城山(約七七五尺)・天神山・八王子山・觀音山・勢至山・太郎次郎山・今熊野山・神藏山・富士山・龜山・根本山・淺間山・梶山・裏山等の十數峯の總稱なり。諸山の名稱に就きては、新田氏支族の金山に城居せし時、天神・八幡・觀音・勢至等を安置せしより、名づけられたるものあり。西山・御所山・茶白山・石尊山・根本山・雷電山・高雄山等の起伏せる地方には、西長岡(亞爾加里泉)・藪塚湯ノ入(鹽類泉)・同瀧ノ入(同上)・姫子(鐵泉)・金山(炭酸泉)の諸鑛泉あり。地味は、一般に肥沃にして、農業に適すれども、殊に南部地方を然りとす。往時この地方には、下野の那須野ヶ原と共に名を知られたる笠懸野の外、所々に林野ありしが、今



笠懸野

は漸次開墾せられて、率ね良田と化したり。

氣候 一ヶ年の平均氣温は、約十四度なれども、最寒の二月の頃は二度に下り、極暑の八月は二十五度に上ることあり。降水量は、一ヶ年一千六七百耗に達し、概して夏季に多く、冬季に少し。夏季には、往々雹雷の災害あり。要するに新田郡の氣温及び降水量を東京・横濱地方のそれと比較すれば、大差なくして、群馬縣中、氣候佳適なるを以て稱せらる。

第二章 人文

沿革 新田郡は、中古藤原氏盛代の頃より源氏の領となり、鎮守府將軍源義家の子義國ここに住し、始めて新田氏と稱せり。次で保元二年(一一一三)この地方は、上西門院の御料

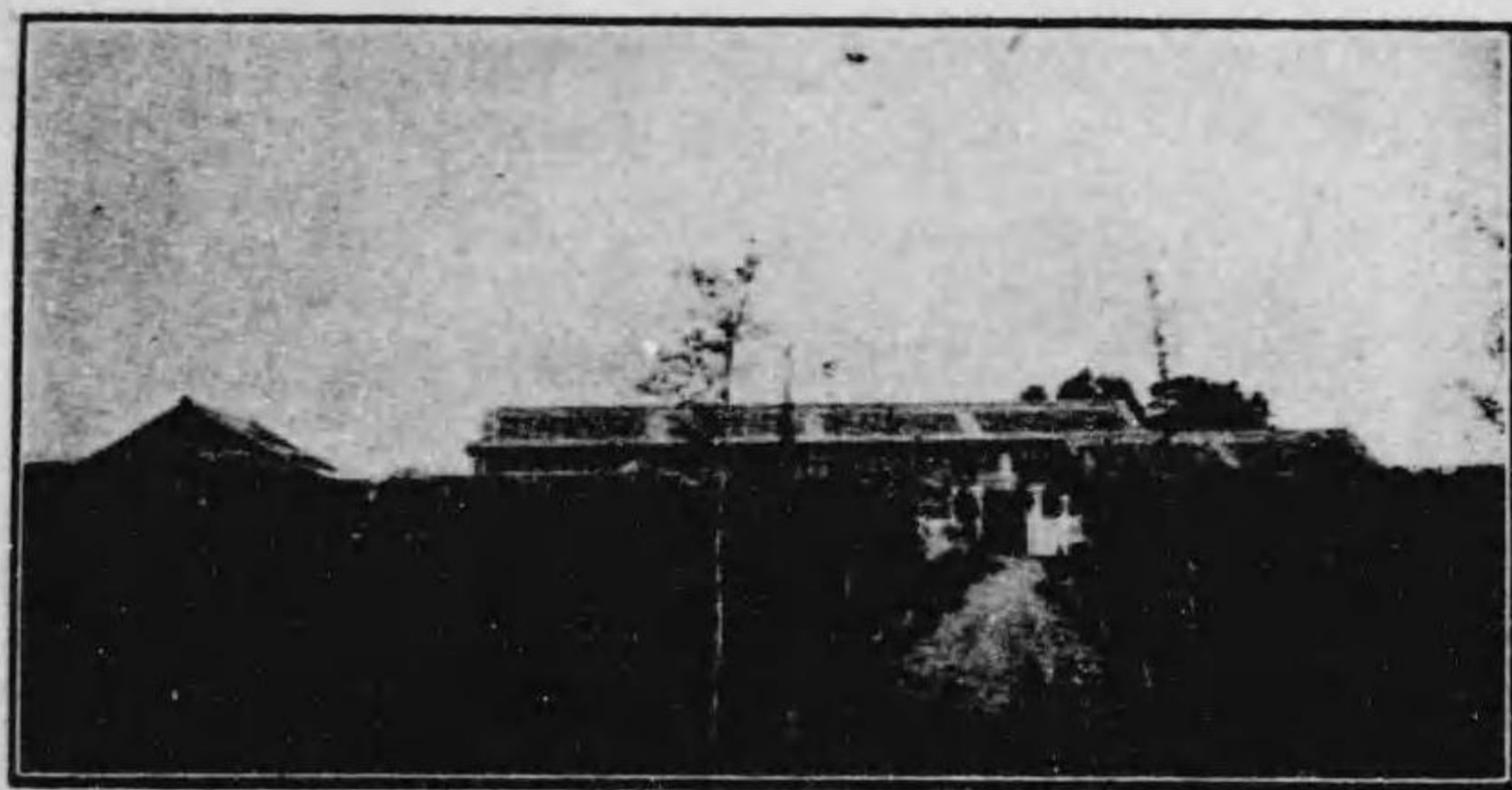
地となり、義國の子大炊助義重勅命を奉じて、その下司職となりし以來、その一族は次第に蔓延するに至りぬ。元弘三年(1333)五月義重八世の孫義貞は、大塔宮護良親王の令旨を奉じて、勤王の義旗を生品の祠前に擧げ、間もなくして北條高時等を鎌倉に滅ぼし、後醍醐天皇をして、建武中興の政をなさしめたり。その後足利尊氏の叛するに及びて、延元三年(1338)閏七月二日義貞等は、越前國藤島燈明寺巖に戦歿せしかば、爾來その一族離散して、復た振はざりき。然るに應永の頃よりこの地は再び新田氏の有に歸せしが、天正十八年(1590)豊臣秀吉の北條氏を相模國小田原城に攻めし時、由良國繁が北條氏を援けたりし故を以て、その領土を沒收せられたり。徳川時代(太田はもと勢多郡頃より新田郡に編入せらる)には、この地方は、諸藩に分領せられしも、明治元年(1868)岩鼻縣の管轄となり、次で同四年四月館林藩(明治四年八月館林縣と稱す)に、同十一月栃木縣に、同九年九月群馬縣に屬せり。その後同十一年十二月新に新田郡役所を設置し、同十九年今の太田の地に新築して、翌年より開廳し、今日に及べり。

新田及び太田の名稱起源 推古天皇の十五年(627)七月聖德太子の奏聞によりて、鳥臣なるもの勅を奉じ、東國に下向して、新に良田を拓きしこと、一萬七千八百八に上りぬ。その大部は、今の新田郡に在りしかば、新田の稱起りしといふ。またこの地方は、往古森林蒼蔚として、蝦夷人の住せしことありしかば、利根川の名稱が蝦夷語の大河より來たりしが如く、新田といへることも、蝦夷語の森林より名づけられたるものなりといへるものあり。また太田は、新田郡中、地田を有すること大なれば、かく稱せらるゝに至りしとかや。

政治 行政上、新田郡を尾島(人口約七)・太田(同五二)・藪塚本町(同四四)・木崎(同二八)の四ヶ町と世良田(同六六)・笠懸(同五六)・寶泉・生品・綿打・澤野(以上は約五〇〇〇)・九合(同四二)・強戸(同上)・鳥之郷(同三七)の九ヶ村とに分ち、太田町に郡役所を置きて、これを統轄せしむ。

住民 戸數約九千二百戸、人口約六萬四千人(男子の數は、女子の數より稍少し)にして、本縣總人口の約十五分の一に當たり、南東部に密にして、北西部に疎なり。殊に尾島町・世良田村・笠懸村・太田町に多くして、五千人以上の人口あり。寶泉・生品・綿打・澤野の四ヶ村これに次ぎて、五千人に近き人口を有せり。木崎町は、最も少くして、三千人に充たず。

教育 郡内に於ける學齡兒童の數は、約九六〇〇人(男兒の數は、女兒の數より稍多し)にして、その九割



群馬縣立太田中學校

五分は就學しつゝ、あれば、初等教育はよく普及せりと謂ふを得べし。現時郡内に於ける主なる學校には、縣立太田中學校の外、尋常高等小學校は十四校、實業補習學校は十校あり。

社寺 神社は、縣社二・郷社九・村社七十の外、無格社を合すれば、その數百四十餘に達す。寺院の中、最も多きは、眞言宗にして、全寺院數(約一〇)の約半を占む。曹洞宗(總數の約一)・天台宗(同五分)これに次ぐ。殊に太田町の新田神社(縣社)・高山神社(縣社)・大光院(淨土宗關東十檀林の一)・金龍寺(曹洞宗)・世良田村の八阪神社(郷社)・長樂寺(天台宗)・尾島町の安養寺(天台宗)を以て、本郡に於ける著名なる社寺となす。

産業 本郡に於ける主要なる産業を農牧業となす。工業

も、また近時漸く勃興の機運に向へり。

農業 耕地は、八千餘町歩、農民は約四萬人に達して、農業は本郡の主なる生業なり。農産物の中、米は一年約六萬二千石の産額ありて、勢多・群馬の兩郡に次ぎ、縣下總産額の約七分の一を占む。殊に生品・綿打・強戸の諸村よりは多く産す。大麥は、約三萬五千石を産して、縣下總産額の約七分の一に當たる。小麥は、群馬・勢多・邑樂の三郡と共に縣下に著はれ、年々三萬五六千石の産額ありて、縣下總産額の約七分の一を出だす。大豆(産額の約七分の一)・小豆(同約十分の一)・蕎麥(約二千五百石)の穀産もまた少からず。食用特産物には、蘿蔔(約八十萬貫)・甘藷(約五十萬貫)・青芋(約四十萬貫)・漬菜・馬鈴薯・茄子・胡瓜(以上共に十六七萬貫)・午勞・葱・胡蘿蔔(以上は十萬貫)・南瓜・西瓜(以上は五萬貫)等あり。殊に西瓜は、佐波・勢多の兩郡に次ぎて多し。

果實類の中、桃(約三千貫)・栗(約二千貫)・葡萄(同上)の産額は、縣下第一に位し、その他梅(約一萬四千貫)・梨(約四萬五千貫)・柿(約三千貫)の産出もまた少からず。柿は、縣下に於て碓氷・勢多の兩郡と共に多し。

牧畜・養鶏業 郡内に於て飼養せる家畜類の中、最も多きは、馬にして、その數二千頭に上り、豚(五百頭)・牛(約二百五十頭)これに次ぐ。養鶏業は近時益々榮えて、年々約八九千萬個の鶏卵を産するに至れり。

工業 養蠶・製絲・機織の業は、主として南部地方に行はれ、年々約五十萬圓の織物、約四千萬圓の繭(その二分の一は尾島町及び世良田村より産す)・十餘萬圓の眞綿・數萬圓の生絲を産出す。ラムネ(約千)・葡萄酒(約千圓)の製造は、漸次隆盛に赴きて、その産額の多きこと、縣下に冠たり。

商業 郡内、百三十餘の仲買業者、一千二百有餘の小賣業者、二百餘の兼業者などありて、主に農工産物の取引を行ふ。

産業機關 二銀行・十會社の外、十四の産業組合等あり。新田郡は、渡良瀬・利根兩川の中間に位すれども、水利に乏しき所少からざれば、岡登堰普通水利組合及び矢場兩堰普通水利組合の設あり。前者は、寛文四年(1665)岡上次郎兵衛景能の創始せしもの、後者は明治二十六年二月の設立に係りて、共に群馬縣の中、最大なる水利組合なりとす。矢

場兩堰普通水利組合は、渡良瀬川の水を引き、新田・山田・邑樂の三郡に於ける四百十餘町歩の田地に灌漑せしむ(岡登堰普通水利組合は、第二章岡上次郎兵衛の節を見よ)。
交通 道路 国道(一)は約一千五百間、假定縣道(四)は約一萬六千間、縣費支辨里道(五)は、約二萬六千間の延長を有して、交通の便備はれり。

(町村名)	九合	澤野	尾島	世良田	木崎	寶泉	生品	綿打	藏塚	強戸	鳥之郷	笠懸
太田	〇、五	一、〇	二、〇	二、三	一、六	一、〇	一、元	二、三	二、三	一、四	〇、三	三、三
九合	一、二	二、二	三、二	二、六	一、七	二、六	三、二	三、二	二、〇	二、〇	一、三	四、三
澤野	一、〇	二、〇	二、二	一、三	〇、四	二、三	二、二	三、三	三、三	二、四	一、三	四、三
尾島	一、四	〇、三	〇、五	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇	三、七	三、七	二、〇	二、〇	四、六
世良田	〇、三	一、〇	二、〇	二、一	一、五	二、一	二、一	三、一	三、一	二、一	二、一	四、一
木崎	〇、五	一、〇	二、〇	二、一	一、五	二、一	二、一	三、一	三、一	二、一	二、一	四、一
寶泉	一、四	一、七	二、〇	二、一	一、五	二、一	二、一	三、一	三、一	二、一	二、一	四、一
生品	一、四	一、七	二、〇	二、一	一、五	二、一	二、一	三、一	三、一	二、一	二、一	四、一
綿打	一、四	一、七	二、〇	二、一	一、五	二、一	二、一	三、一	三、一	二、一	二、一	四、一

本町	二〇三	一三三	一、一〇
鳥之郷	〇、三七	二、一七	
等懸	三〇八		

鐵道 東武鐵道本線は、東京淺草驛より北走して、本部の太田驛(淺草驛より約五十哩。約三時間)に來たり、これより西南の木崎(太田驛より約四哩。約十分間)を経て、佐波郡に入り、伊勢崎驛(淺草驛より約四十二哩。約四十分間)に至りて、兩毛線(小山・高崎間。約五十哩。約三時廿分間)と相會す。またその相老支線は、太田驛より分れて、西北の三枚橋(太田驛より約二哩。約七分間)・治良門橋(太田驛より約四哩。約十三分間)・藪塚(太田驛より約六哩。約廿五分間)の三驛を過ぎ、新桐生驛(太田驛より約九哩。約四十分間)に於て兩毛線と、相老驛(太田驛より約十哩。約五十分間)に於て足尾鐵道(桐生・足尾間。約二十哩。約二時間半)と連絡す。

第二編 各 説

第一章 太田町地方

總説 太田町は、群馬縣新田郡の東部に位する名邑にして、東武鐵道本線と同相老支線との分岐點、且つ舊日光例幣使街道及び足利・館林・熊谷・大間々・伊勢崎諸街道の要路に當たる。

日光例幣使街道 正保四年(1657)四月十七日、朝廷伊勢の奉幣使に准じて、日光東照宮に例幣使を創造せられし以來、毎年京都より東下の例幣使は、途を中山道に取りて、碓氷峠を越え、上野より下野に入りて、日光に至れり。これを日光例幣使街道といふ。

この地は、渡良瀬川と利根川との中間を占め、北部の金山一帯地方を除く外は、土地率ね平坦なり。廣袤は東西十九町四十五間、南北一里二十九町。周圍四里二十五町三十四間。面積二百九萬九千五百餘坪。戸數は九百に餘り、人口は五千一百餘人を算し、

こゝに新田郡役所・縣立太田中學校・新田銀行等の設あり。産業は、農業の外、微々として振はず。随ひて農産物を除きては、記載すべき程の特産物なく、只だ旅行者に土産として、松茸・羊羹・胡椒などを供するのみ。

勝地には、金山及び八幡山等ありて、共に眺望甚だ佳なり。金山の山上には新田氏支族の城址・縣社新田神社、山麓には縣社高山神社・浄土宗大光院・曹洞宗金龍寺等の名社古刹あり。八幡山には、郷社八幡神社あり。實に太田地方は、古昔太田五郎次郎頼定(鳥伊賀三郎時成の孫)・新田氏及びその支族の據りし所なれば、随ひてこれ等の諸氏に關する史蹟に富めり。大島の大島氏、寺井の岩松及び新田氏、脇屋の脇屋氏、由良の由良氏、細谷の細谷氏、大館の大館氏、岩松の岩松氏、堀口の堀口氏、江田の江田氏、世良田の新田氏及び徳川氏等に於けるが如く、一々枚舉に遑あらざるなり。旅行者若し一たびこの地に來遊して、これ等の名勝史蹟を跋渉する時は、思半ばに過ぐる所あるべし。

旅館には芭蕉屋・武藏屋、料理店には大野屋・巴屋・松のや等あり。會席には、高山神

社に近き所に城見館あり。この館は、明治四十二年地方の有志者が讌宴集會の席に供せんが爲めに建設したるものなり。今太田町より各要地に至る大略の距離を擧ぐれば次の如し。

佐野(東)	五里	足利(東)	二里十八町	栃木(東)	十里	宇都宮(東)	十八里
小泉(南)	一里三十町	館林(南)	四里廿五町	熊谷(南)	四里廿六町	東京(南)	二十一里
横濱(南)	二十九里	木崎(南)	一里廿六町	尾島(南)	二里一町	世良田(南)	二里二十二町
境(南)	三里	深谷(南)	四里	本庄(南)	五里	生品(西)	一里二十八町
伊勢崎(西)	三里半	高崎(西)	十里	藏塚本(西)	二里廿二町	笠懸(西)	三里三十二町
桐生(北)	四里	大間々(北)	五里	前橋(北)	八里三十町	伊香保(北)	十三里半
沼田(北)	十六里半	強戸(北)	一里十四町	足尾(北)	十四里半	日光(北)	二十一里半

太田の名勝史蹟を探らんと欲するものは、先づ高山神社(太田驛に約七町)に詣で、八幡山の丘岡に登りて、太田町地方を展望し、これより大光院(同約八町)・金龍寺(同約九町)に賽し、金山(人力車の麓まで通ず。片道約十錢)に上りて、新田神社(同約十町)を拜し、また古城址を探り、山上より關八州の



高山神社

山川原野を眺むべし。予は、これよりこれ等名勝史蹟の大略を述べんと欲す。

縣社高山神社と高山彦九郎 太田町の北、金山の餘脈將に盡きんとする所の字高山(天神)の半腹に位し、寛政三奇人の一なる高山彦九郎正之の靈を祀る。明治九年明治天皇陛下は、奥羽地方を御巡幸の際、彦九郎の勤王を嘉賞せられ、『國の爲め心つくしに高山の勳もなくてはてしあはれさ』との御製を賜はり、次で同十一年三月彦九郎に正四位を追贈せられぬ。かくて地方の有志者は、皇恩の厚きに感泣し、彦九郎の尊王を長へに傳へ、且つその英靈を慰めんと欲し、高山神社建設の事を官に請ひしに、會、宮内省よりは八百圓、皇族よりは二百圓の金幣を下賜せられて、痛くその擧を贊

成せられたり。こゝに於て有志者は、直に工事に著手し、翌十二年十一月十五日こゝに鎮祭することを得たり。次で同十三年三月縣社に列せられ。同四十二年二月神饌料・幣帛料供進の社に進めらる。加ふるに明治二十五年十月十七日には皇太子殿下、同四十二年十一月七日には皇孫殿下の御參拜を辱くせしを以て、草莽の臣彦九郎は、感涙して地下に瞑すべし。寶物には、彦九郎の所持せし烏帽子・笏・櫛・水器・靴・直筆の書翰等あり。これを見、これを讀まば、彼れの意氣風貌を追想し、誰か景仰追慕の念を生ぜざるものあらざらんや。大祭は、毎年三月十五日、小祭は十一月十五日にして、その日遠近より參拜するもの踵を接して詣る。

高山彦九郎正之 新田義貞の臣高山遠江守の子孫にして、父を長右衛門(正晴)といひ、母を劍持氏と稱す。名は正之、字は仲繩。通稱は彦九郎。延享四年(1787)太田の西南約一里を隔つる澤野村大字細谷村に生れ、四十餘年の生涯中、殆んど寧日なく、武門の專權を憤り、皇室の式微を慨き、四方を周遊して、尊王の大義を唱ふる所ありしが、遂に憂憤の極、寛政五年(1793)六月二十七日筑後國久留米に於て自刃す。年四十七。彼れの墓は、今尙ほ同地の遍照院境内に在りて、松陰以白居士と刻せらる。母に彼れを蒲生君平秀實・林子平友直と共に、寛

政の三奇人と稱す。

日の本のもとのかみく三干あまり、道をば守ることこそ知れ

高山正之

世の中はともかくにも天地の、かはらぬ道をあふぐばかりぞ

同上

我れをわれとしろしやめすかやすべらぎの、玉の御聲のかゝるうれしさ

同上

慷慨滿腔無等倫、三條橋上拜楓衷、當時誰辨知名義、正是勳王第一人。

松平春嶽

天神山と村社春日神社 天神山は、古墳状をなせる八幡山と相對し、老松蔚々として茂生し、蒼翠掬すべく、籟聲聽くべし。茂林の中よりは、田圃村落の眺望頗る佳なり。附近に太田町の鎮守神たる村社春日神社あり。奈良の春日神社(官幣大社)を勸請せるものにして、天兒屋根命を祀り、三月二十五日を祭日となす。

八幡山の勝 太田町の西に當たり、天神山と相對して八幡山の青丘あり。鳥之郷村大字大島村に屬す。その形貌は、よく青丹よし奈良の三笠山に似たるを以て、俗に太田の三笠山とも稱せらる。山高からず、僅に數十歩にして登るを得べく、蒼蔚たる老松の間に芝生の地あり。山に登らば、太田及び附近の町村は、履下に展開し、また雲煙縹渺の



八幡山の勝

裡に關東平野を望むを得べく、眺望甚だ佳なり。

郷社八幡神社と彦狹島王 八幡山の丘上に郷社八幡神社あり。彦狹島王命を祀る。大島村の鎮守神にして、毎年九

月十五日に祭典を行ふ。社殿の下に秩父青石を以て、疊まれたる廣大なる古墳あるは、則ち彦狹島王命の墳墓にあらずやといへるものあり。八幡山の附近には、金山鑛泉(炭酸泉)及び姫子鑛泉(鐵泉)ありて、共に攝氏の約十五度(華氏の約六十度)の水溫を有し、前者は神經痛・疝氣等、後者は胃病・皮膚病・レウマチス等の治療に效能ありといふ。

彦狹島王命 景行天皇の皇子鴨城入彦命の孫。命は、景行天皇の五十五年(125)二月東山道十五國の都督となりて、東下し給ひしが、春日穴昨邑に至りて、病んで薨せり。

郷社八幡神社と新井白石の祖先 太田町の南方翁爵たる森林中に隠見する祠堂は、九合村大字新井村の鎮守神たる郷社八幡神社なり。この祠は、新井白石の祖先新井禪師覺義が山城の石清水八幡宮(官幣)の靈を勸請せしものなりといふ。境内廣からず、社宇もまた宏壯ならざれども、大さ數抱に餘るべき摩天の老杉あるを見れば、その來歴の古きことを知るに足るべし。

新井白石とその祖先 新井白石の祖先たる新井(荒井)または荒居(覺義)は、新田基氏の二男にして新井二郎と稱し、御庵と號す。その子朝兼より義真・義基・武義・勝廣・廣恒・廣成・廣道・正濟を経て、君美即ち白石に至る。その後、明卿・邦孝・邦賢・成美・允可・廣生など相繼げり。

新井白石(1667-1725)は、正濟の子。母は坂井氏。名は君美。小字は勘解由。字は在中・濟美。號は白石・紫陽・錦屏山人・天爵堂・勿齋等。木門五先生(儒學の大家たる木下順庵の門人新井白石・室鳩巢・雨森芳洲・祇園南海・柳原篁洲)の一人にして、博學洽聞、日本・支那・朝鮮の典故に熟達し、かれて和蘭語にも長じて、前野良澤・杉田玄白・青木昆陽と共に蘭學淵源の四先生の一人に算せられ、また和漢混用文及び史學を善くしたりければ、我が國の司馬遷または日本のマコーレーとも稱せらる。將軍徳川家宣に仕へて、寄合衆に列せられ、政治上數多の改革をなしたり。著書は、三百餘種に上れども、藩翰譜・讀史餘論・折たく柴の記・東雅・南島志・蝦夷志・琉球事略采

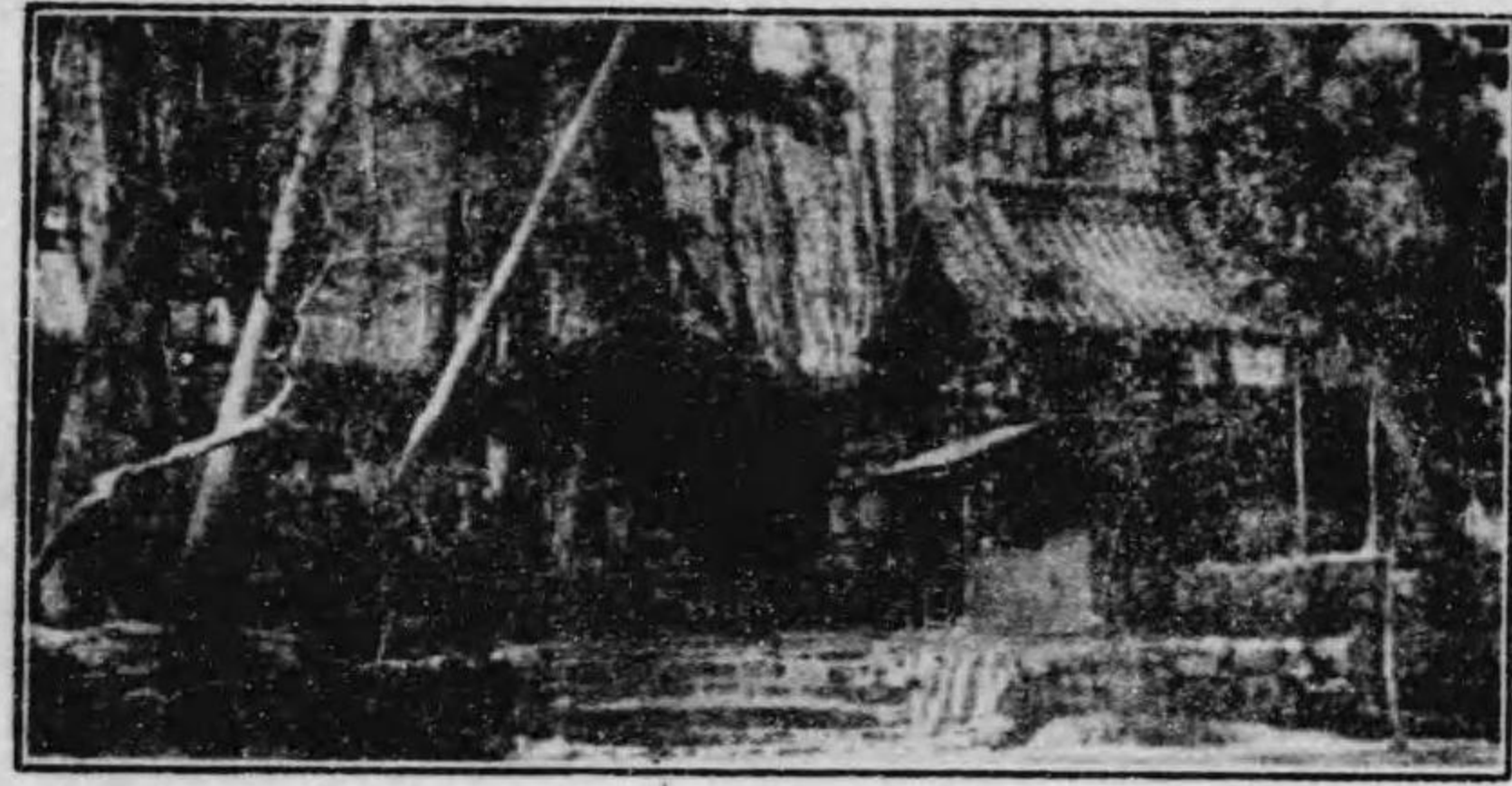
覽異言・西洋紀聞・和蘭風土記・西洋圖說等殊に著るべき詳細なる事項は愚著徳川時代通史を参照すべし。



大光院

浄土宗大光院と新田義重及び吞龍上人 太田驛より北行すること數町、兩側に古杉巨松の亭立せる路、所謂大光院道を進まば、鶴見下馬の二橋あり。やがて元和年間徳川氏の大坂に捷ちし時、成りし吉祥門(古來門扉)を人らば、則ち大光院の境内なり。

大光院は、義重・山新田寺と稱し、金山の南麓字六尺屋敷に在る浄土宗鎮西派の巨刹。關東十八檀林の一にして、開祖吞龍上人の名と共にその名東國に噴々たり。本堂と鐘樓との間に在る臥龍松は、吞龍上人の手植と傳へられ、翠色長へに濃やかにして、偃蹇數十歩の地を掩ひ、その蟠屈の狀恰も蛟



新田義重の廟と呑龍上人

龍の臥するが如し。よりてこの名あり。その傍に日露戦役記念の大梵鐘樓及び元祿十一年(1698)九月建立せられたる古鐘樓あり。開山堂(間口五間、奥行七間)即ち呑龍廟は、元和九年(1623)九月信徒の建立に係り、元和七年十二月呑龍上人自作の木像(高さ五尺)を安置す。この座像は、眼光炯々として威あるのみならず、また温容にして慈母の子女に接するが如く、慈悲施徳の俤歴然たり。

本堂(東西十一間、南北九間、半、慶長十八年建立)は、宏壯にして雄偉、淡泊にして豁大、棟梁材を擇み、築造奇巧を極む。佛殿は、丹碧の美、金色燦爛赫耀として、人目を奪ふ。内陣の正面には阿彌陀如來の立像(高さ三尺二寸、安阿彌の作、慶長十八年四月家康の寄附)。右方には東照宮の位牌、左方には徳川氏歴代の位牌を安置す。大方丈(間口十間、奥行六間)の神殿に

は、家康(高さ二尺、寛永十三年十二月家光の寄附)・秀忠(同上)・義重(高さ二尺、慶長十八年四月家康の寄附)の木像あり。小方丈(間口七間、奥行三間)は、瀟洒雅致に富める庭園に面す。明治十八年九月及び同十九年十月には皇后陛下(今の皇太后)・同二十一年十月及び同二十二年十月には英照皇太后陛下、同二十五年十月には皇太子殿下(今上)・同四十二年十一月には皇孫殿下の行幸、行啓あらせられし時、御休憩所に充てられし室にして、當寺の甚だ光榮とする所なり。

本堂の西方に當たりて、泉水を隔てたる御廟山には、大光院殿新田義重の廟及び呑龍上人の無縫塔ありて、香花するもの跡を絶たず。前者は、鬱蒼せる老樹の間に在りて、内に高さ五尺三寸、古色蒼然たる五輪塔(義重は建仁二年正月十四日卒)を納む。廟前に二基の石燈籠あり。一は延寶二年(1674)十一月阿部正能、一は元祿十一年(1698)十一月酒井忠寛の寄進に係る。要するに大光院の境内は、約九千三百坪に達し、梅櫻などの花樹は、率ね到る所に栽培せられ、花時は一段の風趣を添へて、佛徳もまた麗はし。

沿革 建久の頃(1150—1198)源義家の孫にして源義國の子なる大光院殿新田義重は

阿彌陀如來を本尊とし、當寺を寺尾(太田町の西北約一里を隔つる今の強戸村字寺井に寺)に建立せしが、延元二年(1338)閏七月二日その八世の孫、贈正一位新田義貞が越前國足羽郡藤島アスハ燈明寺アスハに於て、王事に仆れ、舉族率ね離散せし後、七堂伽藍もまた焼失の厄に罹りぬ。

◎◎◎◎◎ 新田義重 鎮守府將軍源義家の子なる式部丞源義國の子にして、母は上野介敦基の女なり。新田太郎・新田

冠者・新田大炊助と稱す。即ち大光院殿・上西入道これなり。建仁二年(1122)正月十四日を以て卒す。彼れ及び

父義國の邸址は、尾島町の青蓮寺の境内に、また義重の木像は、同町の吞嶺山明王院安養寺に在り。詳細なる事

實は、第四章を参照せよ。

その後約六百年の星霜を経て、慶長八年(1603)徳川家康は、幕府を江戸に開創せし時、祖先發祥の靈地を探索し、その冥福を祈らんが爲めに、慶長十六年(1611)十一月始祖義重の墓塔を今の地に移し、土井大炊助利勝・成瀬隼人正政成及び芝増上寺の積僧觀智國師等に命じて、寺院を再建せしめたりしが、同十八年(1613)三月に至りて、全く竣工せり。今の大光院は、則ちこれなり。こゝに於て秀忠は、當寺を關東十八檀林の一に列し、同

年四月武藏國瀧山大善寺の傑僧然譽吞龍上人を開山となして、寺領三百六十石を寄附し、また奏請して紫衣勅許の綸旨を得しめたり。明治二年二月二十三日官更にこれを勅願寺と定めらる。開山よりこゝに至る六十四代約二百五十六年なり。(現住は、第六十六代千野學識)



人 龍 吞 上人 實に當寺は、徳川氏代々の將軍より厚き保護を享けしと、古來吞龍上人の遺風を慕ひて、遠近より詣づるもの絶ゆることなきとを以て、明治維新後に至りても、他の寺院の如く、悲惨凋落の史を見ざる所以なり。

◎◎◎◎◎ 吞龍上人 弘治二年(1556)五月五日今の武藏國南埼玉郡武里村大字一の割(市野割)の圓福寺の地に生る。

父は、武藏國岩槻の城主太田美濃守資正の臣井上將監信貞といふ。年十三の時、出家して佛門に入り、遂に芝増正寺の僧觀智國師の門弟四哲に數へらるゝに至りぬ。吞龍上人は、初め武藏國八王子町瀧山大善寺の住職たり

しが、後大光院に移りて、元和九年(一一三三)八月九日入滅す。年六十八。家康嘗て人に語りて曰く、豪傑呑龍の如きものにあらざるば、到底よく上州人を感化すること能はずと。以てその人と爲りを想像するに足るべし。因にいふ。大善寺は、八王子町字大横町に在る浄土宗の寺院にして、北條氏照の開基に係り、關東十八檀林の一なり。境内に呑龍上人の廟を安置し、毎年十月十二日より三日間、大念佛十夜の供養を修む。

寶物 ①は、寶庫に充實し、一々枚舉に違あらずといへども、今その主なるものを擧ぐ

れば、次の如し。開山呑龍上人自作の座像、阿彌陀如來の木像(慶長十八年四月家康の寄附。安阿彌の作。高さ三尺二寸)。

觀音及び勢至の木像(慶長十八年四月家康の寄附。運慶の作。高さ各一尺七寸)。大光院の木像を始めとし、八幡菩薩騎馬の

木像(秀忠の寄附。新田義重の作。建久八年正月吉日源義重の刻字あり。高さ五寸)。東照宮及び台徳院の木像。義重の鎮守府將軍宣下

文(慶長十六年三月附)。義重の從二位追贈繪旨(嘉永三年十月附)。義重の直筆願文(建久八年正月吉日附)。呑龍上人紫衣勅

許の繪旨(元和八年九月十日附)。觀智國師の書翰(元和元年卯月十八日附)。一切藏經(黃鑿版。元和元年七月家康の寄附)。三部經(呑龍上人の筆)。

大藏一覽(十一冊。元和七年四月十七日秀忠の寄附)。呑龍上人著用の紫衣等は、最も價值あるものに屬す。また

葵葉形の松板は、義重の廟邊に在りし松樹の幹を截斷して得たるものなりと傳へ、幹身

半ば朽ちて空虚となり、自然に葵葉形を呈するは、奇雅中の奇と謂つべし。白河樂翁松平定信は、これに『千代かけて契りこめたる松からや、あひに葵の御代の榮えを』との歌を添へたり。

緣日 ①當寺に於ては、毎月及五月の八九日、九月七日より十一日に至る五日間、開山

忌の法要を營めり。殊に九月、末寺三十五寺の僧侶を集めて、大法會を行へる時は、

青黃紅紫諸色の袈裟は、綾羅錦繡と相映じ、梵唄の聲は鐘鈴の音と相和し、宛然極樂

境に遊ぶの觀あらしむ。時に幾多の信男信女は、子女の生育に偉大なる靈驗ありと稱

し、遠近より踵を接して雲集し、肩摩穀擊、賽路に充ち、香煙堂裡に薫す。その雜沓は、筆

舌のよく盡す所にあらず。實に法會の盛なること、近郷その比を見ざる所なり。

曹洞宗金龍寺と新田義貞の墓 大光院より北方、御料林山脚の崎嶇たる阪路を上ら

ば、字天水に出で、鬱林中に隱見する寺院を見るなるべし。これ新田氏諸族の菩提所た

る曹洞宗太田山義貞院金龍寺にして、もと武藏國秩父郡赤柴村(今の上吉田村)の金剛院派に屬

し、三十七の末寺を有したる巨刹なり。當寺は、松樹蒼蔚たる金山を負ひ、幽邃にして清雅の仙境に在り。その裏山は、古の所謂善昌峯にして、元弘三年(1333)五月新田義貞舉兵の時、旗立の地を相見したる所なりと傳ふ。

沿革 當寺の開山は、越前國宅良慈眼寺の僧、天真自性大和尚(前の開山)にして、左近衛中將新田義貞追善の爲めに、應永五年(1398)金山の城主岩松三河守滿純(岩松二郎家純の子)の興營せし道場なり。應永二十四年(1428)滿純は、横瀬貞氏(武藏少將新田義宗の子、新六郎信濃守と稱す)に命じて、天真自性大和尚の法孫大見禪龍和尚(後の開山)を越前國より聘し、八月新田義貞の遺骸を藤島より、ここに改葬して、義貞等追福の爲めに法會を行ひ、義貞(金龍寺殿新田左近衛中將眞山眞悟大禪定門)・義顯(頼應大禪・義興(義山正英)大禪定門)の外、岩松・横瀬・由良諸支族の祖先の靈牌をも安置せり(横瀬氏の系譜は、由良城址の節に在り)。

天正十八年(1590)七月豊臣秀吉は、北條氏政・氏輝等を小田原城に攻めし時、金山の城主由良信濃守國繁(横瀬貞氏八世の孫、もと横瀬雅樂介と稱す、父は由良信濃守成繁)等は、北條氏を救援したりし故を以て、

遂に秀吉の爲めに領土没收の厄に遇ひたり。されどもその子貞繁は、功によりて常陸國河内郡(今の稻敷郡)足立郷卯宿(今の牛久)に移封せられたりしかば、當寺もまた自ら同地に遷さるゝこととなりぬ。これ大拙齋藝禪師の時にして、開山大見禪師よりここに至る十世なり。これを前金龍と稱す。



新田義貞の像

その後徳川家康の關八州を總統せる時に方たり、徳川四天王の一にして、館林の城主たりし榊原式部大輔康政(初め千代、小平太といふ。法名は養林院。その墓は館林善導寺に在り。詳細なる事實は、愚著館林案内を参照す)は、この地を領したり。康政嘗て義貞の墓塔に詣で、大に寺院の荒廢せるを嘆き、慶長十八年(1613)金剛院の僧梅室惠芳和尚を招きて住職となし、大に堂宇を修繕して、香燈追善の禪場と定め、八町餘歩の地を寄附せり。かくて金龍寺は、牛久派

(寛文六年牛久沼に臨める)と太田派との二院に分れたり。要するに梅室惠芳和尚を中興の開山と稱し、これより後を後金龍と稱す。開山より現住白金教宗に至るまで四十一世。



新田義貞の墓塔

寶物 什寶の中、最も價値あるものは、御靈屋に安置せらるゝ新田義貞の木像(應永二十四年横瀬貞氏の寄附。東帶に於いて右手に笏を持す。高さ二尺の座像)にして、創作の年代は、詳ならざれども、古雅掬すべく、よく其風貌を髣髴するに足るべし。その他雪舟の筆維摩の畫像(天正十二年小田原城)中興開山梅室惠芳和

尚の像等あり。

墓塔 本堂の前には、古色蒼然たる經塚(高さ三尺五寸)あり。堂後の丘陵には、新田氏及び岩松・横瀬・由良諸氏の墳塋ありて、墓塔累々、隕露落葉の中に寂然たり。その上段に在る

ものは、新田義貞の五輪塔(高さ九尺一寸)にして、『金龍寺殿正四位下新田左近衛中將眞山了悟大禪定門之墓、延元三戊寅年閏七月二日』と刻せらる。この墓は、もと越前國に在りしが、一僧義貞の骸骨と共にこれを擔ひ來たりて、この地に安置せしものなりと傳ふ。嗚呼一世の英雄、經綸志と違ひ、空しく風露の下に眠れるも、また哀れむべきかな。志あるものは宜しく行きて、その英魂を慰めよ。明治四十二年十一月七日皇孫殿下は、學習院生徒修學旅行の際、伏見宮博義王・閑院宮春仁王・華頂宮博忠王・山階宮武彦王・同芳磨王・久邇宮朝融王・同邦久王等の諸皇族と共に、ここに參拜ありしを以て、義貞は必らず地下に在りて、皇恩の鴻大なることを感泣するなるべし。

中段には、岩松明純(高さ三尺)・家純(上)・滿純(同三尺)・昌純(同三尺)・秀純(同二尺)・豐純(同二尺)・守純(同三)・氏純(同三)等の墓あり。また下段には、横瀬(由)泰繁(高さ四尺五寸)・國繁(上)・業繁(上)・康國(同四尺)・成繁(同五)・泰繁の室(同四尺)等の塔あり。みな幾百年の星霜を經過したるものと覺ぼしく、蘚苔碑身を没して、文字缺損磨滅せる所多し。

近年東武鐵道會社は、當寺前の大空地に梅園を經營せしかば、花時には觀客の杖を曳くもの少からず。

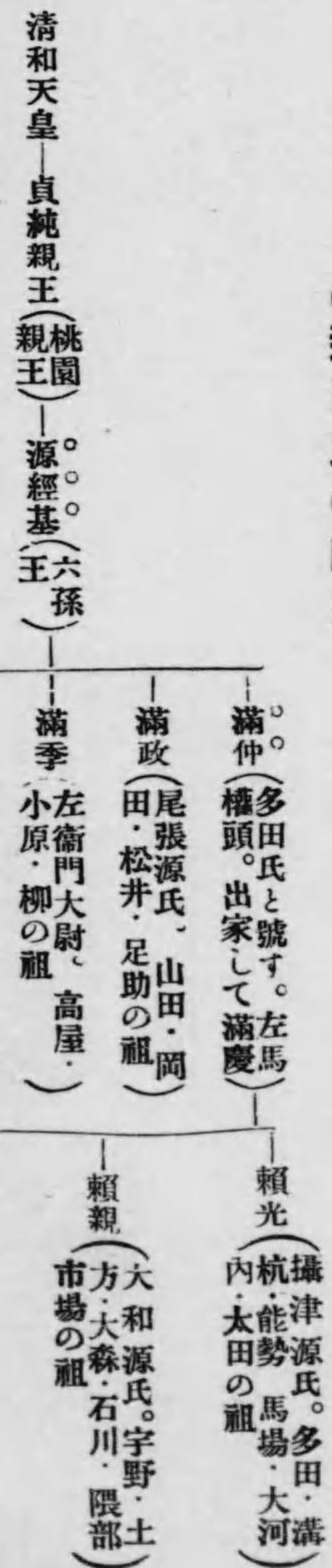
新田義貞、明治十五年九月正一位を贈られたる新田義貞は、源義家十世の孫にして、小太郎と稱す。その祖は基氏。父は朝氏（實は里見忠義の子にして、義胤の弟）。元弘三年（1333）五月八日義貞は、護良親王の令旨を奉じ、大館・堀口・岩松・里見・脇屋・江田・桃井等一族郎黨の勢百五十騎を具して、大・中・黒の旗を生品明神の祠頭に掲げ、その後約十五日にして、五月二十三日遂に北條高時等を鎌倉の東勝寺に攻めて、これを滅ぼしたり。かくて義貞は、後醍醐天皇をして建武中興の政を施し奉らしめしも、不幸にして延元三年（1338）閏七月二日敵將足利高經の軍と戦ひ、越前國足羽郡藤島郷燈明寺（西藤島村福萬）に於て、王事の爲めに陣歿せり。年三十八。足利高經その遺骸を岸水村往生院に葬りしが、後更にこれを坂井郡高塚村大字長崎村（南一里）の長林山稱念寺の境内に改葬す。同寺第二世の僧關阿は、諡して『源光院正四位下左近衛中将新田太守義貞覺阿彌陀佛』といへり。されども往生院と稱念寺とは、同寺なるべしとの説あり。何となれば、享保十七年（1782）松平氏の臣本多恒久の建てたる碑に長林山往生院稱念寺とあればなり。

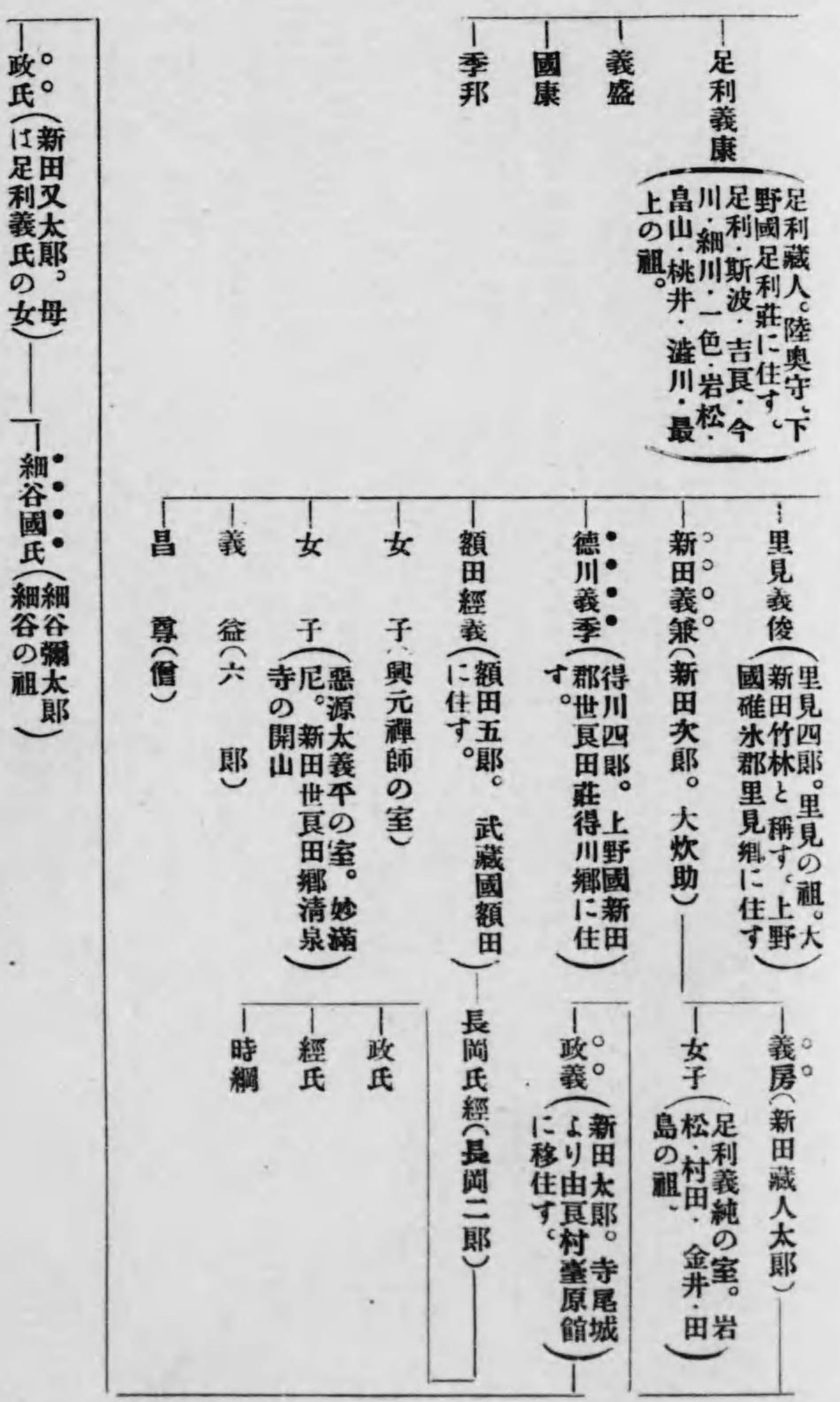
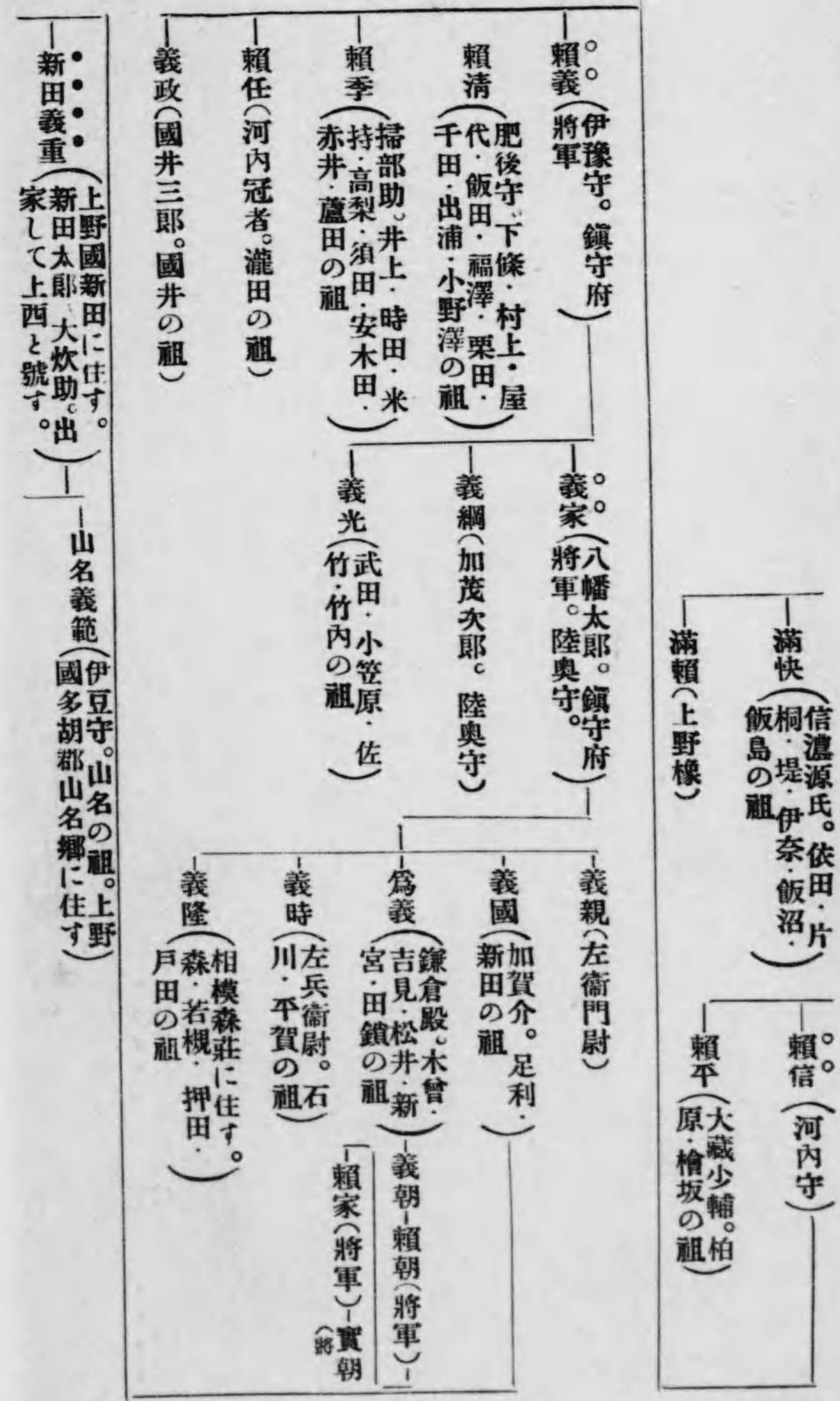
明曆三年（1687）藤島郷の農民嘉兵衛は、土地開墾の際、古兜を掘り出だしたりしことありしが、福井藩士井原

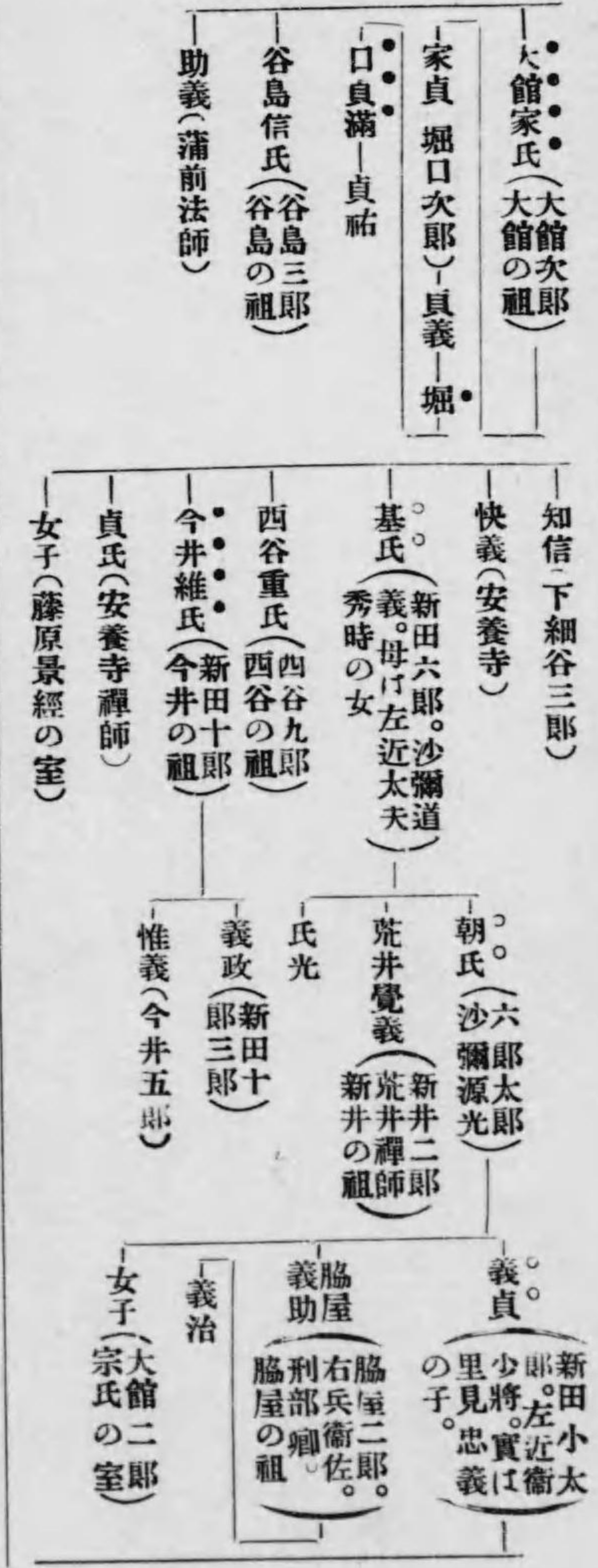
番右衛門なるもの、これを義貞の遺物なりと看破し、藩主松平光通に獻す。藩主即ち兜のありし地に柵を樹て、牧樵等の濫に入るを禁ぜしめ、一碑を建て、その遺蹟を表はしぬ。時に萬治三年（1620）春正月なり。次で明治三年藩主松平侯は、義貞の戦歿地に祠宇を建てしが、明治九年十一月七日別格官幣社に列せられ、藤島神社の號を賜はり、義貞の外、左近衛少將新田義宗、刑部卿脇屋義助、越後守新田義興、左近衛將監新田義興の靈を合祠することとなりぬ。

明治十四年冬、有志者は、新に義貞の戦歿地を南に距ること約十三町なる西藤島村大字牧ノ島村に神社を建つ。次で翌十五年九月二日義貞は、正一位を贈られたり。然るに牧ノ島村の地は、卑濕なるが上に、永害頻りに臻れるを以て、明治三十一年十月二十二日福井市足羽山字共遊山上にこれを遷座して、今日に及べり。

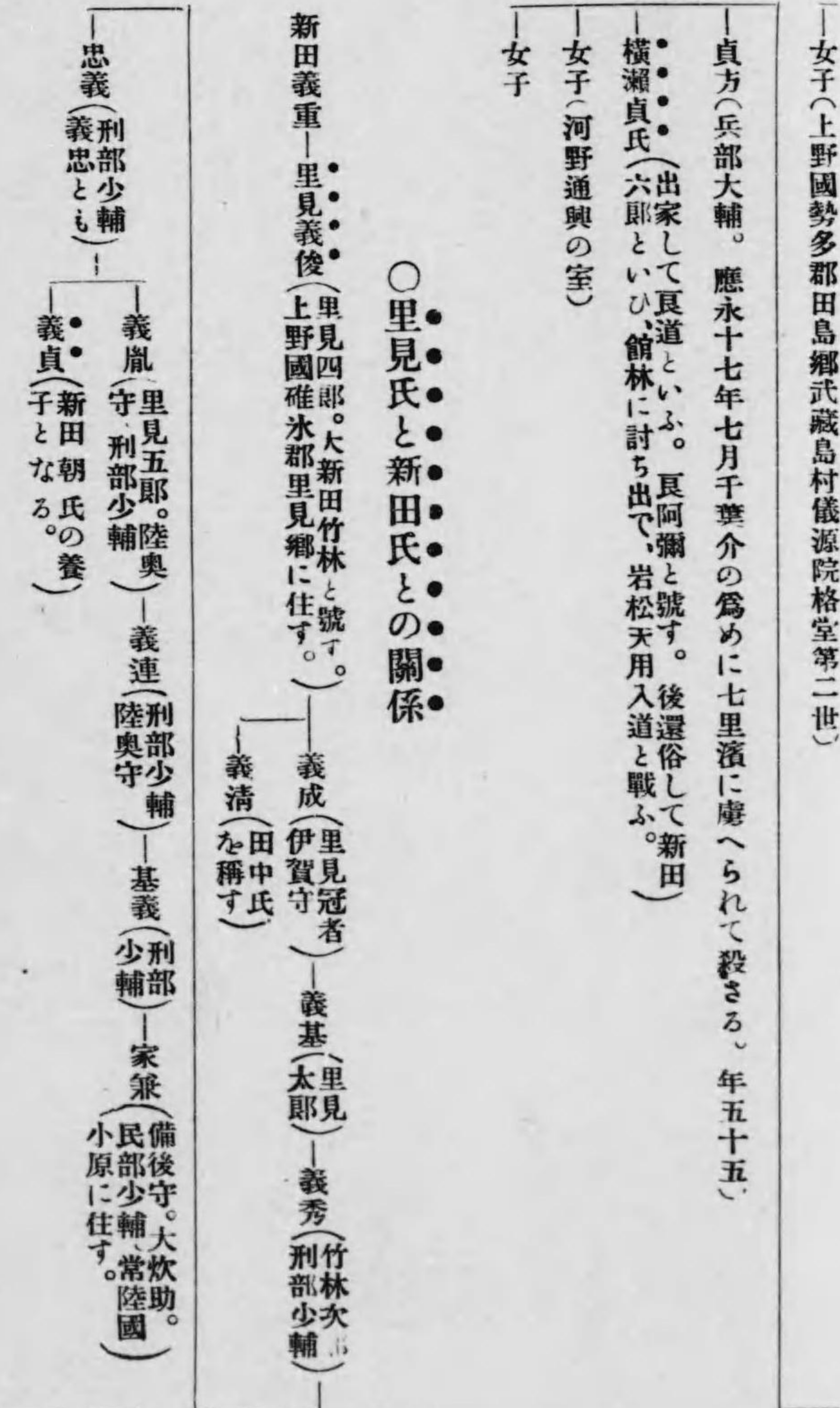
○新田氏の略系







義顯(新田小太郎。越後守。延元二年三月六日金崎城にて自殺す。年十八)
 義興(德壽丸。左兵衛佐。左近將監。正平十一年十月十三日武藏國矢口渡に於て。足利基氏に屬せし。竹澤右京亮良衡。江戸遠江守。義興の爲めに殺さる。年三十四。矢口に府社新田神社あり)
 義宗(四郎。左近衛少將。武藏守。上野世良田館に居る。文中二年四國に没落し。河野對馬守の家に寄食し。應永十二年十一月五日伊豫國道後に於て卒す)
 女子(千葉介氏胤の室)



家基(太郎。修理亮。刑部少輔) — 義實(又太郎。左馬助。刑部少輔。嘉吉元年十二月二日安房國白濱) — 杖珠院殿

成義 (刑部少輔。左衛門。佐安房。上總。下總。武藏。常陸の内を領す。慰月院殿)

義通 (天笑院殿) — 義豊 — 實堯 (延明寺殿) — 義堯 (東陽院殿)

義弘 (瑞龍院殿) — 義頼 (大勢院殿) — 義茂 (梅丸) — 義英 — 義政 (久留里城主。常陸國行方左右臺里見左右臺の屋方ともいふ。)

義康 (梅鶴丸。羽柴安房守。龍潛院殿) — 忠義 (雲晴院殿)

義定 — 義氏 — 定幸 — 女子 (鈴木室) — 堯定 (井關氏) — 氏幸

女子 (矢幡彈正忠の室) — 女子 (平野備前守の室)

金山の絶勝 太田町の北に巍然として屹立する山峯あるは、則ち金山(新田山)なり。

關東屈指の名山にして、高さ一千尺に近く、太田町總面積の約七分七厘を占めて、周圍三里二十町に及ぶ。(第一編第一章の部を参照せよ)。金山とは、山の西方なる長手に金山彦命を祀れる金山彦神社あるを以て名づくるに至りしものなりといふ。

この山は、古歌には新田山と稱せられ、巨杉老松森々として茂り、亭々として矗立し、その高さものは雲に入るありて、蒼翠掬すべく、幽邃譬ふるに言なし。山勢高峻ならずといへども、四方に眼界を遮るものなきが故に展望宏濶を極め、赤城・榛名・妙義、所謂上野の三山を始めとし、淺間・筑波・富士の名巒秀嶺を煙靄縹渺の間に望むを得べし。また秩父・足尾・日光の諸山は、悉く一眸の裡に集まり、漾々たる利根・渡良瀬の勝水は、大蛇の走るが如く、兩毛常總武の野を紆餘曲折して流る。近くは渡良瀬川を隔て、足



金山の勝

利城ありし兩崖山と相呼應し、手を伸ばせば、當に捉ふることを得べき觀あらしむ。古昔新田氏支族がこゝに城居せしも、また決して故なきにあらざるを知るべし。山上に縣社新田神社あり。社殿に上りて、四方を眺望すれば、眞に活畫圖を觀るが如く眼界豁然として、氣魂既に關八州を呑めるの想あらしむ。韻士墨客のこれを推して、關東屈指の勝地となすもまた洵に故あるなり。

にひた山ねにははつかなわによそり

はしなるこらしあやにかなしも

萬葉集

告げやらば妹がとがめん新田山

岩根の枕誰にかはすと

壬生家隆

金山の松茸と法度 金山は、俗謠に『わたしや太田の金

山ぞだち、外にきはないまづばかり』と詠せらるゝが如く、全山松樹蒼蔚として茂り、松茸の産は古來その名あり。徳川幕府時代の頃には、こゝに林守三名(目代二十三人・下番八十餘人これに屬す)を置きて、嚴に山林を保護せしめ、松茸を年々三度或は七度(もと三度獻納の定めなりしが、元文の後また七度となる)獻納せしめたり。

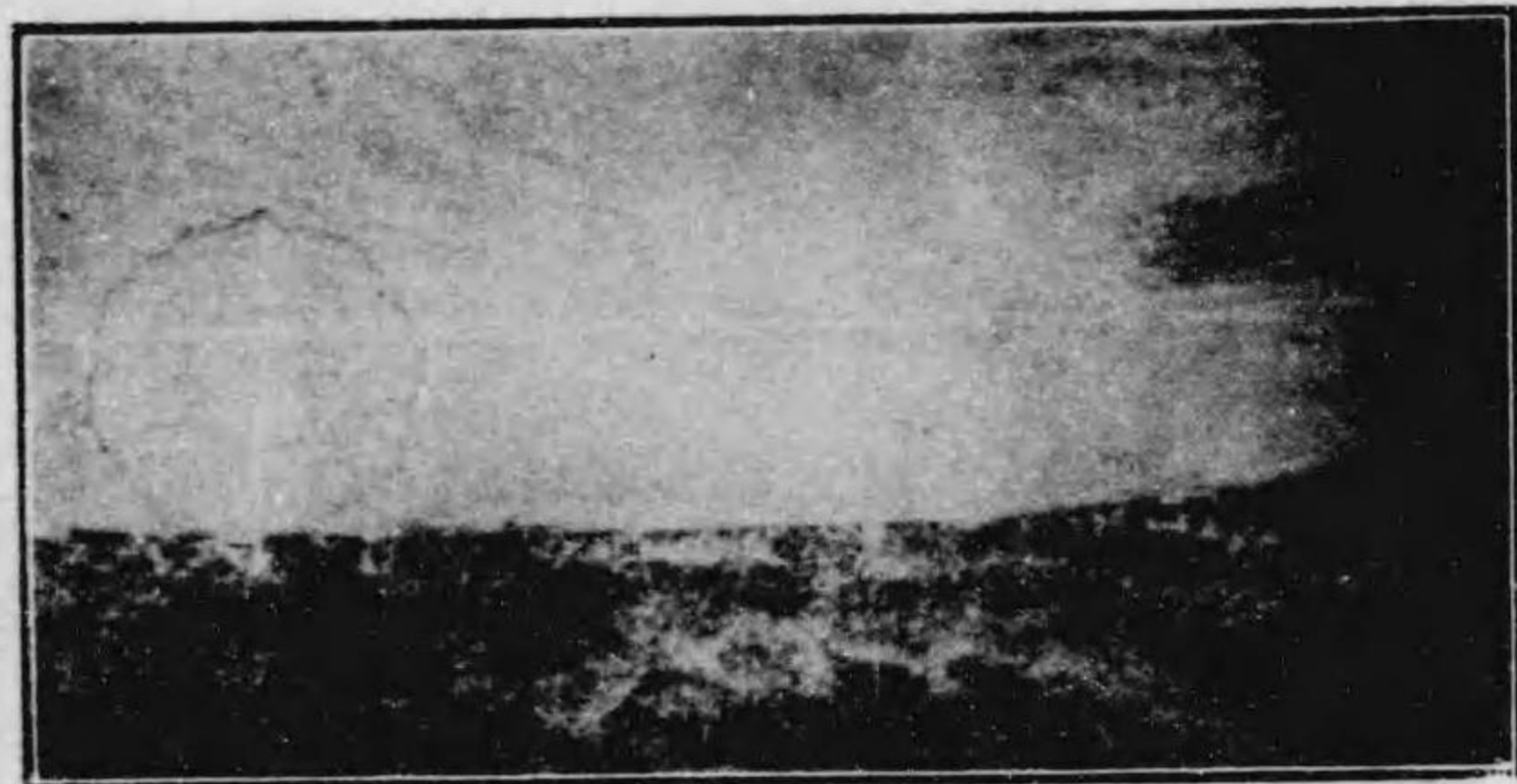
一、此松茸、從上州太田金山、至江戸、御臺所迄可持參者也。西七月。丹波印。右宿中。

○起請文前書之事。
一、金山御松茸取申候役人、御山中見廻り、草木のかけ迄、念入無油斷相改、松茸生次第、早速取之、本數相改指上可申事。

附、松茸生候後、鳥獸等穢候様成る松茸は、其段御注進可申上候也。

一、松茸番人之儀は、壹所壹人或は貳人宛數多の小屋、少も不明様に相守、番所の儀は、不及申、松茸生候近所迄、節々見廻り、松茸盜取者見出し候は、捕取早速御注進可申候也。

一、松茸取申役人並番人共に松茸壹本成り共、私慾仕間敷候。尤規兄弟親類縁者知音の者たりと云ふ共、松茸壹本成り共、くれ間敷候事。



池の月半

一、番人朝々認候内は、爲代番と、親兄弟親類等の儀も、右同前に相守可申候。爲其代番之者、連判仕候。總て御松茸壹本も盜取賣買仕間敷候事。

一、御松茸取候役人は不_レ及_レ申、番人並代番共に服忌有_レ之候はば、無_レ隱其段申上、御指圖請、相動可_レ申候事。

右之條々雖_レ爲一事、於違犯、梵天帝釋四大天王、總ては日本國中大小の神祇、殊に伊豆箱根兩所の權現、三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神部類眷屬、神罰冥罰各可_レ蒙者也。于_レ時明和九年八月十九日、熊野村觀音寺。御役人衆中。

この山は、明治維新後に至りて、御料林となり、明治十八年以來、英照皇太后、皇后兩陛下、皇太子殿下は、屢茶臼山に茸狩の遊をなし給ひき。實にこの山の光榮といふべく、松風もまた瑟瑟として、その譽を語るものゝ如し。

金山城址と満月半月の池 金山の山上字實城といへる所は、則ち金山城のありし所にして、初め小野篁はこゝに繩張し、藤原秀實の裔齒田成實もまたこゝに城を築かんとしたりしことありといふ。新田義重は、新田郡寺尾(今の強戸村大字寺井村)の城主となりし以來、その子義兼、孫義房等相嗣ぎて、この地に在住せしも、政義の時、由良城に移り、左中將新田義貞の時、世良田城に轉せり。然るに義貞は、金山の絶勝なるを以て、こゝに城かんとせしことありしが、會、越前國藤島燈明寺畷に於て戦歿せしかば、遂にこれを果すこと能はざりき。

新田氏衰へし後、その同族にして岩松氏に屬せし横瀬貞氏(父は義貞の子義宗、母は横瀬美郎と稱す。法名は紹炎寺殿)は、應永二十四年(1418)宗良親王の子尹良親王の爲めに、吉野内裡の實城殿に擬して、その居館を建て、これを奉せしかば、今尙はその館址を實城殿といへりとぞ。

貞氏の後貞俊(曹源寺殿)・貞國(綠應寺殿)を経て、國繁(信濃守。横瀬宗悦入道。遠溪寺殿)に至る。これより初め義

貞の曾孫岩松家純(岩松治部大輔直國三世の孫)は、武藏國兒玉郡五十子村字城山に在陣せしが、文明元年(1469)二月二十五日嫡男明純及び横瀬國繁に命じて、金山に築城せしむ。城成りて家純は、五十子より移りて、こゝに居り、東上州の屋形と稱せられぬ。

當家新田大炊介義重入道上西以來居城又は徳川なり。是皆平陸の地にして、堀一重の邸墻たりしを、岩松治部大輔直國の四世、兵庫頭明純當所金山に城壘を築かれしより、今に至る數代安堵す。山上池有て飲水に渴する事なく、採薪亦乏しからず。寄手を一面に見なし、かけ引防戦の手遣、雙なき要害の地なり。(關八州古戦録)

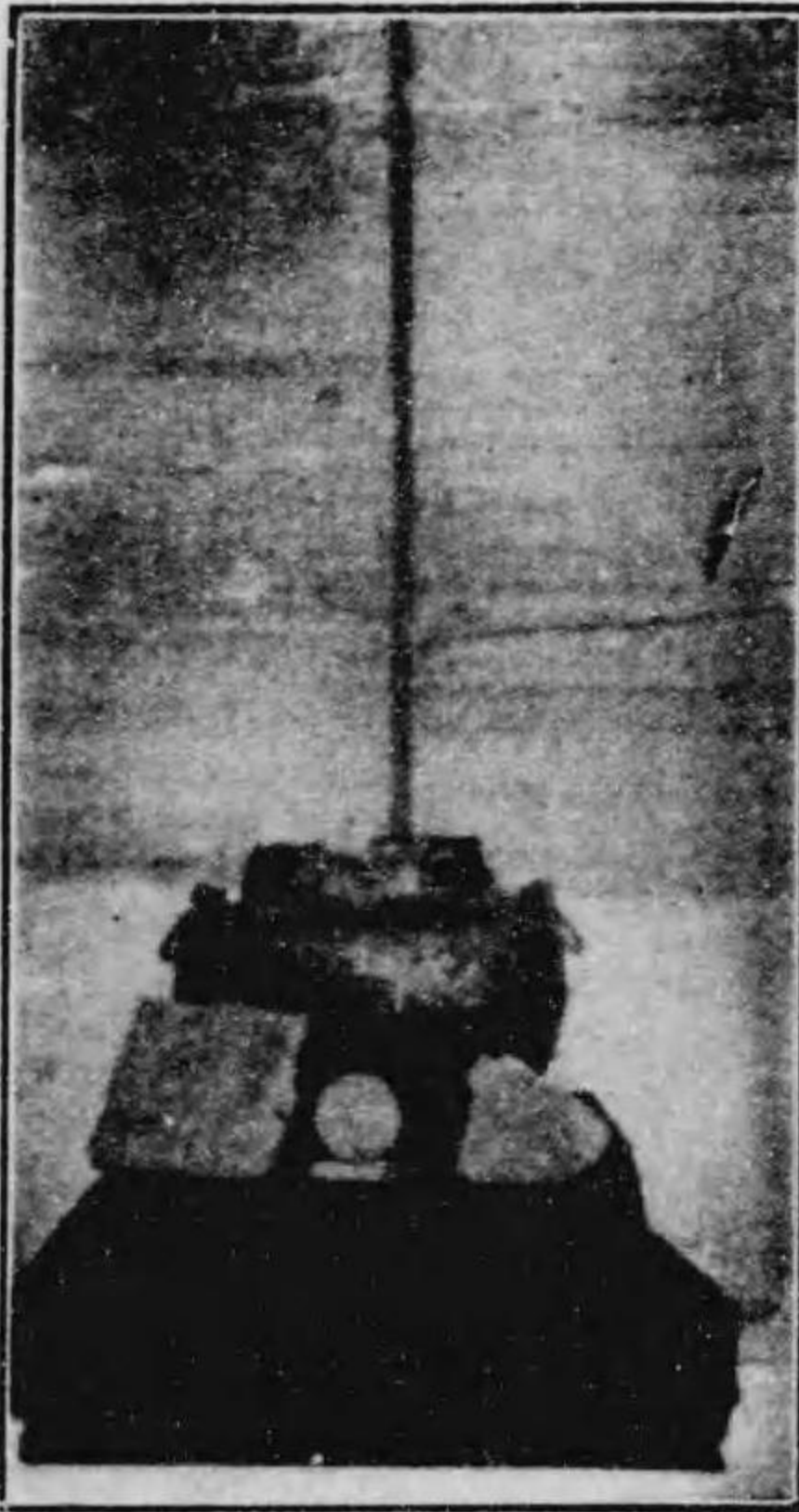
横瀬氏は、國繁より國經(白毫寺殿)を経て、泰繁(龍得寺殿)に至る。泰繁は、遂に城主岩松昌純を弑して、金山城を奪ふ。岩松氏は、金山に城居せしこと、約七十年なり。關八州古戦録に『岩松氏城居せしが、その臣これに代り、由良氏と改め城居せり』とあるは、則ちこれなり。

泰繁の子を成繁(由良信濃守鳳仙寺殿)といひ、その子國繁(由良信濃守上野國勢多佐波山田新田邑樂下野國梁田武藏國榛澤の七郡の領主瑞源院殿)に至りて、兩毛等七郡の地を領して、勢威大に振へり。天正十八年(1590)七月豊臣秀吉の

小田原城を攻めし頃、國繁は北條氏直に黨援せし故を以て、小田原城陥りし後、秀吉の爲めに遂に城地及び領土を沒収せられたり。横瀬(由良)氏は、金山に城居せしこと、五十餘年。されどもその子貞繁は、前田・上杉等の諸將に屬して、上野國松枝城を攻めし時、功ありしかば、更に常陸國牛久に移封せられ、新に五千石の地を得たり。その子由良播磨守忠繁は、徳川幕府に仕へて、高家となりぬ。

こゝに於て佐野の唐澤山(下野國安蘇郡)・佐竹の太田山(常陸國久慈郡)と共に關東山城の三所の一に數へられたる金山城は、廢せられたり。岩松家純の築城より、こゝに至る約百二十餘年物換り星移り、今はその遺址を存して、纔にその舊觀を彷彿するに過ぎず。古瓦(天正二年と記せる古瓦は、新田神社の寶物となる)は、所々に散在し、松風颯々として當時を語るに似、滿目蕭條悲風空しく城址の上を吹くあるのみにして、轉た懷古の念を深からしむ。竹林中には、滿月の池(直徑約二十間)及び半月の池(直徑約八間)の二池あり。その水は、嘗て城内の飲料に供せられたるものなり。

縣社新田神社と大中黒の軍旗 金山の頂上に在りて、贈正一位左中將新田義貞の靈を祀る。今その沿革を記さんに、明治六年五月新田義貞の遠裔新田俊純・横瀬貞篤・新田貞善等相謀りて、義貞の英靈を弔祭せんと欲し、神社建設の事を企て、八月官の許を得て、工事に著手し、同八年三月に至りて成る。同月十二日新田神社の神號を得て、同三十一日こゝに鎮祭し、翌年四月二十七日縣社に列せらる。次で明治十三年九月拜殿を造營し、且つ賽路を開きしかば、登拜の士女、日に月に多きを加へぬ。



新田神社の寶物

大祭は、毎年十一月二日、小祭は四月二十日にして、寶物には義貞の木像・大中黒の軍旗(元弘三年五月八日義貞親王の命旨を奉じ、兵を生品の社殿に擧げし時掲げたるもの)・古釜(元弘三年五月義貞、北條高時征伐の發途、利根川太子渡に於て、宮下入道南順が新田氏の一族郎黨に茶を饗せしもの)・古瓦(金山城の瓦にして天正二年の刻字あり)等あり。

し時用ひ)・古瓦(金山城の瓦にして天正二年の刻字あり)等あり。
本社は、規模宏大ならざるも、既に英照皇太后(明治二十二年十月二十五日)・皇后(明治十八年十月二十二日)の兩陛下、皇太子殿下(明治二十五年十月十七日)・皇孫殿下(明治四十二年十一月七日)の參拜を辱くしたれば、精靈も爲めに懇怡して、皇恩の深きに感涙を灑ぐなるべし。社殿に昇らば、十三州の山川を望むことを得べく、萬里の長風は足下に起りて、豪宏雄大、氣宇頓に濶如たり。
境内には、御嶽神社(祭神は、國常立命・國狹槌命・豐斟野命)・梅若稻荷神社(祭神は、若宇迦比賣命)・琴平神社(祭神は、淺間神社)・祭神は、木花咲耶媛等)の四座、御神木・金山開闢之碑などあり。御嶽神社は、尾張藩主徳川慶勝の揮毫せし御嶽神社の額を掲ぐ。この社は、もと小祠なりしが、明治六年九月本社を建て、同八年十一月更に拜殿を造營し、同十二年無格社に列せらる。同十三年よりは、年々八月九日に墓目の術を行ふ。その後明治二十七年四月に至りて、更に本社を改築せしもの、則ち今の社殿なり。
神社附近の地には、梅・櫻・躑躅などの花木多く栽培せられ、花時に至らば、百花爛漫と

して、婉を闘はし、艶を競ひ、千紫萬紅相映じて、五彩燦爛・錦繡を敷くが如く、よく忠魂を慰むるもの、如し、實にこの地は、都人の散策を試みて、紅塵を避け、浩然の氣を養ふに適すべき勝地なり。

- | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|------------|
| 維昔鎌倉古障壁 | 新田猛將自此道 | 相陽猶餘十萬兵 | 守隘無地虛可搆 | 稻崎廻岸海水高 |
| 旌旗閃々通洲島 | 三軍義烈泣鬼神 | 大將沈壁爲懇禱 | 須臾廣拆退潮流 | 海變滄田破天造 |
| 前隊已聞拔郊壘 | 殺傷積崇如獲雉 | 機槍暴出相山搖 | 海濼顛倒大鯨死 | 君不見古來戰場流血齒 |
| 今日主客皆黄土 | 黄土空埋蒼精龍 | 波洗尺鐵無全鋒 | 洲沙漠々行人望 | 只有當年老孤松 |

(服部南郭)

第二章 大間々街道地方

眞言宗西慶寺と義貞自贊の畫像 鳥之郷村大字鳥山村に在りて、各願山と號す(太田町)。門橋驛より約八町(治良)。觀應の頃鳥山右將監頼仲の建立せし古義眞言宗の道場にして、良覺法師を開山となす。當時は、初め延命山鵬鳥山寺と號せしが、後今の寺號に改む。また來

迎院東藏坊ともいへり。寶物の中、新田義重の花押と傳ふるものは紙の竪四寸九分横三寸一分にして、その形甚だ奇なり。また義貞自贊の畫像は、素襖を著し、小袴を穿てる座像にして、像の上には、『新田源義貞 元弘二年四月三日命畫工寫眞投故寺以聊貽後來 數ならぬ名のみかは又うつしをく、かゝるなき影の後もはづかし』との自贊あり。當寺には、その他義貞の所持せし武具等見るべきもの少からず。

大島と鳥山 鳥之郷村大島は大島氏、同鳥山は鳥山氏の據りし所なり。共に新田氏の支族とす。

眞言宗聖應寺と舊大元院址 強戸村大字寺井村に在る古義眞言派の寺院にして、寺尾山と號す。當寺には、菊一文字の太刀と稱せらるるもの一口及び鎌倉時代の兜一個を藏す。共に隣地なる八幡神社附近の古墳中より發掘せしものなり。地藏堂には、もと地藏窪にありし地藏を安置す。堂後の山林地を寺尾七堂といふ。往時大光院ありし所と稱せらる。

寺尾城址と新田氏 寺尾山聖王寺の東に茶白山或は館山といへる所あり。傳へいふ寺尾城のありし地にして、新田義重以來義兼・義房及び寺井次郎兼氏等の城居せし所なりと。一説に寺尾城は、世良田村長樂寺の北より總持寺に至る一帯の地域、或は群馬縣片岡村觀音山の南に蜿蜒せる一小丘なる館山に在りといふものあり。

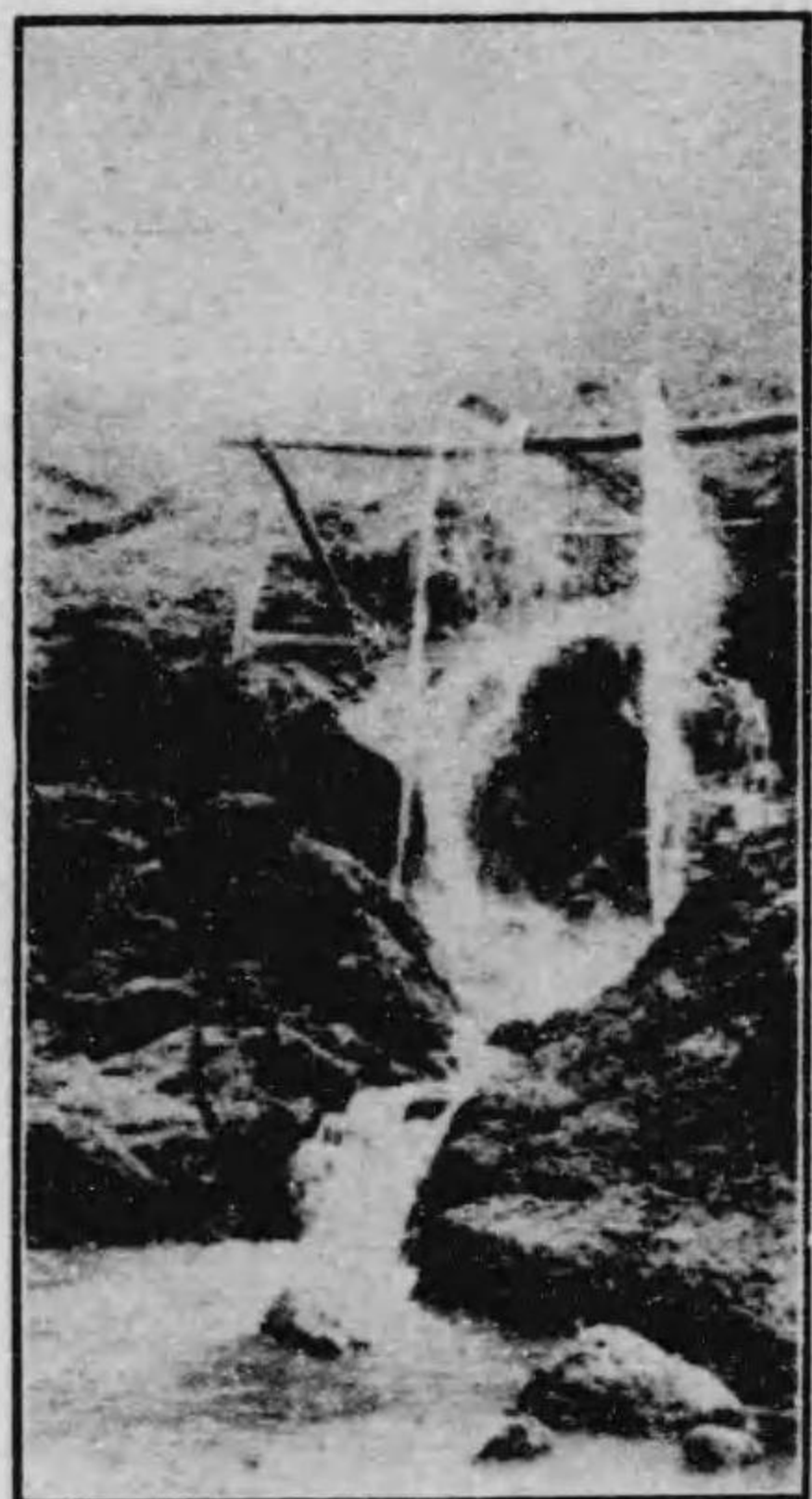
治良門橋驛より藪塚驛に至る間の田畝内には、古墳累累々として相連り、好古家に幾多の資料を與ふ。また笠松といへる奇松あり。

西長岡鑛泉と附近の名勝 強戸村字西長岡村字入長岡に在り。太田を距ること約二里半。藪塚驛より約十六町。西長岡の鑛泉地は、西山・御所山・茶白山(高さ約九六〇尺)・石尊山根本山・雷電山・高雄山等の諸峯に圍繞せられて、地高約三百尺に及び、高燥閑雅にして山水の眺望に富み、避暑避寒の好適地なれば、四時浴客絶ゆることなし。

この鑛泉は文徳天皇の皇子惟喬親王の舊蹟と稱せらる、御所山の麓より湧出するものにして、その量は一分時間約一斗三升に及ぶといふ。泉質は、弱亞爾加里泉に屬し、無

色透明にして、少しく硫化水素を帶ぶ。溫度は、攝氏の約十八度半を有し、特に慢性腸胃加答兒・泌尿病・婦人病等に効ありと稱す。

この鑛泉の發見年代は、詳ならざれども、口碑の傳ふる所によれば、今を距ること千有



賀茂川の瀧

餘年前、惟喬親王の發見せられし靈場なりと。よりに附近に御腰掛岩・御所椿・御影の井などの舊蹟あり。その後明治二十一年小川喜太郎なるもの、ここに浴場を設けて、長生館といへり。その庭園は、頗る廣く、植うるに數多の花木を以てす。その附近には、菜圃・麥圃

散在し、また金山一帯の松林を一眸の裡に望むを得べくして、浴客の無聊を醫するに足るべし。この地の名産には、包直に適せる鑛泉煎餅の外、魚類(鮭・鯉)・鳥類(麩茸)などあ

り。また近傍の地よりは、石材をも産す。
 浴客の散策に適せる勝地には、西山公園(薬師堂ありて眺望絶佳なり)・賀茂川の瀧・西野の石山・大沼・小沼・中の沼・奥の沼・甲岩等あり。或る文士は、天王山春曙・西山早蕨・賀茂川流螢・長岡池扁舟・御所山紅葉・新田山茸狩・利根川眺望・御影井舊址を以て、西長岡の八景となしたり。

西長岡より各要地に至る大略の距離を記すれば、次の如し。

藪塚鎮泉……八町	藪塚本町……一里八町	小俣驛……一里半	桐生驛……一里半
岩宿驛……二里	國定驛……二里	大間々……三里	足利……四里
木崎……三里	境……四里	尾島……四里	伊勢崎……四里
妻沼……五里	熊谷……七里半	前橋……七里半	

この地方は、もと新田義重の孫長岡次郎經氏の據りし所にして、古墳累々、田畑の中に鱗次し、好古家をして涎を垂れしむ。實に新田郡には、篠塚・飯塚・成塚・藪塚・杉塚・花香塚・出塚・平塚・女塚などの地名あるを見ても、その一斑を窺ふに足るべし。

藪塚湯の入及び瀧の入の鑛泉 藪塚本町大字藪塚に二鑛泉あり。一を湯の入鑛泉(藪塚驛より約八町)といひ、一を瀧の入鑛泉(藪塚驛より約十六町)といふ。共に鹽類泉に屬し、無色透明にして、攝氏の約十五度の溫度を有し、脚氣病・瘡癬・胃病・子宮病等に特效ありといふ。

湯の入鑛泉の旅舎には、伏島屋・今井屋等あり。いづれも溫泉神社及び薬師堂ある山の麓に於ける岩石の裂罅間より湧出する鑛泉を汲み來たりて、浴用に供す。かくてこの泉水は、一に巖理水の名あり。

要するにこの地方は、静寂閑雅にして、南は新田義貞の義兵を擧げし笠懸野に接し、東は杜鵑の名所たる雷電山を控へ、東北には躑躅多き八王子山あり。實に避暑及び轉地静養に適する所にして、浴後欄に倚らば、清風徐に來たり、人をして三伏の炎暑を忘れしむ。附近の地よりは、藪塚石といへる石材を出だす。

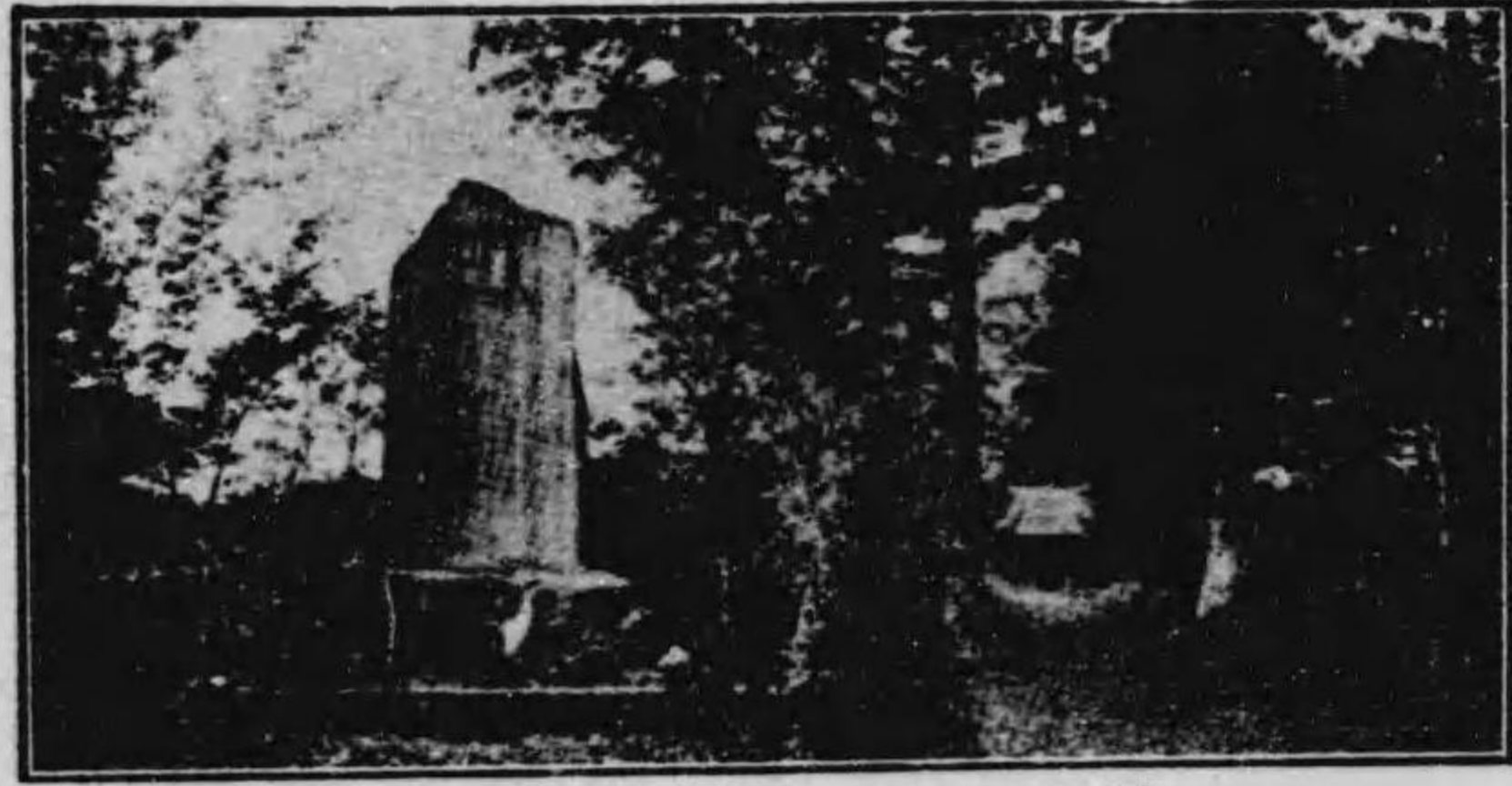
これ等鑛泉の沿革は、詳ならざれども、湯の入の地名が古くより存し、また湯前山といへる曹洞宗の古刹あるを見ても、その發見は、頗る古き時代にありしなるべし。され

どもこれを薬湯として、浴するに至りしことは、正中年間(1324—1325)以後にして、元文年間(1736—1740)河内六郎平なるものは、官許を得て、鑛泉宿を開きたりといふ。

藪塚は、昔時、岩松遠江五郎經兼の弟藪塚六郎朝兼の知行せし所なり。

藪塚石の採掘場 藪塚本町大字藪塚村に在り。青白色を呈する砂岩即ち藪塚石の採掘事業は、四十餘年前、足利郡の石工田中千代吉の開始せしものなり。その後彼れは、その採掘を中止せしが、明治二十五年の頃、土地の有志者相謀りて、株式會社を組織し、再びこれを採掘するに至れり。爾來藪塚石の名、四近に聞え、その需要頓に増加せしに及びて、更に明治四十二年七月藪塚石材軌道株式會社を創立し、本社を太田町に、事務所を藪塚村に置けり。現時藪塚石の採掘に従事せるものは、二百餘人ありて、年々約二十萬才を産出す。

岡上神社と岡上次郎兵衛 岡上神社または景能神社は、藪塚本町大字本町村に在り。寶曆二年(1752)九月二十九日の創建に係り、徳川幕府の代官にして、笠懸野の開拓者た



岡上神社

る岡上次郎兵衛景能の靈を祀る。この社は、もと岡上靈神と呼ばれしが、後今の名に改められたり。明治十七年九月二十九日その開拓地十八ヶ町村の有志者は、相謀りて、彼れの偉業を後世に傳へんが爲めに、こゝに頌德碑を建て、爾來春秋の二回祭典を行ひ、以てその餘德に酬ゆ。

◎◎◎◎◎ 岡上次郎兵衛 武藏國兒玉郡高柳村の人にして、祖先以來代々徳川幕府の代官なりき。次郎兵衛は、壽命を奉じ、代官として新田郡に赴任し、銳意力を殖産興業に注ぎたり。常時笠懸野は、茫々たる曠原にして、民を利すること少かりしかば、次郎兵衛は甚だ、これを遺憾とし、寛文四年(1665)陣屋を鹿川村に置き、大原本町外七ヶ村を創め、次でまた山田郡相生村大字兼町より新渠を開鑿して、渡良瀬川の水を導き、こゝに一千五百八十四町歩の田地を得たり。今の新田郡に於ける二大水利組合の一たる岡登堰普通水利組合は、彼れの偉業を紹行せるものに外ならず。

また彼れは所々に溜池を設けて、灌漑の利を圖りしが、排水の法宜しきを得ざりしかば、下流地方の村民は、大に彼れを非難するに至れり。かくて幕府は、彼れを鞫問せんと欲し、次郎兵衛を江戸に召す。次郎兵衛は、大に驚き、憂憤の結果、遂に奥中に於て自刃せり。時に貞享四年(1685)十二月二日にして、年五十餘。村民乃ちその遺骸を笠懸村大字阿佐美村國瑞寺に葬る。實に彼れは、那須野原の開墾を實行せし三島通庸の如く、百難を排し、公益を謀りたるものにして、後世の龜鑑となすに足るべし。

國定忠次の墓 藪塚本町の西方、佐波郡東村大字國定の天台宗養壽寺の境内に在り。伊勢崎を距ること、東北約一里半。忠次は、國定村の農、長岡權太夫の子にして、上州長脇差の本色を遺憾なく發揮し、その俠名を世に轟かしたり。近時その生前の意氣を追慕して、墓前に香花するものもまた少からず。

養壽寺の南、約十町を隔つる大字田部井村字水殿(ツウド)に忠次沼といへる小沼あり。これ天保年間(1830-1843)忠次が穿ちたるものにして、約二十三町歩の田地に灌漑することを得、農民今尚ほその餘澤に浴す。

笠懸野と新田義貞の擧兵 新田郡の北部を占むる大平野を笠懸野といひ、北は山田郡大間々町に連り、東は廣澤山・新田山を限り、西は勢多郡粕川に達して、面積三方里(田新田面積の約三分の一)を超え、高さ百三十米乃至百六十米に及ぶ。されども今は、通例藪塚・鹿田・生品・綿打諸村の曠野をいふ。土地率ね粗鬆にして、水利に乏しきが故に、茫漠たる林原を

なす所多し。

この野は、もと新田原と呼ばれしが、源頼朝が那須野狩の歸途、建久四年(1193)四月二十八日新田義重を新田の館(今の田村總持寺の地)に訪ひし時、義重は頼朝の爲めに、笠懸の射的を行ひたるより、後世これを笠懸野と名づくるに至れり。また元弘三年(1333)五月八日新田義貞義旗を生品の社前に樹て一族郎黨百五十騎を率ゐ、鎌倉に向ひて打ち出でたるは、則ちこの地なり。その後この地の屢、戰場となりしことは、太平記等に見ゆ。

石灰製造所 笠懸村に在り。岩宿驛を距ること約七町。

石灰山は、もと國瑞寺の有なりしが、百餘年前叡山清造なるもの、これを購ひ、石灰の製造を開始して、今日に及べり。



望遠の沼美佐阿

現時採掘せる地積は、約二千五百坪にして、年々一萬五六千俵の石灰を産出す。附近の國瑞寺境内には、岡上・次郎兵衛・景能の墓あり。

阿佐美沼と蕪菜 笠懸村に在りて、東武鐵道の新桐生驛及び兩毛線の岩宿驛に近し。この池は、もと淺海アサミまたは淡海アサミとも記せらる。廣き十九町歩に上りて、鮎・鰻・蕪菜等を産す。今この池より二流を引きて灌漑に便にす。その一は、山田郡廣澤村に至り、その一は、藪塚村に至りて、岡上渠に通ず。

沼の南に八幡神社を鎮座せる八幡山の一小丘あり。これに登りて、沼を望まば一大水銀盆を見るが如く、赤城の諸山これに映じて、風色頗る佳なり。實にこの地は、紅塵千丈の市街地に住める人士の散策すべき好適地と謂つべし。

第三章 伊勢崎街道地方

眞言宗圓福寺と新田氏の墳墓 寶泉村大字別所村に在りて、御室山と號す。寛元二年

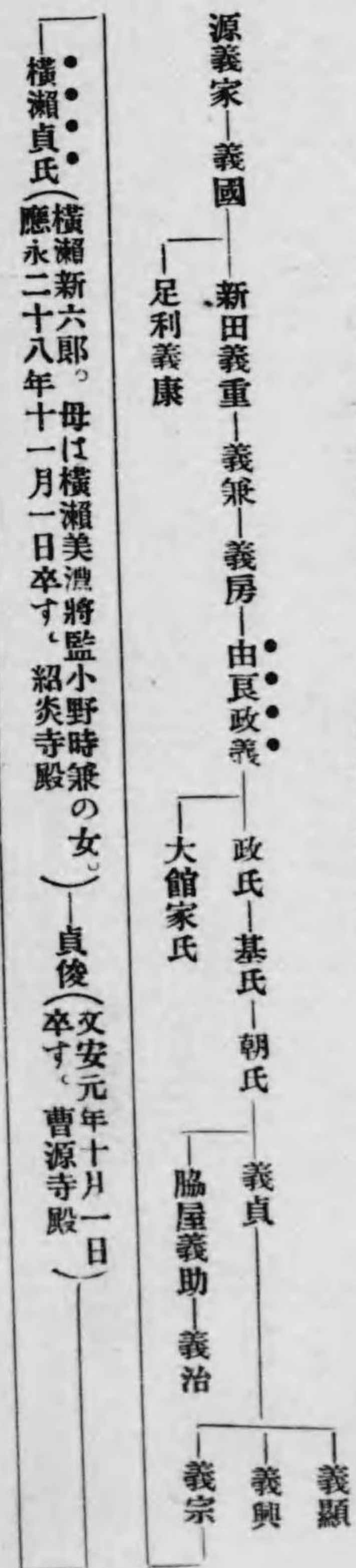
(二〇四)新田又太郎源政義(由良入)の開基せし眞言宗の靈場にして、山城御室(京都の西北約一里半の御室山仁和寺は、眞言密乘の巨刹)の高僧靜毫阿闍梨を開山となす。寶物には、家光の寄附せし羽子板、新田政義の筆なる天神の畫像、運慶の作といへる不動尊、行基の作と傳ふる觀世音等あり。

境内は、閑靜にして、茶臼山に國良親王の墓あり。また觀音堂には、觀音を安置す。この觀音は、源義家が東征の時、祈願せるものなりと稱し、新田氏累代の崇敬淺からざりしものにして、俗に厄除觀音とも呼ばれ、遠近より參拜するもの多し。觀音堂の附近には十三基の墓塔あり。その最大なるものを義貞の父朝氏(沙彌)の碑とし、政義・政氏・基氏等の墓塔これに次ぐ。

由良城址と岩松寶泉閑居の址 由良城址は、寶泉村大字由良村に在り。太田を距ること約三十町。往昔八幡太郎源義家は、軍功によりて、新田郡を領し、義國・義重を経て、政義に至る。政義の時、事を以てその領土を沒收せられしが、その子政氏の時、再びこれを領することを許されたり。

政義は領土を没收せられし時、世良田城より由良郷臺に移りて、館を構へ、由良を以て氏とす。世にこれと呼んで臺源氏といふ。後政義は、剃髮して由良入道阿義と稱し、眞言密乗の法を研め、その西北なる別所村の地に御室山圓福寺を建て、これに歸依せり。その四世の孫義貞は、これより反町(生品)村及び世良田に移り住せしかば、由良城は、一時荒廢に歸したりしが、その子義宗は宗良親王を奉じて、再びこれに據る。義宗の子貞氏は、横瀬氏と號せしも、五世の孫成繁に至りて、また由良氏と稱せり。

○由良・横瀬兩氏の略系(新田氏その他諸氏の系譜を参照せよ)



貞國(康正元年十二月三日卒) — 國繁(横瀬宗悦入道。長享二年五月十五日卒。遠溪寺殿) — 國經(永正十七年二月二十日卒。白毫寺殿)

泰繁(新田金山の城主。天文十四年九月九日卒。龍得寺殿) — 由良成繁(由良信濃守。新六郎。刑部大輔。新田金山の城主。天正壬辰年六月二十日卒。鳳仙寺殿)

國繁(由良信濃守。新田金山の城主。上野下野。武藏七郡の領主。慶長十六年正月三日卒。瑞源院殿) — 貞繁(由良信濃守。常陸國牛久に移住す)

忠繁(由良播磨守。從四位下侍從。徳川幕府に仕へて高家となり) — 江戸堀端一番町に住す。子孫世々高家三公の一家となる)

由良城址の南には、岩松滿國へ道寶泉閑居の遺址あり。また寶泉野は、岩松滿純の住せし所なり。

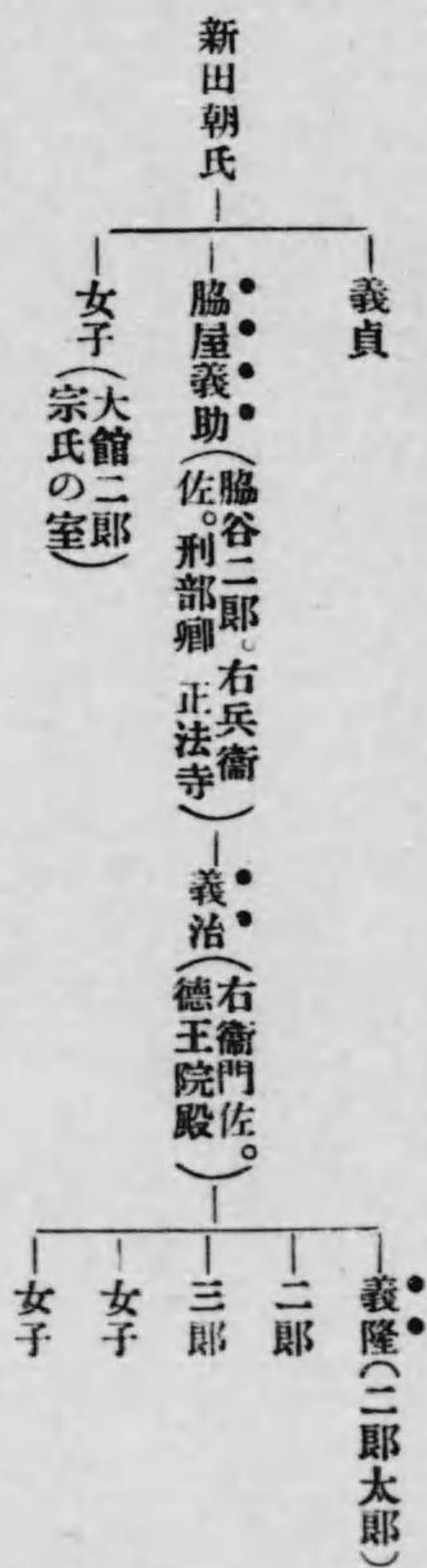
眞言宗正法寺と東宮殿下 寶泉村大字脇屋村に在る眞言宗の古刹にして脇屋山と號し、延喜年間(901—923)の開創なりといふ。元暦元年(1182)新田義重は、傳燈法印有辨僧都を高野山より招きて、行基の作といへる聖觀音、聖德太子自作の像といへるものを



正法寺

安置す。宥辨は、則ち中興の祖なり。當寺は、新田義貞及びその弟脇屋義助の歸依深く、寄するに脇屋郷の地と大般若經六卷を以てす。かくて義助の伊豫國に於て死せし後、その遺髪をこゝに埋め、正法寺殿傑山宗英大居士と謚したり(興二年五月)。その後慶安二年(1649)には、徳川幕府より九石餘の寺領を得、享和年間(1801-1803)には、大に山門・觀音堂などを修築せしも、文化二年(805)祝融の爲めに烏有に歸しぬ。されば現存するものは、その後の築造に係れり。明治四十一年十一月十八日近衛師團兵機動演習のこの地方に行はれし時、當寺の薬師堂は、東宮殿下の御休憩所に充てられたり。脇屋氏の故地 寶泉村字脇屋は、新田氏の支族脇屋氏の故地なり。

○脇屋氏の略系(新田氏その他諸氏の略系を参照せよ)



脇屋義助の墓 伊豫國越智郡國分寺の東二町、宇谷の口の丘上に脇屋義助の墓あり。碑の高さは、五尺にして右側に清和天皇十七代、中央に脇屋刑部卿源義助公神廟、左側に曆應三年五月十一日の字を刻す。寛文九年(1720)法印快政等の再建する所。曆應三年は、南朝の興國元年(1350)に當たる。墓碑の側に貝原益軒の贊文を刻せる碑あり。その文に曰く、擧兵廟算、伏義速驅、桓々雄武、可起懦夫、戰功籍甚、名與兄俱、終南海。備前の兒島には、佐々木薩摩守信胤梶原三郎、去年より宮方になりて島の内には交る人もなし、されば大船數多汰へて、四月二十三日(曆應三年)伊豫國今張浦に送り著け奉る。大館左馬之助氏明は、先帝山門より京へ御出ありし時、供奉仕りてありしが、如何思ひけん、降人になり、且くは將軍に屬して居けるが、先帝倫に牢の御所を

御出ありて、吉野に御座ありと聞きて、馳せ参りたりしかば、君御感ありて、伊豫國の守護に補せられしかば、去年の春より當國に居住してあり。(中略)。當國の内にも將軍方の城、僅に十餘箇所ありけるも、未だ敵の向はぬ先に、皆聞き落してければ、今は四國悉く一統して何事かあるべきと、たのもしく思ひあへり。斯る所に同五月國府に居られたる脇屋刑部卿義助に病を受けて、身心腦亂し給ひけるが、僅に七日過ぎて終にはかなり給ひけり云々。

(太平記)

脇屋義治の墓 伊豫國温泉郡湯山村大字河中村字東岡に兩新田神社あり。上社は左少將新田義宗、下社は義宗の従兄右衛門佐脇屋義治を祀る。この地は、もと日浦村といひ、社號もまた兩新田大明神と稱せられしが、明治三年今の社號となりぬ。

東岡を距ること約八町、字藤野々に神宮山圓福寺あり。傳教大師の開創せる天台宗の古刹にして、もと神宮寺と呼ばしが、應永十二年(1405)得能通範、これを新田義宗、脇屋義治の香華堂となし、今の寺號に改めたり。當寺には、義宗、義治の遺物なる鎧、太刀、馬具等及び位牌あり。義宗の位牌には、『永尊院殿前武州刺史朝散大夫旭山法光大居士高靈。應永十二年乙酉天十一月五日新田左中將源義貞公三男故少將義宗公』の字あり。また義治の位牌には、『德王院殿故右衛門佐朝散大夫源朝臣道玄舜山大禪定門。應永十二年乙酉天八月七日脇屋源義助公嫡男脇屋義治公』の字あり。墓碑は共に三輪塔にして、義宗のはその居館ありし芳野山城址の北麓を距

ること東北五町の山中に在り。義治のは、加名生山城址の南麓の東方山腹に在り。

大日本史の記する所によれば、義宗は、『正平二十三年(1368)與上杉憲將等、戰不克死之』また『義治出軍千武藏、與上杉朝房、戰、不克走、信濃、不知所終』とあり。蓋し得能、河野等の如き南朝の忠臣が二氏の事を掩蔽せしが故に、世人これを知らざりし爲めなるべし。

明德四年四月二十五日新田武藏守義宗、脇屋右衛門佐義治並に二氏の妻子及び一族には、堀口治部大輔貞純、大江田式部大輔義政、田中修理亮義俊、里見大炊介義氏、羽川越中守直重、二井兵部大輔義綱、天野氏部大輔政長、細屋右京亮義信、大館小次郎氏清、岩松三郎經氏、堀兵庫介貞政、酒匂右衛門尉安元、鳥山右衛門尉義堯、宇都宮三河入道定綱、中條宮内大輔經俊、他家隨兵の士、兒島四郎左衛門正綱、同四郎正胤、篠塚掃部介範能、畑次郎右衛門時忠、小山田兵衛尉家久、直理次郎太夫直家、栗生七郎左衛門尉俊貞、太田次郎基行、金子三郎元忠、舟田六郎氏春、林六郎入道源秀、河島源吾左衛門尉氏則等三十八名、外十餘人。或は商人或は山伏或は行者乞食の姿に身を變へ、出羽の國羽黒山の寺中護法院少僧都寛明の院内を立出たるは、此年の正月二十二日の事なりしが、九十餘日にして、漸く伊豫國越智郡の大島に著し、島司村上式部大輔師清、同山城守義顯父子の館に到り、是より浮穴の館得能備後入道通範が所領なる道後湯の奥山は、人倫遠く絶え果て、閑疎なる幽谷にして、井河上、河野二郷に接する要害の地なれば、此處の小峯に城を築き、芳野山、加名生山と號する二個所の麓の平坦なる所へ、館を構へ

て、二氏及隨從の人々を安穩に住居せしめ、(中略)此兩氏應永十二年の秋冬此地に病死す云々。(芳岡嵐史)

村田氏の故地 生品村の東部を村田といふ。岩松遠江太郎時兼の長子頼兼は、村田に住して、村田太郎といひぬ。

反町城址と北條氏との古戰場 反町城址は、生品村大字反町に在り。元徳年中(1329-1330)新田義貞ここに城きし以來、新田義興もまたここに居りしが、延文年間(1356-1360)以後は、大館氏、天正年中(1573-1591)には反町大膳居城せり。今尙ほ城寨の址を存す。

天正十一年(1584)三月北條安房守氏邦は、中瀬江原(共に武藏の大半)に屯し、平塚(世良の西)の渡を越えて、大館・木崎・江田の民戸を焼き拂ひ、脇屋・反町に陣して、太田の金山に向へり。

反町薬師と鳴かすが池 生品村大字反町に在りて、太田を距ること約一里。享保十九年(1778)僧祐泉の建立せる眞言宗照明寺には、行基の作といへる薬師の石像を安置す。

俗にこれを厄除薬師または六算除の薬師と稱して、賽客甚だ多し。殊に舊正月四日の縁日には、四歳に當たる男女兒の厄除に靈驗ありとて、詣づるもの最も多くして、頗る雑沓を極む。



生品神社

この地は、元徳年中(1329-1330)新田義貞の築きし所なれば、今尙ほ寺域の周圍に堤防及び濠を存す。寺の背後に鳴かすが池と稱せらるゝ池あり。新田義貞の築城の際、穿ちしものなりと傳へ、遊覽者の杖を曳くもの少からず。

郷社生品神社と義貞の旗擧げ 郷社

生品神社は、生品村大字市野井に在りて、反町を距ること約半里(太田の西約二里半。足利の西約三里。伊勢崎の東)。大己貴尊を祀れる一小祠なれども、上野國神名帳には、新田郡從三位生階

明神と記せらる。その創建年代は、未だこれを詳にすること能はざるも、社前に天冲を貫ける巨樞老杉の矗立するを見れば、その古きことを知り得べし。

寶物には、圓形の古銅鏡一面、吉田印西の畫像、鋼鐵製古代轡一啣、自贊和歌二首一枚、小山田與清の詠歌短冊一葉、大島守之の差物たる中黒の軍旗一旒、横瀬侍從源朝臣貞顯の寄進狀の寫一通等あり。

境内には、義貞公義舉之碑(明治三十一年建立)、東宮殿下御臨御記念公園(明治四十一年十一月十九日近衛師團兵の機動演習ありし時、皇太子殿下の臨御を忝くしたる爲め、その記念として設けたる所)あり。またその附近には、新田堀・旗の本・旗塚・床几塚・起請塚・旗八幡宮など新田義貞に關するもの多くして、轉た當年を追想せしめ、後醍醐天皇時代の史乘、眼前に展開す。

この社は、元弘三年(一一三三)五月八日新田義貞が大塔宮護良親王の令旨を奉じて、鎌倉の北條高時追討の爲め、大中黒の旗を社頭に樹て、大館次郎宗氏・その子孫太郎幸氏・二男孫二郎氏明・三男彦三郎氏兼・堀口三郎貞満・舍弟四郎行義・岩松三郎經家・里見五郎

義胤・脇屋次郎義助・江田三郎光義・桃井次郎尙義等の一族郎黨、兵百五十騎を従へ、北方里餘の笠懸野(新田原笠懸原)に向ひて、進軍したる所なり。

かくて大井田・里見・烏山・田中・羽川の諸將を始めとし、越後・甲斐・信濃等諸源氏の兵七千餘人來たり會す。進みて武藏國に至れば、上野・上總・常陸・武藏等諸國の兵もまた期せずして會せしかば、立ろに兵約二萬人となりぬ。十一日義貞は、賊將櫻田貞國の兵を入間川に、十二日久米川に破り、十五六日北條泰家の率ゐし十餘萬の兵を分倍河原に苦しめ、進みて鎌倉に向へり。十八日義貞、兵を二手に分ちて、鎌倉を攻む。大館宗氏、江田行義は極樂寺坂よりし、堀口貞満・大島守之は巨福呂坂(コブクロ)よりし、義貞・義助は假粧坂よりす。二十三日北條高時等は、遂に新田氏の軍に敵すること能はずして、東勝寺に自殺し、北條氏滅ぶ。實に義貞が生品の社頭に大中黒の旗を擧げしより、こゝに至る約十有五日なり。

護良親王の令旨 元弘三年春北條高時が後醍醐天皇を隱岐に遷し奉りし時に及びて、義貞は義兵を擧げんと欲

し、家臣船田義昌をして、護良親王の令旨を請はしむ。二月十一日親王乃ち高時征討の令を發し、義貞に與ふ。その令旨は、次の如し。

綸言を被るに稱なく、化を敷き、萬國を理むるは明君の徳なり。亂を撥め、四海を鎮むるは、武臣の節なり。頃年の際、高時法師が一類、朝憲を蔑如し、恣に逆威を振ふ。積惡の至り、天誅已に顯る。爰に累年の宸襟を休め奉らむ爲に、將に義兵を起さむとす。愾感尤深く、抽賞何ぞ淺からむ。早く關東征伐の策を運らし、以て天下靜謐の功を致すべし。されば綸旨此の如し。仍て執奏件の如し。元弘三年二月十一日。左少將。新田小太郎殿。

市野井と一井氏 市野井即ち古の市之井は、生品村に在りて、太田を距ること西約二里半、篠塚の南約一里。この地は、昔時東山道の一驛次たりし所にして、元弘三年新田義貞義舉の地を以て著はる。新田系圖には、堀口家貞の子貞政、一井氏と稱す云々。また太平記には、一井兵部大輔義時この地を領すとあり。

○一井氏の略系(新田氏その他諸氏の略系を参照すべし)



政家(一井左近將監、建武四年三月越前金ヶ崎に於て父子戦歿す) — 氏政(一井兵部少輔) — 義時(一井兵部大輔)

金井と金井氏 金井は、綿打村に在りて、岩松遠江太郎時兼の三男金井三郎長氏の領したる所なり。

大根と綿打氏 大根は、綿打村に屬す。古の所謂青根にして、もと世良田村の世良田山長樂寺の領たりき。大慶寺は、大館次郎宗氏の子綿打太郎爲氏の住せし所なり。

田中と田中氏 田中は、綿打村に在り。新田義重の四男里見四郎義俊の子義清は、始めて田中氏を冒し、後岩松時明(時兼の弟にして、田中遠江二郎と稱す)も、また田中氏を稱し、世々この地方を領有したり。

皇太子殿下行啓記念碑 綿打村綿打尋常高等小學校分教場の敷地内に在りて、生品

神社の西約一里半の所に當たる。明治四十一年十一月十九日近衛師團兵の機動演習ありし時、皇太子殿下は、この分教場に御休憩ありて、庭前に金松樹を御手植遊ばさる。次で同月二十五日御眞影を下賜せられたり。こゝに於て村民は、この無上の光榮を萬世に傳へんが爲めに、明治四十二年四月二十五日金松樹の傍に、皇太子殿下行啓記念碑を建てぬ。碑の高さは、一丈四尺餘、幅三尺二寸にして、近衛師團長大島久直の揮毫にかかれり。

村社雷電神社と石窟 佐波郡采女村大字伊與久に在りて、綿打村に近し。創建の年代は、詳にすることを得ずといへども、口碑の傳ふる所に據れば、三浦義澄・上總介廣常の建立にかゝり、後新田義貞これを修營せるものなりと。祭神は、火雷神・高靈命にして、避雷保護の神として名高く、一月及び三月の二十五日に例祭を行ふ。祭日には、詣參の老幼男女、境内に溢れ、甚だ股賑を極む。

社域は、約一千二百坪にして、老杉古松鬱蒼として茂り、櫻樹これに交はるありて、花時杖を曳くもの多し。社殿の右側に廣き四坪餘の石窟あり。嘗てこれより刀劍・古器物の類を出だしたる所なり。

延喜式内の郷社大國神社 綿打村に近き佐波郡采女村字下淵名に在り。往古延喜式内上野十二社の中に加

へられし神社にして、大國主神を祭神とす。社域には、老松參差し、幽邃にして神威自ら加はり、社殿は輪奐の美を盡くし、自ら賽客をして戀を正さしむ。毎年三月二十九日及び十月二十一日に例祭を行ふ。

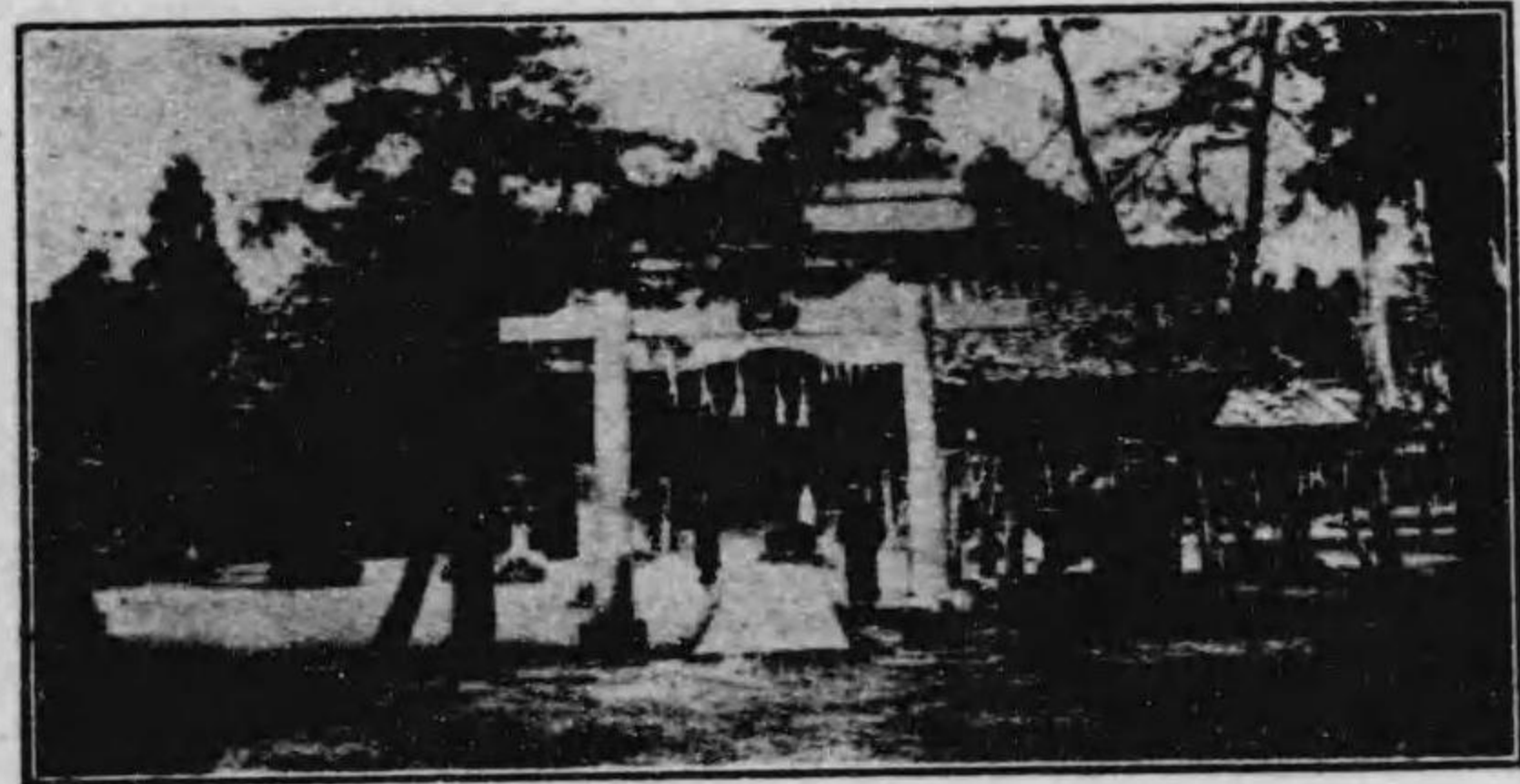
この社は、垂仁天皇の九年の創建と傳へ。俗に五護宮または第五姫の宮とも稱す。九百三十餘年前、我が國は風雨不順、疫癘流行して、人民の艱苦甚だかりしかば、朝廷爲めに諸國の神祇に奉幣して、祈願ありしことあり。本社は、その一なりといふ。

第四章 例幣使街道地方

高山彦九郎の墓碑 太田の西南澤野村大字細谷村ホヤに在り。細谷村は、勤王家高山

彦九郎正之の出でし所にして、その邸址の西約一町餘の地に、高山家の先塋あり。明治二十五年有志者は、正之の百年祭を舉行せし時に當たりて、先塋の側に一碑を建て、高山正之の墓碑となしたるものなり。旅行者は、宜しく往てその忠魂を慰むべし。

細谷と細谷氏 新田義重の裔新田又太郎政長の長子彌太郎國氏は、細谷に住して、細谷國氏と稱す。國氏より秀氏・秀國・房清・清房・保房・爲房・資房・資遠・資實・資光・資勝



冠 稻 荷 神 社

資永・資政・資陳・資憲・資正・資孝・資懷・資重・資氏等の子孫
相嗣ぎたりき。

日本七稻荷の一なる冠稻荷神社 澤野村大字細谷村に在りて、伏見・信田・王子・妻戀・豊川・田沼の稻荷と共に日本七稻荷と稱せられたる名社なり。かくて往昔は、年々五十三度の祭典を行ひ、社殿もまた年々改造の定めなりしが、今はその制廢れぬ。當社の起源は、源義經東下の途次、この地に留まりしこと數日、會冠中に秘藏せし山城國伏見の稻荷神社の靈を鎮祭せしに始まるといふ。よりにて冠稻荷の名あり。本社は、元祿三年(1686)正月に、拜殿は延享二年(1789)四月に建築せられしものにして、明治五年七月村社に列せらる。祭神は、宇迦之御魂神・大宮賣命・太田命にして、また大巳

貴命・少彦名命をも配祀す。祭日は、もと二月初午の日なりしが、近時は四月一日と改む。寶物には、冠石・御備石・疱瘡石等あり。

思ひなく心も空もはれやかに、かみに詣でしことぞうれしき

(高山正之)

牛澤と孝子 澤野村大字牛澤村は、徳川家治將軍の頃、孝子大澤三二郎(安永壬辰の)の出でし所なり。

木崎町の今昔 木崎町は、新田郡の南部に位して、江田・高尾・赤堀・木崎宿等より成り、人口約二千八百人あり。東武鐵道會社は、その南端に木崎驛を置く。淺草驛を距ること約六十二哩。伊勢崎驛を距ること約八哩。倒幣使街道の要驛にして、昔時は頗る繁榮を極めし所なり(太田町へ一里三十六町。境町へ一里十町。尾島町へ三十一町)。

南山巡狩録に觀應五年(正平五年)足利尊氏、岩松禪師頼宥に世良田右京亮の跡及び上野新田莊内木崎・安養寺等を與ふとあれば、南北朝時代の頃は、岩松頼宥がこの地方を領有せしことを知るべし。その後元治元年(1862)十一月水戸脱走の士は、武田耕雲齋正生

を推して、この地を過ぎ、京都に向はんとせし時、武藏國岡部の邑主安部氏は、これを防
ぎしも、効を奏せざりき(武田新雲齋の事件は、愚著
徳川時代通史を参照せよ)

日蓮宗妙高寺と鬼子母神 木崎驛に近き所に在り。日蓮宗の一本山たる甲州身延山
久遠寺の末寺にして、もと長立山蓮乘院と號せしが、應永二十八年(1431)の再建後、妙高
寺といへり。草創の年代は、明ならざれども、中興の開山を日誘上人となす。

寺内に傳教大師の自刻と稱せらるゝ子安鬼子母神の像を安置す。明和三年(1766)不
幸にして、堂宇祝融の災厄に罹り、烏有に歸したりし以來、一時鬼子母神の所在を知る
ものなかりしが、寛政三年十月十二日再び當寺の有となりぬ。よりにこれを火中出現
子育鬼子母神と唱へ、賽客の詣づるもの少からず。殊に毎年一月十三日、三月二十四日、
十月二十三・四日の縁日は、頗る賑ふ。

江田と江田氏 綿打村に上江田、木崎町に中江田及び下江田あり。徳川義季の長子
下野守頼有は、江田に住して、江田氏と稱す。太平記には、江田三郎光義、同二郎行義と

あり。中江田の松林中に一碑を存す。傳へいふ新田義重の塚なりと。

江田行義の城址と江田の池 木崎町大字中江田村に一池あり。江田の池または枝の
池といひ、新田左中將の支族江田二郎行義の城址と相接す。工字状をなして、廣袤東西
二十二間、南北十一間。その水常に涸渴せざるを以て、旱魃の際には、里人こゝに來たり
て、雨乞をなすといふ。池畔に一小亭あり。池水を以て、遊覽者の入浴に供す。その附
近に八株の松樹あり。往古この邊には、冠懸松・駒立松・腰掛松・物見松などありしも、
惜むべきかな維新の際に伐採せられたり。

池汀には、片葉の蘆といへる蘆葦繁茂す。口碑によれば、城主京都に上りし時、主を
慕ふの餘り、みな西方に向ひて、葉を生するに至りしものなりと。

秋風に吹かれたる島松の、枝の池にや波のこゆるん

從三位行家

義貞の冠著松 木崎町大通寺の境内に在り。元弘三年(1183)五月新田義貞義旗を生
品神社の社頭に掲げて、笠懸野に進軍し、鎌倉に向へる途次、この地を通過せり。時恰



冠 著 松

も暑中なりしかば、義貞、軍を駐めて、大通寺に憩ひ、冠を庭前の松に懸く。されどもその當時の松は、既に枯死せしが故に、後人遺跡の堙滅せんことを患ひ、こゝに類似の松を植ゑたるもの、即ち今の冠著の松なり。傍に義貞の歌と稱するものを刻みたる一碑あり。

立ちかへりまたも来て見んかむりきの

松よちとせをわれにちぎらば

尾島町と名勝史蹟 尾島町は、嘉應年間(1169—1170)の所謂小島の地にして、新田郡の南部に位し、關八州の最大河たる利根川を隔て、武藏國大里郡オホサタと相對す。太田を距ること西南二里、木崎驛の南約三十町、新田及び徳川兩氏の發祥地たる世良田の東約一里の所に在り。岩松・堀口・前島・大

館・安養寺等より成りて、人口約七千五百を算し、生絲・繭などの取引行はる。

この地方は古來利根川の氾濫によりて、地形屢變遷し、或は田畑の河道となり、或は河道の田圃となりし所、極めて多し。利根川の沿岸地方に矢島・小島・田島・備前島・前島・武藏島・前小屋島・二小屋島・中島(以上は武藏新田郡)・善島・小島中島・臺中島・高島・向島(以上は武藏國大里郡)等の地名の存するを見ても、またこれを知るに足るべし。

弘安元年(1178)の頃は岩松經兼道受、建武元年(1334)の頃は岩松直國この地方を領有せり。またその頃、領地なりし横瀬は、武藏國大里郡に屬す。この地方は、岩松・大館・堀口諸氏の興りし所なれば、名勝史蹟頗る多し。今その主要なるものを擧ぐれば、次の如し。

- 岩松館址 岩松八幡宮 青蓮寺 金剛寺
- 義國神社 堀口館址 二ッ小屋舟橋 安養寺
- 大館館址

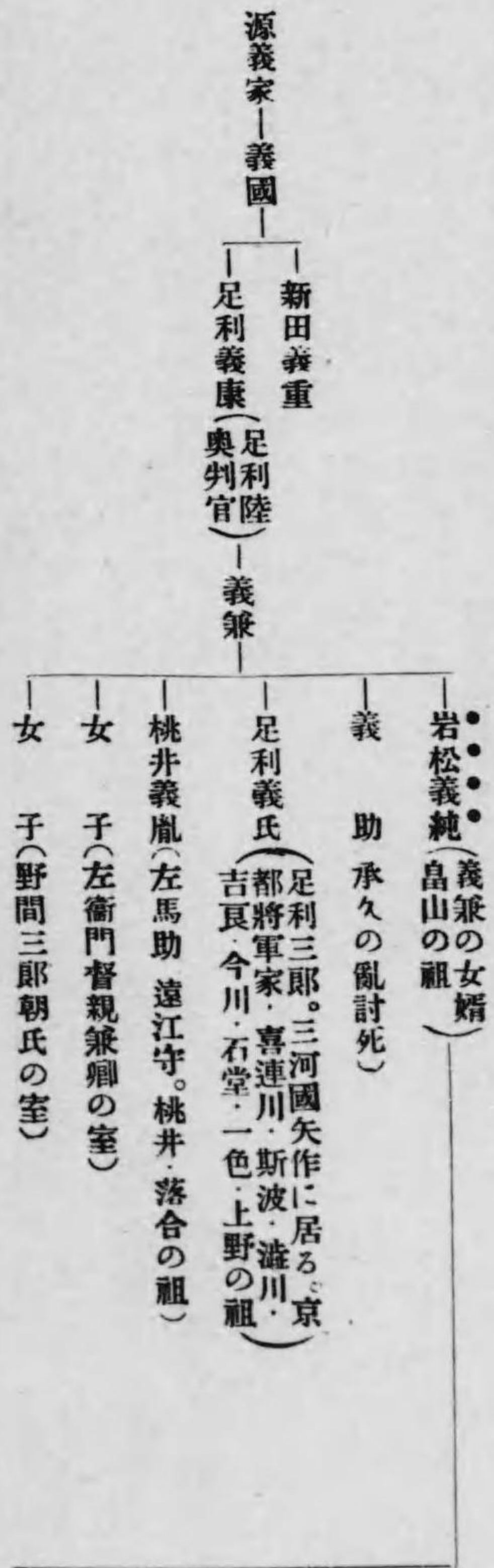
岩松館址と岩松氏 岩松は、尾島町の東部に位し、もと大沼(大沼郷)といひしが、仁安三年(1188)新田義重、京都在番の時、奏聞を経て、山城國男山の石清水八幡宮(官幣大社)をこゝに勧請して、同社の境内に在りし小松を移植せしかば、石清水の石(岩)の字と小松の松の字とを取りて、岩松と稱するに至りしとぞ。

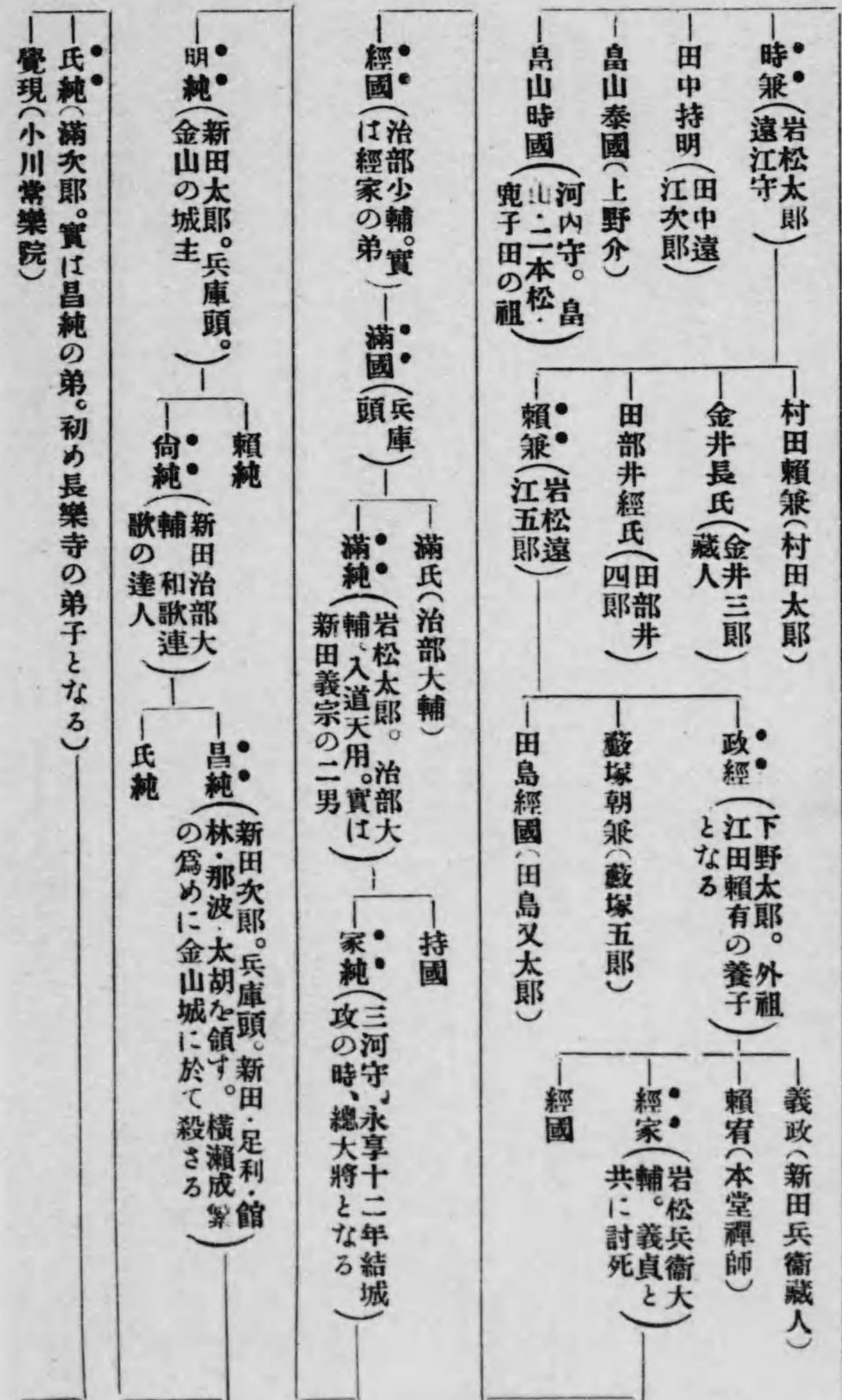
岩松氏は、この地方の領主たりしものにして、徳川幕府の時代には、百二十石の田祿を有したりしが、維新後新田氏と改稱せり。今の新田男爵は、その後裔にして、寶泉村字田島にその別邸を構ふ。

岩松氏の沿革 岩松氏は、足利遠江守藏人義純より出づ。義純は、新田義重の弟なる足利義康の孫にして、足利義兼の子なり。義兼勳賞によりて、新田郡岩松に住せし時、子の義純は、新田義重に寵せられ、長子義兼の女新田岩松禪尼(來王御前)の婿となり、岩松に館し、始めて岩松氏と稱す。後また島山氏ともいふ。その子時兼は、岩松遠江太郎といひ、嘉祿二年(1312)九月岩松郷の地頭となる。その長子頼兼(村田太郎)は村田氏を冒し、五郎經兼は岩松氏を嗣ぐ、その子政經は新田下野太郎と稱す。その母の父は、新田下野守江田頼有(徳川義季の子)なり。その子に禪師頼宥、岩松三郎經家及び直國あり。直國は、足利基氏に仕へて、新田氏の總領となりぬ。

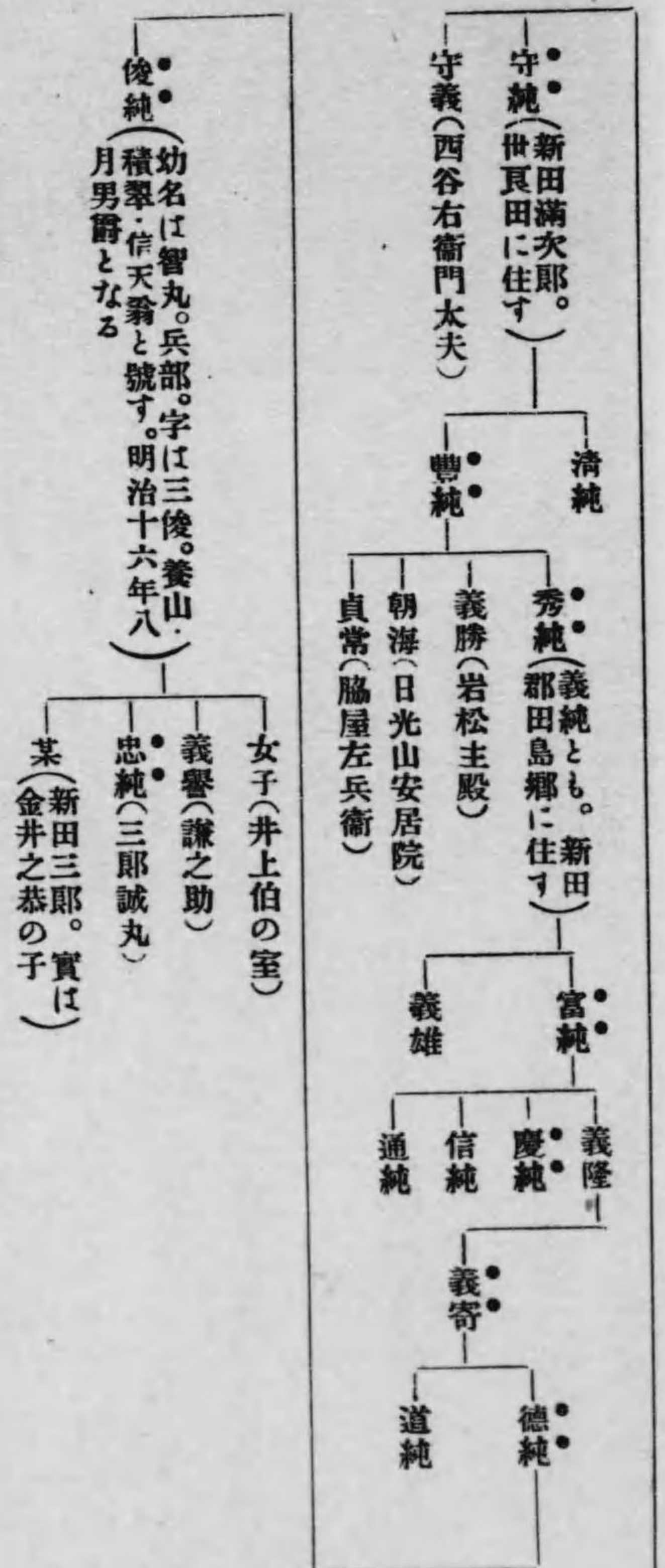
經家より經國・滿國を経て、滿純に至り、家運稍傾きしが、その子家純は、文明元年(1469)二月太田の金山に城きて、これに居り、武州猪股黨の横瀬信濃守國繁(入道宗悦)を用ひて、政務を委ねたり。爾來横瀬氏は、世々岩松氏に仕へしが、泰繁に至りて強大となり、遂に岩松家を壓倒して、太田の金山に城居し、成繁・國繁等相嗣ぐ。成繁は、由良氏と稱し、將軍足利義輝に仕ふ。その子國繁は、七郡を領したりしも、北條氏直に黨せしかば、秀吉の爲めに、金山城及びその領土を沒收せられたり(其城址の節を参照せよ)。

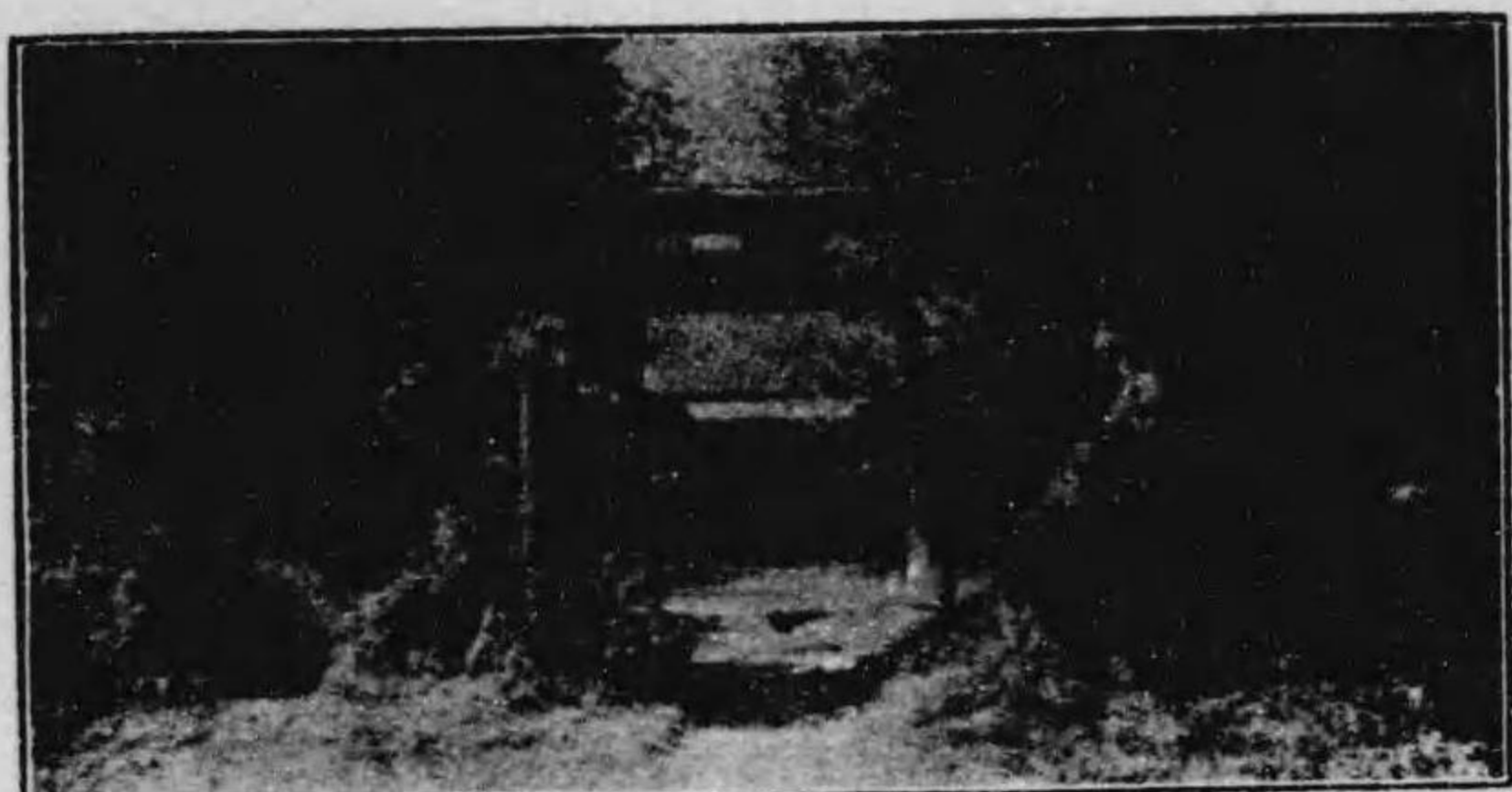
○岩松氏の略系(新田氏その他諸氏の略系を参照すべし)





新田の總鎮守岩松八幡宮 尾島町字岩松に在り。仁安三年(1168)新田義重、京都在番の時、奏請して、山城國男山の石清水八幡宮(官幣)を勸請し、皇室の鎮護、新田氏の神、岩松氏の産土神、封内の大鎮守となしたるものなり。爾來本社は、新田總鎮守の社と





岩松八幡宮

して知られ、新田氏諸族の崇敬甚だ深かりき。祭典は、毎年八月に行はれ、遠近より詣づるもの多し。境内は、幽邃閑雅にして森嚴、社殿は、壯麗を極む。同社の社司太田氏は、新田氏等に關する古文書を多く藏せり。

青蓮寺と義重の邸址 尾島町字岩松に在りて、岩松山と號す。島山六郎義純(新田義重の弟なり)の建立にして、日限地藏尊を安置す。寺名は、義純の子遠江太郎岩松時兼の法號たる青蓮寺殿より名づけられたるものなり。當寺の境内は、新田氏の太祖義重の邸址にしてその父義國もまたこの地に住したることありき。

金剛寺と板碑 尾島町の金剛寺は、舊新田莊の古刹にして、岩松直國(法號は金剛寺殿)の開基に係る。境内には 正和四年(一三

15)・元徳元年(1329)・貞和二年(1346)・觀應二年(1351)・延文元年(1356)・永正十八年(1521)・大永二年(1522)の年代を銘せる板碑ありて、好古家の往て見るもの多し。その附近なる源義國の墳墓ある地には、義國神社あり。

田島と田島氏 寶泉村の上田島、尾島町の下田島及び西出島は、岩松經兼の子田島又太郎經國の領せし所なり。

堀口館址と堀口氏 尾島町の東南部を堀口といひ、利根川の支流早川に沿ふ。この地は、堀口次郎家貞(大館次郎家貞の三男)の孫貞滿の住せし所なり。貞滿は、大館氏明等と共に、義貞に屬して、勳功ありき。

○堀口氏の略系(新田氏その他諸氏の略系を對照すべし)

源義家—義國—新田義重—義兼—義房—政義—大館家氏—堀口家貞(堀口次郎)

貞義(堀口左馬權頭)—貞義(美濃守)—一井貞政—政家—氏政—義時

貞滿(美濃守)—貞祐(堀口四郎掃部介)—行義(掃部介)



利根川の舟橋

二小屋の舟橋と船繫松 二ツ小屋とは、利根川の北岸地をいひ、武藏國大里郡江原との間に舟橋の設ありて、往來に便にす。元弘三年(1333)五月新田義貞、鎌倉征討の時、この所を渡りければ、また旗の渡の名あり、橋畔に立ちて、徐に當時を懷想せば、浮沈千古の状を偲ばしむ。刀水もまた漾々として、昔時を語るに似たり。附近の龜岡は、義貞が甲信越の軍兵の到るを待ちし所にして、船繫松と稱する松あり。

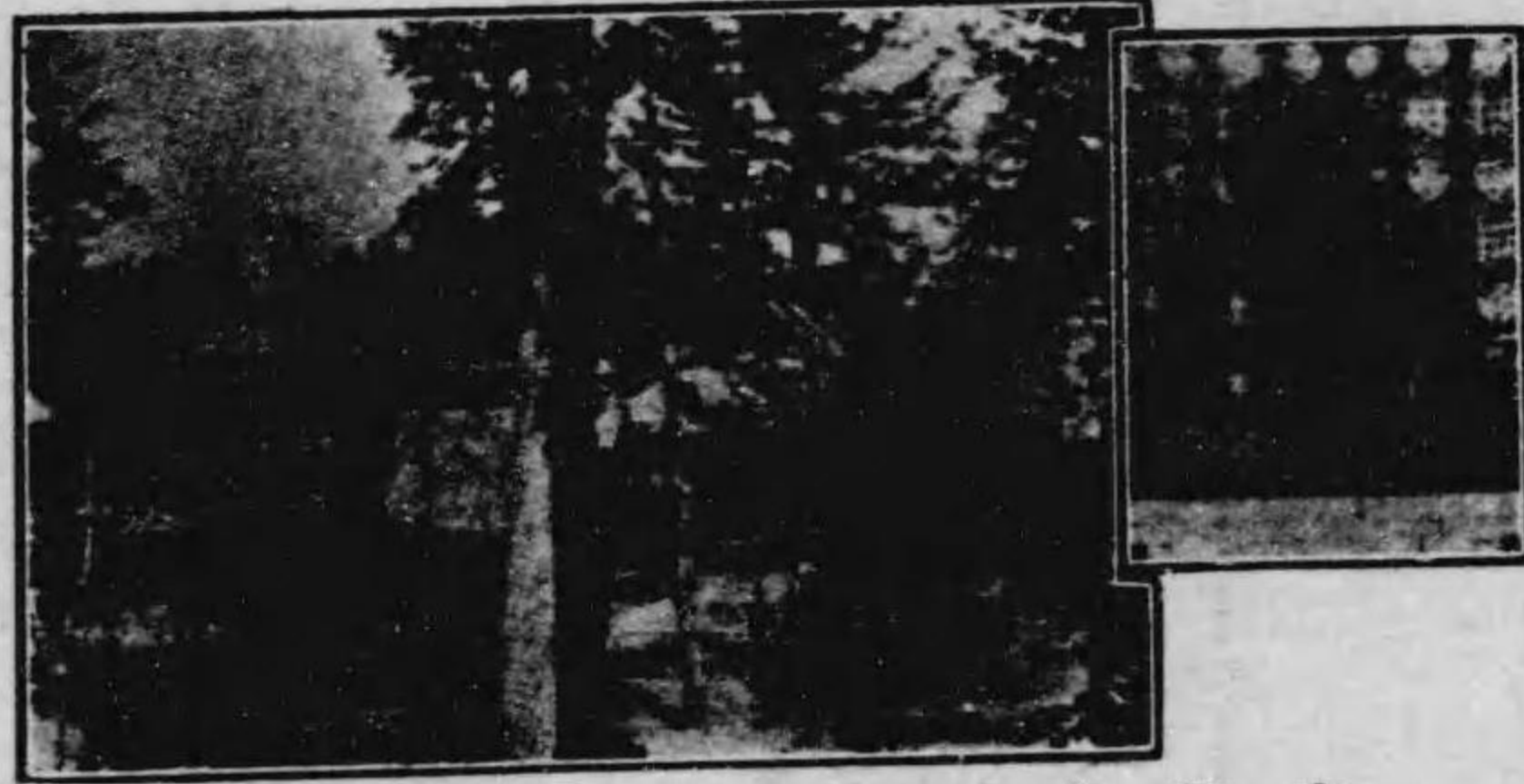
一、登村藤三、秋、分明兄弟相闘、蓬窓夢破蕭々雨、人在東寧萬里舟。

梁川星巖

毛武分風土、一川界二州、田崎半桑樹、道路稍陵丘、偶遇江門客、日乘刀水舟、試詢程遠近、四百里長流。

山田方谷

安養寺と新田氏 尾島町の西部を安養寺といふ。新田又郎政氏の子に安養寺快義といへるものあり。また同七男



安養寺と新田義重の像

に安養寺律師貞氏といへるものあれば、これ等の武將は、この地方に住せしものなるべし。

天台宗安養寺と義重の肖像 尾島町字安養寺に在りて、明王院と號し、俗に觸不動堂と稱す。世良田を距ること約二十町。この寺は、天台宗の古刹にして、開山を賴空上人となす。

康平四年(1061)源賴義、冷泉天皇の勅を奉じて、この寺に源家傳來の金佛不動尊(高さ一丈八分)を安置せしが、その後堂宇甚だ荒廢せしかば、建久元年(1190)新田義重これを再興せり。次で元弘三年(1333)五月新田義貞大塔宮護良親王の令旨を奉じて、義旗を生品の社頭に掲げし時、支族大井田經隆の弟、羽黒修驗者俊賢をして、この尊像を行厨に收め、甲信越の軍

兵を集めしめたり。爾來この不動尊を軍令不動といひけるが、後世轉訛して布令不動
または觸不動といふに至りぬ。

義貞は、鎌倉征討後、建武元年(1334)安養寺殿新田義重(當寺の位牌には、安養寺殿上西大禪定門と記す)追福の爲
めに、新田氏本宗の菩提寺として、當寺を修築せり。されども義貞の王事に仆れし後、
康曆二年(1380)當寺は、足利氏の爲めに焼却せられ、六門六供悉く烏有に歸したり。よ
りて今の本堂及び二重塔は、慶安年中(1648—1651)の建築に係る。

寺寶には、新田義貞の筆なる巻物縁記一卷、金光明最勝王經・法華經・賴義の筆なる俱
利加羅不動明王の畫像など見るべきもの多し。

不動堂は、寶曆元年(1761)の建立に係りて、輪奐の美を極め、新田義重の肖像を安置
す。この像は、新田義重が自ら工に命じて、刻せしめたるものと傳へ、世にこれを御影
像といふ。軍楯の上に坐して、普通の不動の如く、背に火焰を負はずして、右手に劍を
握り、軍勢を指揮する姿は、威儀嚴として、よくその風采を偲ぶに足るべし。毎年三月

及び十月二十八日の縁日には、靈驗ありとて、參賽する徒少からず。

要するに寺域には、空濠の址を存し、老樹蒼蔚として幽邃を極むれども、梅櫻躑躅な
どの開花せし時は、妖艶人に媚び、頗る美觀を呈す。

大館と大館氏 大館は、尾島町の西南部を占めて安養寺の南に在り。この地は、新
田氏の館ありし所と稱せらる。新田又太郎政氏の弟家氏は、大館次郎といひ、その子宗
氏は義貞に従ひ、鎌倉極樂寺に於て戰歿し、その子氏明は、脇屋義助に屬し、伊豫國温泉
郡湯山に於て死したり。

○大館氏の略系(新田氏その他諸氏の系譜を參すべし)

源義家—義國—新田義重—義兼—義房—政義—

政氏(新田又太郎の母)
(は足利義氏の女)

大館家氏(大館次郎)—宗氏(大館次郎の十八日鎌倉に於て討死)

幸氏(中務大輔、建武三年江州觀音寺に於て討死)

氏明(左馬介。曆應三年) — 義冬(治部大輔) — 氏信(中務少輔) — 持房(上總) — 教幸(治部少輔) — 政重(陸奥守)
 氏明(江州に於て討死) — 氏信(少輔) — 持房(上總) — 教幸(治部少輔) — 政重(陸奥守)
 氏兼(大館彦三郎) — 綿打太郎爲氏

高信(兵庫頭) — 晴忠(治部大輔)
 元重(治部大輔)

世良田村と舊新田莊 世良田村は、新田郡の南西部に位する舊新田莊の地にして、人口約六千六百人あり。この地は、昔時長樂寺領なりしが、今は三ッ木・女塚・八木沼・高岡・平塚・出塚・徳川郷・粕川・今井小角田等に分たる。舊例幣使街道は、女塚・三ッ木・小角田・江田等を経て、木崎に通ず、また利根川に於ける平塚の渡は、古來武州熊谷方面より伊勢崎・前橋地方に至るべき要津なり。
 世良田村より木崎町へは約三十町。太田町へは約二里二十二町。境町へは約十町。伊勢崎町へは約三里。

武州深谷町及び本庄町へは各二里半。

上野國志(十六卷)の著者毛呂權藏は、この地の人にして、諱は義卿、念往と號す。

實にこの地は、新田氏・徳川氏及びその諸族の發祥せし所なれば、舊蹟・社寺など頗る夥しく、歴史家に好資料を與ふ。今その主要なるものを列擧すれば、次の如し。

- | | | | |
|----------|-----|-------|--------|
| 徳川郷 | 永徳寺 | 滿徳寺 | 村東照宮 |
| 新田義重夫妻の塔 | 長樂寺 | 郷東照宮 | 八阪神社 |
| 總持寺 | 清泉寺 | 二體地藏塚 | 平塚毘沙門天 |
| 米岡村の古墳 | 今井 | | |

徳川氏の發祥地徳川郷 世良田村大字徳川郷は、東鑑に所謂得河の地にして、新田郡の南部に位す。東は出塚に接し、西は平塚に隣り、北は世良田と堺し、南は利根川を隔て、武藏國大里郡中瀬村と相對す。
 この地は、徳川氏の發祥せし地なるが故に、徳川幕府は、特にこの地方の人民を優待

して、年々その租税及び課役を免除し、また利根川の堤防修築の際には、御廟御館跡圍之堤と記さしめたるほどなりき。如何に徳川氏が祖先發祥の地を重んじたりしかを知るに足るべし。かくて幕府時代に於ては、村民大に天領の威を藉りて、他村の人民を抑壓せし風ありしが、他村の人民もまたこれを別格者として、敬遠したりしといふ。現時東照宮の社掌たる正田隼人氏の祖先は、徳川頼氏(世良田孫四)の三男三郎満氏に仕へし以來、世々郷務を司り、幕臣として十萬石の格式を有せし名家なりしかば、今尙ほ氏の家には、徳川氏に關する多くの文書類を藏す。

徳川氏の歸依せし天台宗永徳寺 徳川郷字本郷に在る天台宗の古刹にして、大同元年(806)傳教大師の高弟宥海上人の草創に係り、慈覺大師製作の藥師如來を本尊とす。當寺は、久安年中(1145—1151)新田義國の祈願せし靈場にして、建久年中(1190—1198)世良田山長樂寺の開山榮朝禪師が蓮華流灌頂の大壇を設置して、その流法を傳へしこと、九百ヶ寺に及びし頃は、當寺の住職も、またその教職に列する榮譽を有したりき。

その後建仁三年(1203)新田義重の第四王子義季が徳川郷大館・出塚・平塚・中島・八木沼の六ヶ村を領有し、徳川四郎と稱せし以來、頼氏・教氏・家時・滿義・政義・親季・有親に至る八代の歸依最も深かりしを以て、凋落の史を見ざりき。然るに貞和三年(1347)十一月有親の子親氏が三河國松平に移住せしに及びて、堂宇は漸次荒廢するに至りぬ。次で天正十九年(1591)徳川家康は、當寺に朱印五十石を與へしかば、稍、舊觀に復することを得たり。されども明治維新後は、また昔日の如くならず。寶物には、徳川諸將軍の朱印狀等あり。

時宗滿徳寺と天樹院尼 滿徳寺即ち俗稱縁切寺は、徳川郷永徳寺の附近に在り。時宗遊行寺派の道場にして、相模國鎌倉郡藤澤町の清淨光寺(遊行)に屬す。當寺の開創に就きては、異説多けれども、徳川禁令考などの記する所に據れば、淨念尼(徳川義季の女義姫君)當寺を創め、淨院尼(徳川義季の二男三河守頼氏の女)源成經の二女慈圓及び念空等相繼ぎて、念佛を修め、冥福を祈りしものゝ如し。

中世に至りて當寺は、衰運に傾きしが、慶長年中(1596—1614)徳川家康は、その祖先と因縁淺からざりし寺院なるを以て、これを復興し、寺領百石を寄附し、その童名の満徳丸に因みて、満徳寺と名づけたり。また當寺を俗に縁切寺と稱するは、若し妻女が離婚を企望して、當寺に入る時は、則ち自ら出家と認めらるゝが故に、その夫は再びこれを娶ること能はざりしより、かく名づけられたるものなりといふ。

徳川秀忠の嫡女千代姫即ち天樹院尼は、初め豊臣秀頼に嫁せしが、元和元年(1615)五月大阪落城の際、秀頼自殺せしかば、刑部局等と共に、當地に來たりて、當寺を中興し、徳川氏累代の納牌所と定めたり。

明治維新後、當寺は、殆んど廢絶の姿となりしが、有志者の斡旋によりて、これを復興せり。されども今は、昔日の如くならずして、只だ護國堂に佛像・徳川氏累代の靈牌等を安置するのみ。寶物としては、尊超法親王の筆なる満徳殿及び東照宮の兩額あり。

村社東照宮と徳川氏累代の墳墓 世良田村大字徳川郷字石代に在りて、徳川家康を



東 照 宮

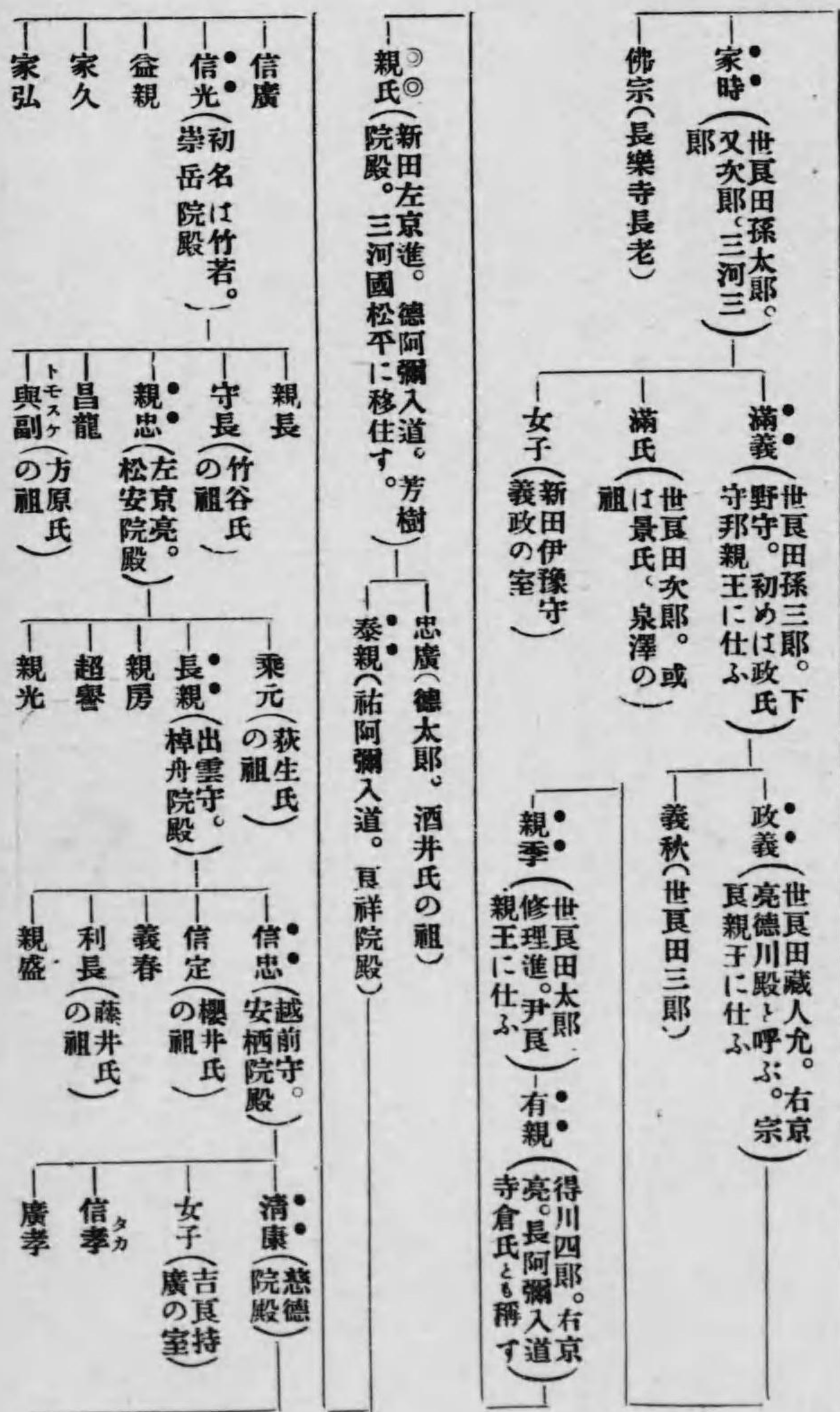
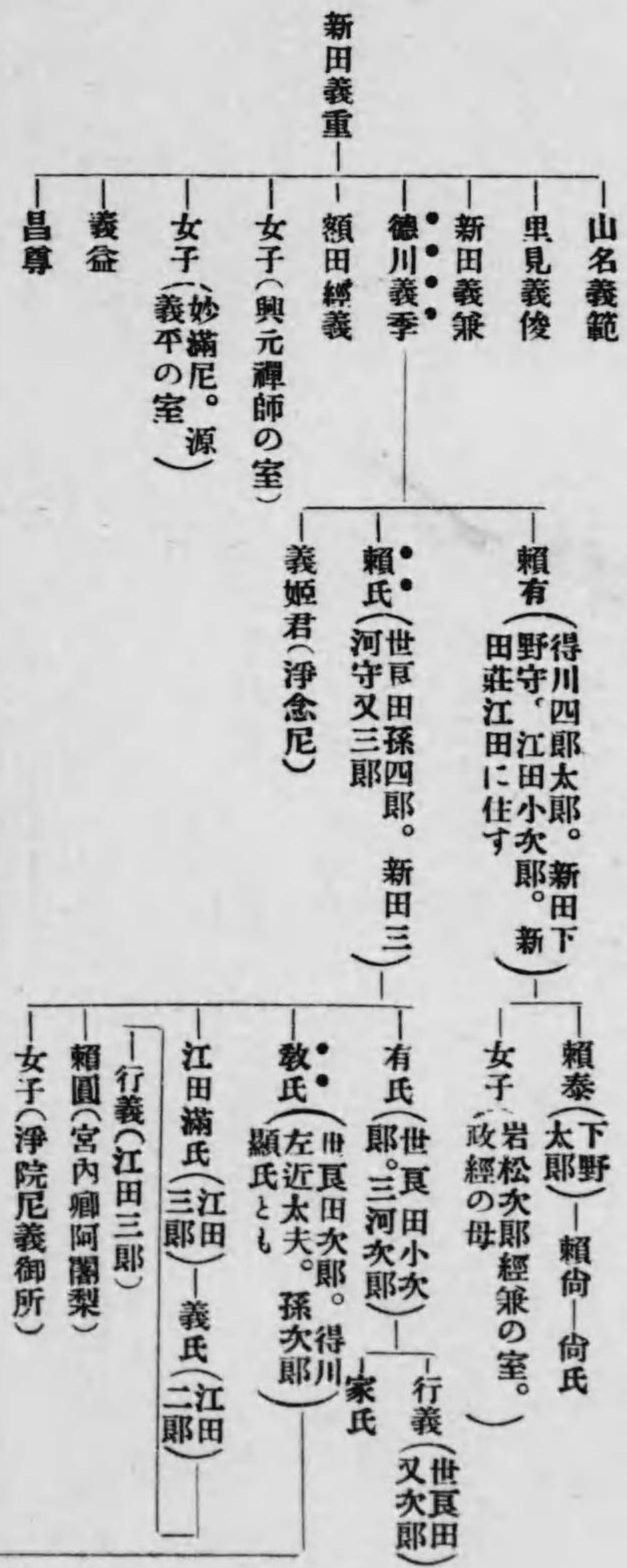
祀る。境内に徳川義季(得川四郎)・頼氏(世良田孫四郎)・教氏(世良田次郎)・家時(世良田又二郎)・満義(世良田孫二郎)・政義(右京亮)・親季(修理進)・有親(右京亮長)八代の墳塋あり。正田隼人氏の所有地内に存する新田義重夫妻の東御廟に對して、これを西御廟といふ。

徳川義季の徳川郷等六ヶ村を領有せし時、建仁三年(1203)北館(今の正田隼人の邸址)に城居せり。これを徳川氏の太祖となす。その後九代親氏(1332—1394)は、貞和三年(1347)十一月三河國東加茂郡松平に移住せし頃、西御廟所に堂宇を建て、徳川氏御廟・御館址となして、厚くこれを崇敬せり。

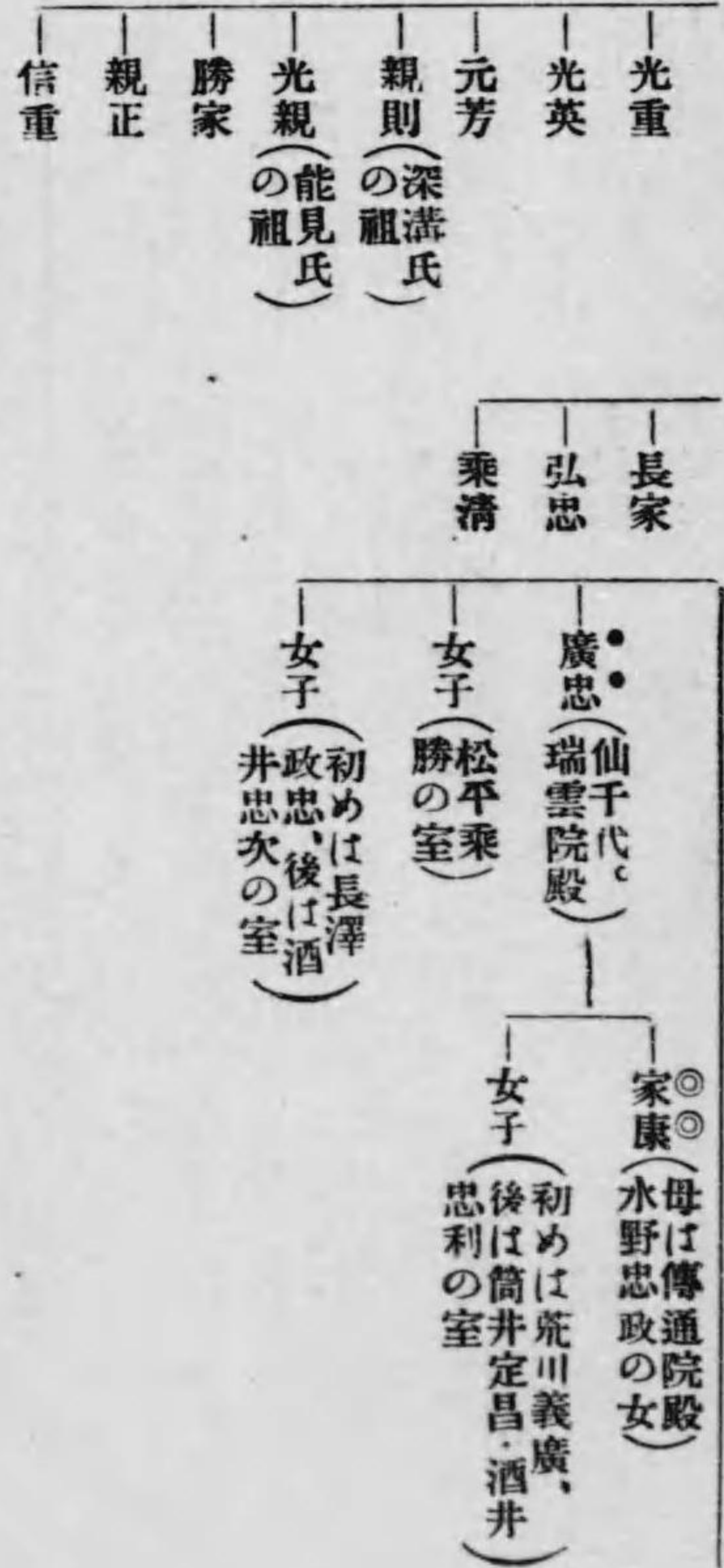
次で天正十九年(1591)徳川家康は、朱印三百石を下賜し、守護不入地と定む。寛永年中(1624—1643)家光は、東照宮を建立して、徳川氏累世これを修葺することゝなしぬ。明治

九年官、東照宮を村社に列す。社後に周圍九尺に餘れる大榎二株ありて、古昔の史乘を語るもの、如し。

○德川氏の略系(新田氏その他諸氏の略系を参照すべし)



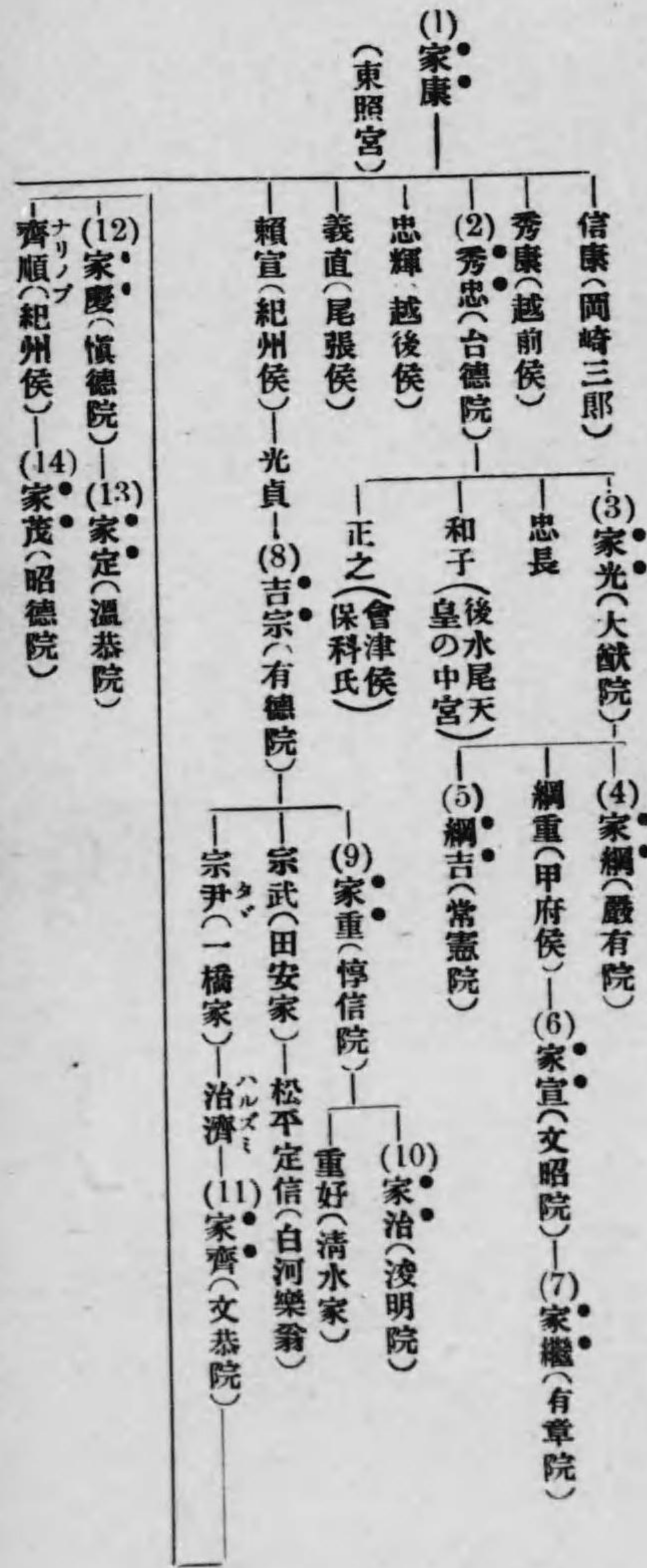
久親

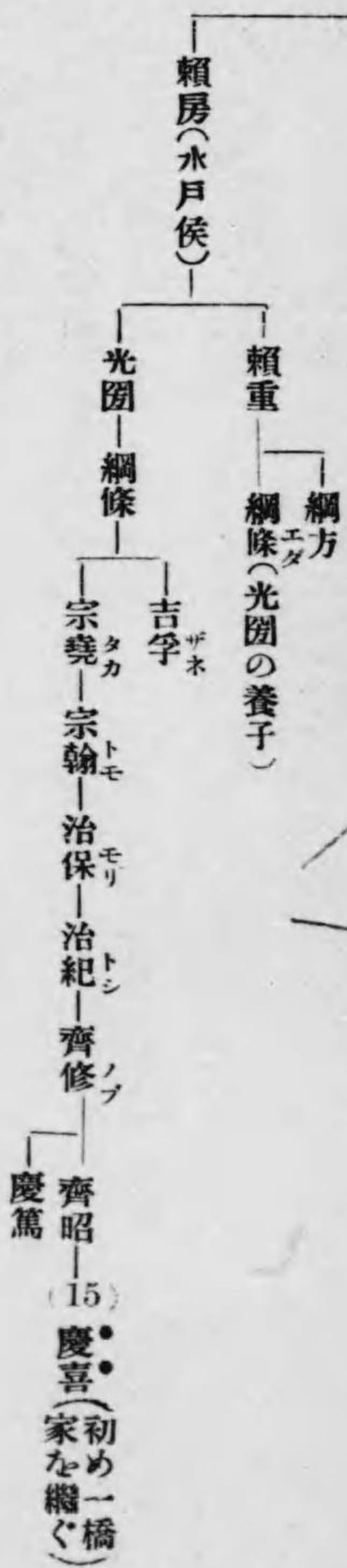


貞和三年(1327)十一月徳川親氏は、世良田より三河國に移り、酒井氏の女を妾として、忠廣を生み、東加茂郡松平村(岡崎の東北)に住せり。よりて徳川氏は、義季より有親に至るまで八代を世良田徳川といひ、親氏より後を松平徳川といふを得べし。親氏は、次で郷主松平太郎左衛門(在原信重)の女龜子を娶りて、松平氏を冒し、松平次郎三郎信武ともいへり。こゝに於て横瀬・大澤等の舊臣、世良田より三河に移住せしもの多し。親氏の後、泰親・信光・親忠・長親・信忠相繼ぎて、三河の半を領有するに至れり。清康の時、岡崎に城き、その子廣忠は、

三河守となりて、治をこゝに創めぬ。廣忠は、則ち家康の父なり。

八幡太郎義家の子、式部大輔義國、其子新田大炊助義重(中畧)。義家より代々嫡々なれども、義貞の威勢に仍り、それに從て仁田の内徳河の郷中におはし給ふ。故に徳河殿と申し奉りき。義貞尊氏に打ちまけ給ふ時、徳河を出でさせ給ひてより、申有の衆生の如く、何くと定め給ふ所もなく、拾代許りも此方彼方と御流浪被成あるかせ給ふ。徳阿彌の御代に、時にならせ給ひて、西三河坂井の郷へ寄せ給ふ云々。(三河物語)





新田義重夫妻の墓塔

徳川郷東照宮の附近、正田隼人氏の邸内に在りて、東御廟と稱す。新田義重及びその室(豊島下野權守源親廣の女)は、老いて四男徳川義季の世良田館に住し、義重は建仁二年(1202)正月十四日、その室淨貞尼は元久二年(1205)四月三日を以て逝去せり。七百餘年前の古碑今尙ほ存し、人をして懐古の念を生ぜしむ。

天台宗長樂寺と徳川岩松兩氏の墳塋 世良田村大字世良田村に在りて、世良田山と號す。木崎驛及び境驛を距ること約半里。群馬縣屈指の天台宗道場にして、釋迦如來を本尊とし、後鳥羽天皇の勅願所たり。



長樂寺と勅使門

沿革 承久三年(1221)九月二十八日新田義重の四男徳川四郎義季(榮朝禪師の偏諱を取、りて入道榮勇といふ)は、千光國師榮西の高弟にして蓮華院の僧たりし榮朝禪師(初め上野國碓氷郡中宿村の蓮華寺に住す)を開山とし、禪寺を建て、世良田山長樂寺と稱し、世良田徳川氏の香華寺となしぬ。時に後鳥羽天皇は、東關最初禪窟といへる勅額を義季に與へて、關東十刹の一に加へしめられたり。
關東十刹 鎌倉五山記によれば、禪興寺・瑞泉寺・東勝寺・萬壽寺・大慶寺・興聖寺・東漸寺・善福寺・法泉寺・長樂寺・扶桑五山記によれば、瑞泉寺・禪興寺・東勝寺・萬壽寺・長樂寺・國清寺・大慶寺・圓福寺・善福寺・雲岩寺也。
應永の頃(1394-1427)當寺は、平塚八木澤青根(今の小角田・三ツ木等の地を領有し、また文永年中(1264-1274)には法照上人(名は琛海、字は月船)文明年中(1409-1486)には松陰といへる二大傑僧の出づるありて頗る隆盛を極めたり。次で

永正十七年(1520)六月後柏原天皇は、當寺に宣旨及び勅印を授けて、關東に於ける僧院僧官の事を管掌せしめられしが、この頃より當寺は、眞言宗となりぬ。かく一時は、隆盛を極めたる當寺も、室町幕府の末葉より、漸次非運に陥りたり。

寛永十七年(1640)徳川家光は、祖先の廟塔ある靈場の衰微せるを深く嘆惜して、慶長中家康の與へたる田祿一百石の外、更に三百石を寄附し、三宗兼學の碩僧天海僧正(慈眼大師)をして、勅額門を始め、堂塔伽藍を修繕せしむ。爾來當寺は、再び舊觀に復することを得、天台宗の中本山となり、三百二十七の末寺を有して、關東屈指の巨刹となれり。

次で寛永二十一年(1644)十月家光は、酒井讚岐守忠勝を遣はして、太刀馬代を獻じ、併せて本尊三體を寄せたり。現存する本尊釋迦牟尼如來・文珠・普賢の像は、則ちこれなり。時に家光は、また境内に東照宮(明治八年長樂寺より分離す)を建てぬ。かくて當寺は、徳川幕府の頃には、その保護によりて、凋落の史を見ざりしが、維新後次第に衰へ、堂塔もまた甚だしく荒廢するに至れり。開山榮朝禪師より現住晃觀に至るまで六十二世、約六百八十年。



新田義季の木像と墳墓

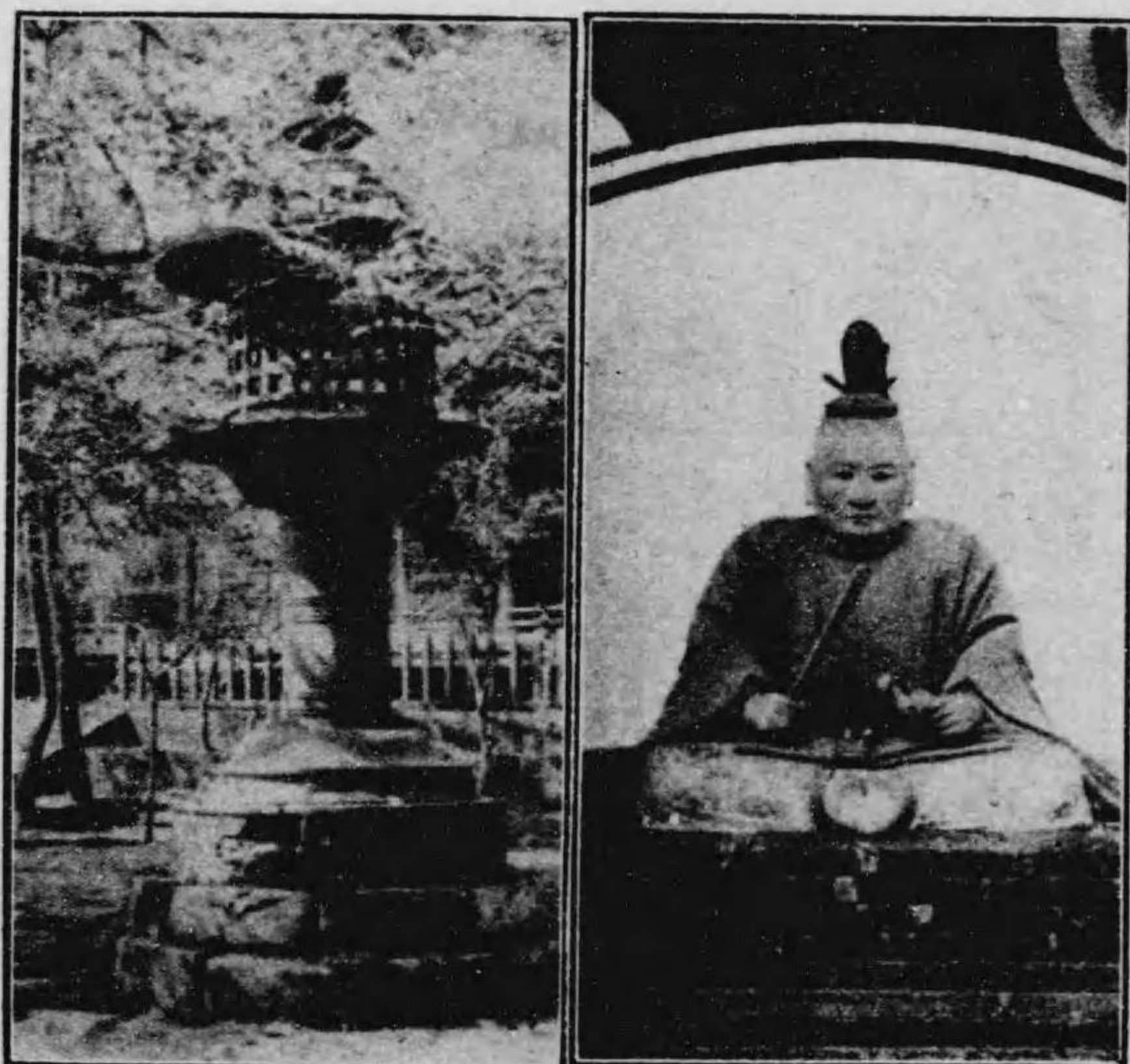
寶物 寺寶の夥しきことは、群馬縣中第一に位す。殊に著名なるものには、開山の塑像・徳川義季夫妻の木像・無準佛鑑禪師像・榮勇大禪定門の影像・慈慧大師の像・後鳥羽天皇の勅額・後醍醐天皇及び後圓融天皇の宸翰・後柏原天皇の宣旨及び勅印・後陽成天皇の宸筆・後水尾天皇の勅額五面・智證大師の筆なる不動尊・傳教大師の書・成良親王及び守邦親王の寄進狀・源賴朝・政子・新田義重・同義貞・同義宗・由良成繁・足利尊氏・高師直・足利義詮・徳川家康等の古文書・巨勢金岡の筆なる山水書・狩野元信の筆なる山水書・兆殿司の筆なる十六羅漢・雪舟の畫ける達磨・近衛三藐院の描ける畫等あり。その他古書・古器物の類、頗る多くして、悉くこれを列擧すること能はず。また正曆二年・正安三年・徳治二年、

文和三年・暦應二年・正和二年・元徳三年の刻字ある古碑あり。

建築物 境内は、甚だ廣くして、七千四百餘坪に及び、老樹繁茂して、頗る幽邃を極む。堂宇の内、開山堂・勅使門・鐘樓は、徳川幕府初代の建築、本堂・庫裡・表門・大師堂・寶藏などは、同第十世頃の造營に係る。殊に朱塗の勅使門と三佛堂とは、雅趣の評あり。勅使門附近の小池に架せらるる橋は、則ち後鳥羽天皇の勅額を賜はりたる渡月橋にして、その風致は、眞に愛すべし。

開山堂には、徳川義季及びその室の木像・開山榮朝禪師の塑像(日本支那印度三國の土を以て、禪師の自作せしものと傳)を安置す。みな在世の時の彫刻製作にかゝるが故に、今より約七百年前のものにして、古色蒼然たり。堂の後に開山以來各世代の墓塔あり。

墓塔 開山堂の西方に槭等の樹木蔭蔚せる一小丘(高さは約三十尺、面積は約二百坪)あり。丘上には、文珠の石像あれば、この丘を文珠山と名づく。徳川義季・岩松守純・豊純・秀純・富純・孝純・溫純・徳純・道純・俊純など夫妻の墓塔は、こゝに累々たり。



籠燈の鐵變南と像神の康家

郷社東照宮と三十六歌仙の額 當社

は、寛永二十一年(一七〇四)十月十一日徳川家光が酒井忠勝等に命じ、日光より家康の像・神寶及び社殿を長樂寺の境内に遷して、造營せしめたるものなり。當時幕府は、神饌料として、二百石を寄附し、且つ社殿の修築等は、一切幕府の負擔する所なりしが故に、本社・拜殿・唐門等の壯觀なること比なし。

維新後、當社は、明治八年三月長樂寺より分離して、同十二年十月二十六日郷社に列せらる。境内は、約四千二百坪



八阪神社と祭禮

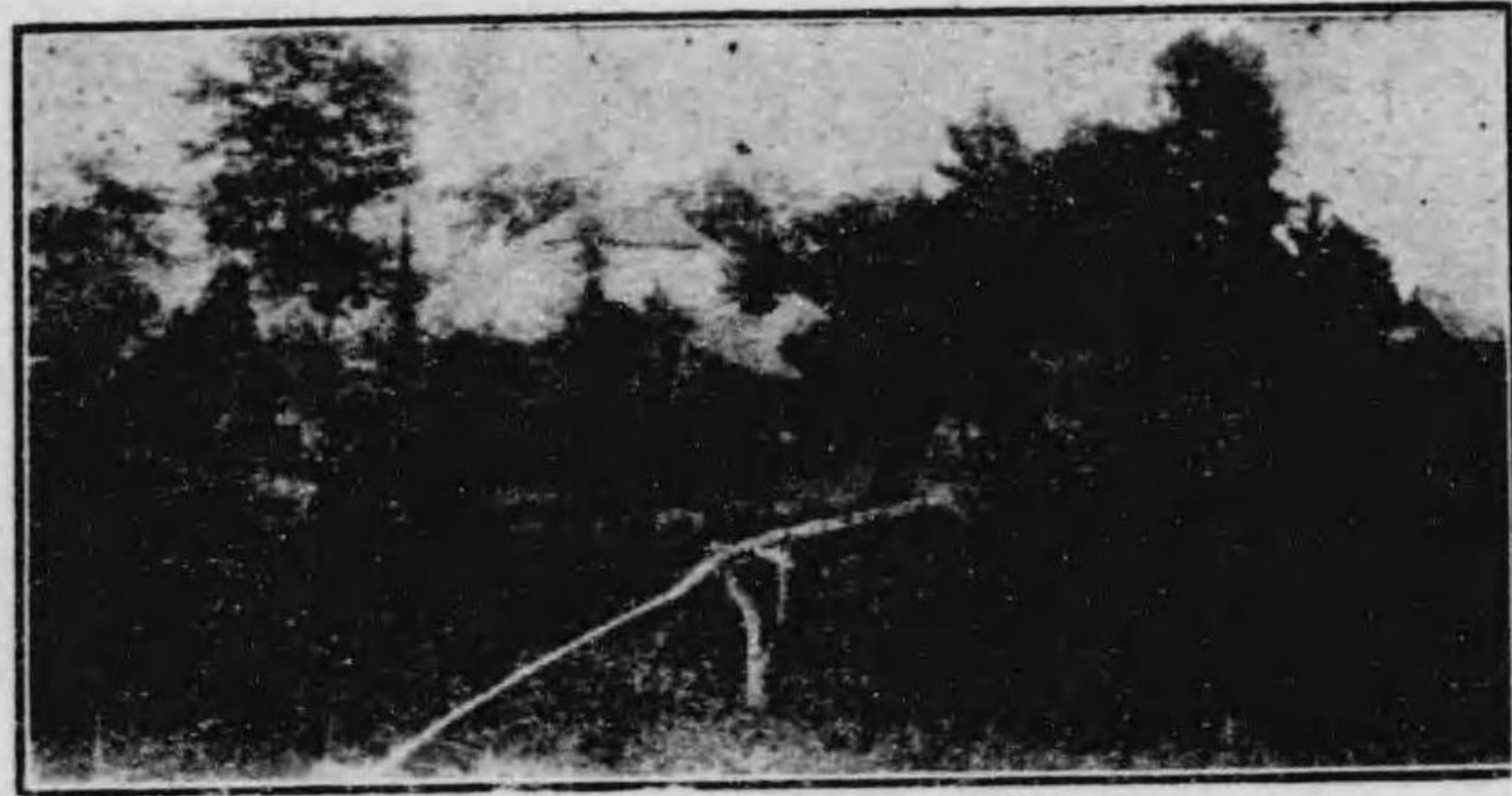
ありて、花木多く、花時には頗る美觀を呈す。社前に在る南蠻製の鐵燈籠は、世に喧傳せらる。例祭は、毎年四月十七日。寶物には、後水尾天皇宸筆の勅額及び勅納の太刀・家康の像・甲鎧及び筆蹟・三十六歌仙の額・朱印狀等あり。殊に三十六歌仙の額は、狩野元信・休伯源四郎等の筆なりといふ。郷社八阪神社と天王祭 八阪神社は、世良田村大字世良田村に在る郷社にして、素戔鳴尊を祀る。俗にこれを祇園社といふ。後醍醐天皇の皇孫尹良親王の子良王君は、寺尾城に生れ、應永年中(1394-1427)尾張國海東郡津島町鎮座の縣社津島神社(俗に津島の天王社といひ、舊六月十四五日の大祭は、世に喧傳せらる)の神主となりぬ。爾來良王君をまた津島の宮とも稱す。

尹良親王 後醍醐天皇の皇子護良親王の弟なる靜尊法親王の子なり。

法親王は、また聖護院宮・惠尊法親王・尊珍法親王ともいへり。元中三年(1326)徳川親季は、親王を寺尾城に迎ふ。同四年冬、良王君生れしかば、親季これを保護せり。

こゝに於て世良田・新田・横瀬の諸族は、津島神社の分靈を請ひて、本社を創建し、世良田天王または新田天王と稱す。その後これ等諸族の外に、織田氏の崇敬も深くして、今尙ほ本社の兩扉に同氏の定紋を存せり。寶物には、太刀・獅子・甲冑・銀環・龍笛等あり。祭典は、毎年四月十五日に小祭を、七月二十四五日に大祭を行ふ。世にこれを天王祭といふ。殊に七月十五日・七月二十五日の兩日には、神幸式行はれて、神輿の渡御あり。十五日の夜に行はるゝを御隠居と呼び、二十五日に行はるゝを御當主と稱す。維新前には、赤裸の壯漢、神輿に蟻集して、掛け聲勇ましく、これを昇ぎ廻り、頗る壯觀を呈したるものなり。祭日には、遠近より參拜の客、陸續として群集し、露店は賽路の左右に櫛比して、その雜沓名狀すべからず。

境内には、老松巨杉鬱蒼として生ひ茂り、瀟洒にして雅致あり。神樂殿の前に高く天



新田館址

を衝く松樹あるは、則ち高貴松にして、樹側に大鈴を祀れる小堂あり。實に本社よりは、遙に日光・赤城・榛名・淺間の諸山を望むを得べく、眺囑もまた佳なり。

新田館址と總持寺 世良田村大字世良田村に在る眞言宗の寺院にして、小俣の鶏足寺(足利の西北なる小俣村大字小俣鶏足の山の麓に在り。古の佛頂山世尊寺)の流を承け、威徳山陀羅尼院と號す。

東鑑に建久四年(1193)四月二十八日征夷大將軍源賴朝は、下野の那須野に狩し、歸途新田入道上西(義重)の新田館に入りて、遊覽ありきと記せるは、則ちこの地なり。仁安三年(1168)義重京都在番の時、奏請して石清水八幡宮の靈を岩松に勸請して、岩松宮といひ、その傍に眞光寺を建て、香花を供へ。また世良田の館に講摩道場を設けて、館の坊と稱



源平の墓

せり。次で義貞の時、開山慶範上人は、館の坊・眞光寺及び清泉寺(惡源太義平の菩提所)を合併して、眞光寺といひしが、第二世慶賢上人は、これを總持寺と改む。蓋し三寺院を總持すといへる義なり。

かくて當寺は、昔時新田氏累世の祈願所となり、三十六の末寺を有して、慶安元年(1648)には朱印十石を得、新田三談林の中に加へられしも、今は堂宇甚だしく朽廢し、人をして榮枯盛衰の果なきを感せしむ。本堂には、新田義貞の木像を安置す。縁日は七月二日なり。

惡源太義平の墓と清泉寺

清泉寺は、世良田村大字世良田村に在る眞言宗の道場に

して、東京湯島の巨剎靈雲寺末なり。新田義重の女妙満尼は、その夫なる悪源太義平(源朝の)が平治の亂(1159)に關して、永曆元年(1160)正月二十五日京都の六條磧に斬殺せられたる後、こゝに來住して、安元二年(1176)未の靈を弔はんが爲めに、當寺を草創せるものなり。境内には、義平の墓碑(高さ四尺八寸)あり。

北條高時の課税と二體地藏尊 世良田村大字世良田村下町の一小丘上に在り。元弘元年(1331)春北條高時は、新田郡世良田の郷に富民多きを聞き、軍資を得んが爲めに、出雲介近連・黒沼彦四郎等を遣はして、郷民に六萬貫目の課役を命じ、これを五日間に催促せしむ。新田義貞は、高時が己れの莊内を狼藉せしむるを怒りて、使人を梟殺せり。時に郷人これを葬りて、首塚と稱せしが、後こゝに二體地藏尊を安置して、その靈を弔ふ。

平塚の毘沙門天 世良田村の西南平塚村に天台宗の寺院あり。天人院と稱し、長樂寺末に屬して、毘沙門天を安置す。世にこれを平塚の毘沙門天といひ、その名遠近に聞ゆ。



石器時代の遺蹟

境内には、櫻樹に富み、花時紅雲天を蔽ひて、美觀極りなし。その南方利根川に渡津あり。平塚の渡と呼ばれ、武州熊谷地方より、上州伊勢崎・前橋地方に通ずる要路に當たる。

米岡村の古墳 世良田村には、所々に古墳を存す。平塚・女塚等の如き塚の字を有する地名の多きによりても、これを知り得べし。殊に米岡村に鎮座せる米岡神社以西の地には、石器時代の遺蹟甚だ多くして、彌生式・貝塚式の土器及び石斧・石鏃などを埋没せる所少からず。

今井と今井氏 世良田村字今井の地は、今井維氏の住せし所なり。維氏は、新田義重の三世の孫なる政氏の子なり。

新田徳川諸族の發祥地 新田名勝舊蹟誌終

大正二年九月十四日印刷

大正二年九月發行



所	きな印檢	版
偽版なり	及轉載等	著作者の
有	はのも	權



新田名勝舊蹟誌

定價金參拾五錢

著者 井原儀

發行者 萬納孫次郎
東京市赤阪區青山北町六丁目三十七番地

印刷者 高橋季吉
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所

東京市赤阪區青山北町六丁目三十七番地
振替口座東京二六一三八番

山陽堂

339
279

終